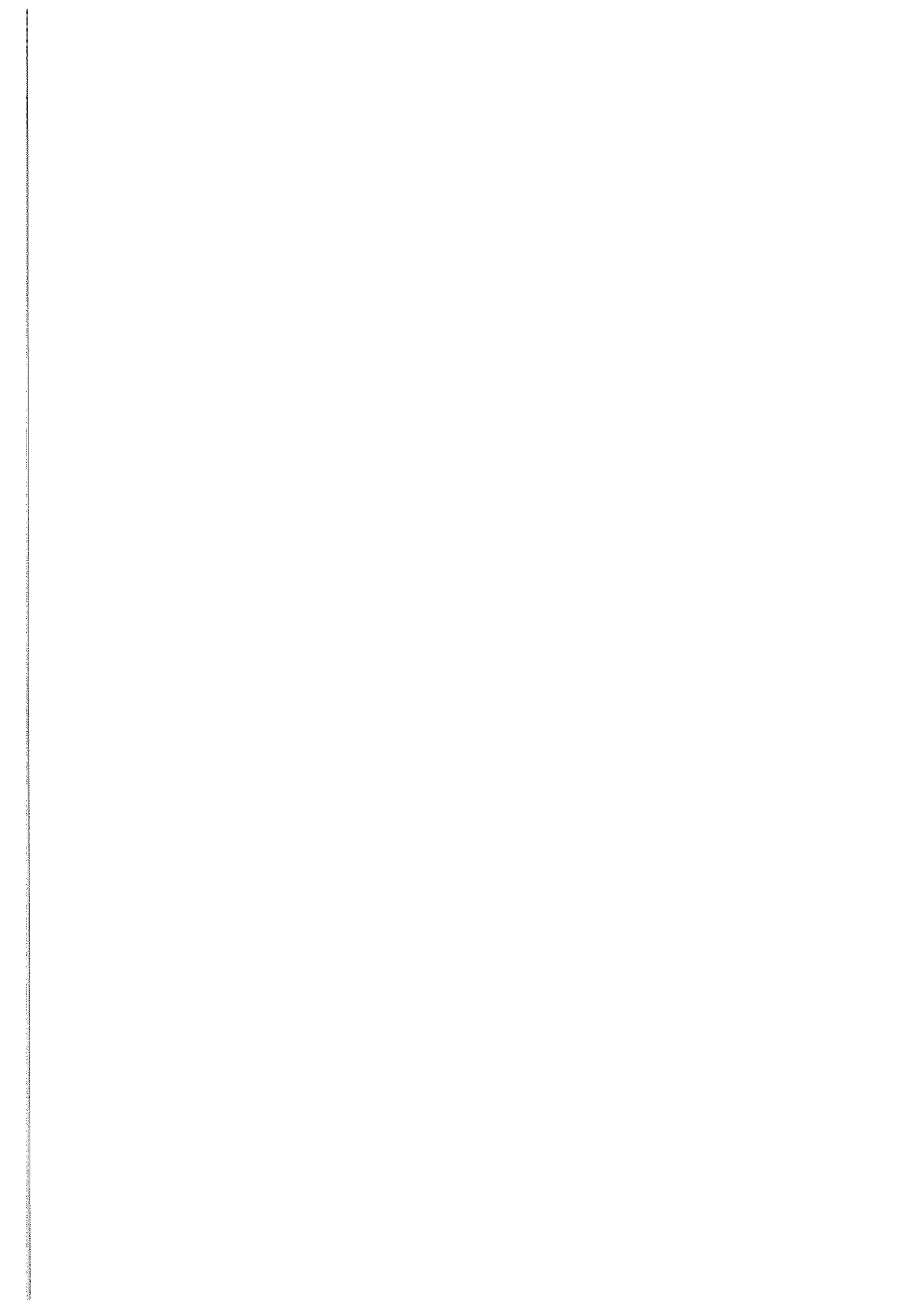


国立大学法人 奈良教育大学

持続発展・文化遺産教育研究センター 活動報告書



新たな次元に向けて

本学は、2007年に日本で初めて大学としてユネスコ・スクールに加盟し、人権、文化、環境を重視することにより、E S D、すなわち持続可能な (Sustainable) 発展《後に開発と変更》(Development) に関する教育 (Education) の構築を目指している。一方で、「大学院教育改革支援プログラム (G Pプログラム)」の一つとして、本学の「地域と伝統文化」教育プログラムが採択され、2007年から2009年の3年間の活動によりその成果を上げた。さらに、国際交流における学生交流の面で、教員養成大学としてはかなり特色のある多様な文化背景を持つ留学生を受け入れてきた。この三つの柱を縦の関係に終わらせず、横へのつながりを持たせて継続的な活動へと昇華させる目的で、このセンターが3年前に発足した。

この様な経緯を背景として、センターにはE S Dを共通の鍵概念として、人権・市民性、文化遺産、文化多様性の形容詞を持つ教育研究部門が、必要最小限の教員を以て構成されることになった。これまで毎年の活動内容についてはセンター運営委員会において年度報告の形で短くまとめられてきたが、来年度から、このセンターの三部門それぞれが発展解消的に新たな次元で活動することになったことを受け、センターの名称がなくなるものの、その理念を受け継いで横のつながりを変わりなく維持していくことを祈念して、これまでの活動を改めて『報告書』の形で残すことにした。

2014年3月

センター長 頓 宮 勝

人権・市民性教育研究部門

教授 生田 周二
特任准教授 藤田 美佳

人権、文化的多様性（多言語・多文化・多民族、ダイバーシティ）と環境を重視した持続発展教育(ESD:Education for Sustainable Development)の内容および方法について、理論的・実践的な研究と教育を行い、持続可能な社会づくりの担い手を支援する取り組みを行う。また、人権教育・市民性教育に関わる企画・コーディネーションを行う。

具体的には、本学での講義を通じて、人権意識の醸成や自尊感情の形成につながるワークショップを専門家と協働で開催したり、国内・海外からの研究者を迎えて、人権や市民性教育に関するフォーラムを実施したり、実践的な学習機会の提供に取り組んでいる。

【教育・研究活動】

1. 人権・市民性教育に関する教育・研究……ESDの枠組みの検討の一環として

(1) 科学研究費補助金（基盤研究B）プロジェクト

「子ども・若者支援専門職養成に関する総合的研究」（平成25～28年度）

子ども・若者の自立支援（子ども・若者支援）の教育・福祉的課題に資する専門職の概念と構造の検討、それに基づく養成システムの構築を行う。

(2) 学長裁量経費プロジェクト（平成24年度、平成25年度）を通しての検討

「奈良県の子どものストレスと学校・家庭生活との関連に関する調査研究」

子どもたちのストレス（抑鬱・不安、不機嫌・怒り、身体反応、無気力）や抑うつ反応、レジリエンス（「回復力」、「弾力性」）や自尊感情（自己受容感、可能性感、所属感、貢献感）について、社会関係資本（社会・人間関係の状況）、学ぶ意欲や学力、家庭生活の諸要因（文化資本、経済資本など）との関連を、保護者の調査と関連させて検討・分析する。

(3) 上記に関連する全国的な研究会等を通じた検討

- a. 日本社会教育学会六月集会（筑波大学、6月7～8日）：子ども・若者支援専門職養成に関するラウンドテーブル
- b. 日本社会教育学会関西集会（神戸大学梅田サテライト、6月23日）
- c. 教育研究全国集会
- d. 第53回社会教育研究全国集会「多文化共生・人権尊重をめざす学習」分科会（千葉大学、8月3～5日）
- e. 日本社会教育学会研究大会（東京学芸大学、9月27～28日）
- f. 登校拒否・不登校問題奈良のつどい（奈良教育大学、10月20日）
- g. 部落問題研究者全国集会「教育」分科会（京都市、10月26～27日）
- h. 第59回全国夜間中学研究大会（天理市、12月7～8日）

(4) 学会における研究活動：日本社会教育学会プロジェクト研究における研究

- a. 「社会教育研究における方法論の検討」（平成25年3月～）
- b. 「子ども・若者支援専門職養成に関する総合的研究」（平成25年10月～）

(5) 公立中学校夜間学級関連（地域貢献）

- a. 全国夜間中学研究会 60 周年記念アーカイブス事業への協力
- b. 奈良市立春日中学校夜間学級教員研修講師（奈良市教育委員会、10 月 22 日）

2. 本学のキャリア教育と連携した人権・市民性教育の展開

(1) 学部・大学院における人権・市民性教育のあり方の検討

【学部】

- 「キャリア形成と人権」（前期）「人権と教育」（後期）
- 「教育人権アプローチ特講」（前期）「教育人権アプローチ演習」（後期）

【大学院】

- 「人権教育特論」（前期）、「人権教育演習」（後期）

特別講義・見学

| | |
|----------------|--|
| 6 月 20 日 | 奈良市立春日中学校夜間学級見学 |
| 7 月 2 日 | 松本少年刑務所 松本市立旭町中学校桐分校 元教官 角谷敏夫先生 特別講義 |
| 11 月 7 日 | 奈良市立春日中学校夜間学級見学 |
| 11 月 19 日,26 日 | CAP(Child Assault Prevention=子どもへの暴力防止プログラム) CAP 西 大和トレーナー3 名によるワークショップ |
| 12 月 17 日 | 性的少数者（セクシャル・マイノリティ）に関する特別講義 小林和香：やっぱ愛ダホ！Idaho-net 神戸アクション、 吉川寛：LGBT の声をとどける会 |
| 1 月 9 日 | 天理市立北中学校夜間学級元教諭 福島俊弘先生 特別講義 |
| 1 月 30 日 | 大阪市立天王寺中学校夜間学級見学 |

(2) 講演会の開催

- 12 月 21 日「言葉の力と教育-母語という礎」（文化多様性教育部門との共催）

3. 人権及び市民性教育に関わる企画・コーディネーション

(1) ハラスメント研修の企画・実施

人権・ハラスメント防止委員会の業務との関連新入生ガイダンス新採用教職員研修人権・ハラスメント防止委員会の企画による教職員研修、学内講演会等

- (2) 広報・啓発活動.....人権・ハラスメント防止委員会の業務との関連パンフレット「輝」、ハラスメント防止リーフレットなど
- (3) 附中研究室訪問や県内高校などの模擬授業などへの協力

4. その他

- (1) 教育学教室との教育連携による学生・研究生・院生の受入

【学部講義を通じた人権・市民性教育の展開】

(1) 6月20日「教育人権アプローチ特講」受講生 奈良市立春日中学校夜間学級見学

(2) 7月2日 松本少年刑務所 松本市立旭町中学校桐分校 元教官 角谷敏夫先生

特別講義「学びと感動が人を変える—刑務所の中の中学校 桐分校」

世界で唯一、刑務所内に設置された公立中学校（分校）の桐分校において、法務教官として、35年間勤務（33年間クラス担任）された角谷先生から、さまざまな事情から義務教育を修了することができなかった受刑者達と向き合ってきた経験を踏まえ、ご講義頂いた。

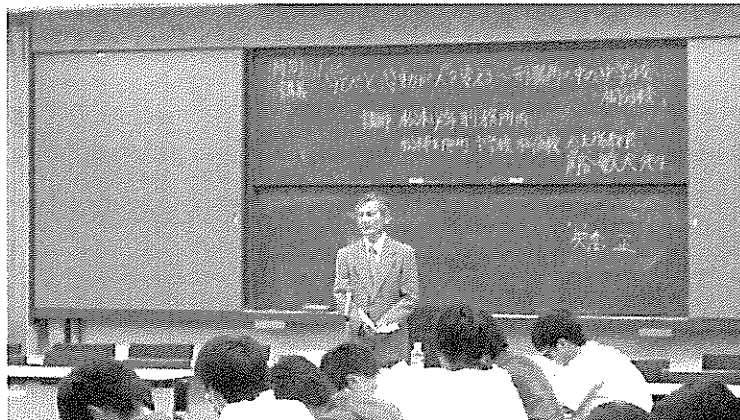
また、教師を目指している受講生達に向け、大学卒業前に教師ではなく法務教官の道を選択した際のエピソードや卒業論文での取り組みなど、教師としてのキャリア形成についても語って頂いた。

桐分校は、角谷先生の著書『刑務所の中の中学校』（しなのき書房）で紹介されたほか、平成22年度文化庁芸術祭参加 TBS ドラマ「塙の中の中学校」（平成23年度モンテカルロ・テレビ祭最優秀作品賞、モナコ赤十字賞、主演男優賞）でドラマ化された。

[松本市立旭町中学校桐分校ホームページ]

http://www.city.matsumoto.nagano.jp/kodomo/gimukyoyoku/shochu/junior_high_school/j_asahimachi/asahimachi_jhkiri.html

「 学びと感動が人を変える ～ 刑務所の中の中学校 桐分校 ～ 」



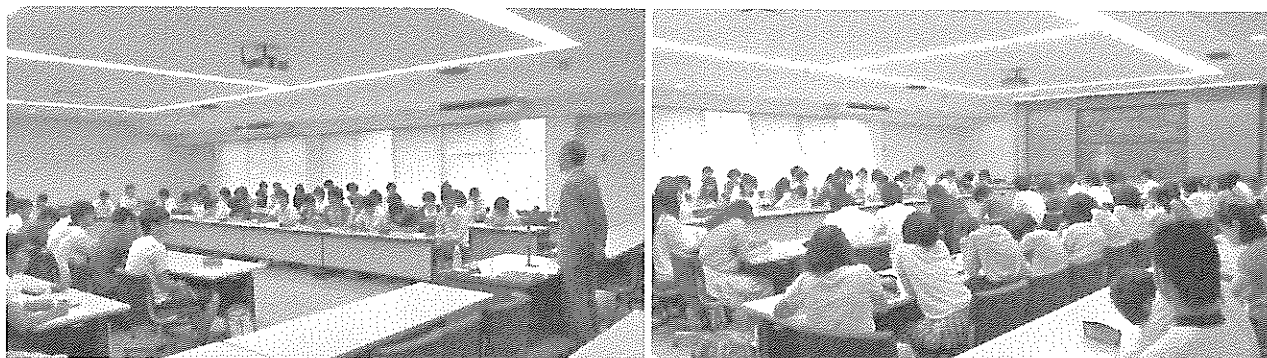
- 1 はじめに
- 2 日本で唯一の刑務所の中の松本市立旭町中学校桐分校
 - (1) 桐分校とは
 - (2) 設立の経緯と背景
- 3 学びと感動の桐分校の1年
 - (1) オリエンテーション
 - (2) 入学認定会議
梅雨が明けるまで
 - (3) 入学式
 - (4) 日本一勉強する中学生
 - (5) 桐分校入学の動機

- (6) 一つ学べば一つ世界が広がる
学然後知不足 (学びてしかる後 足らざるを知る 礼記)
- (7) 指に漢字を書いて
- (8) 遠足、持っていくものは 「信頼」 だけ
- 4 卒業・出所後の生徒たちの今
- 5 卒業式前日のいのちの根の感想
- 6 卒業式
- 7 私がこの仕事を選んだ理由
- 8 桐分校登山
りんどうよ寒さに堪えて来る夏に咲かせてくれよ紫の花
- 9 刑期于無刑 (刑は刑無きを期す 書経)

角谷先生が担任として、毎年入学式の際に生徒に贈っている詩を紹介された。刑務所内の学校であるため、教師と生徒間での物品のやりとりは不可能であるが、角谷先生からのお祝いの贈り物として毎年伝えているのが、相田みつをの「いのちの根」であるという。

いのちの根

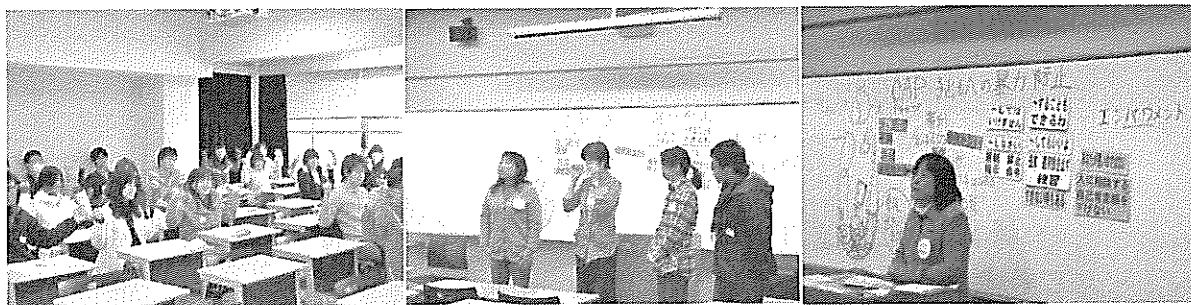
なみだをこらえてかなしみにたえるとき
 ぐちをいわずにくるしみにたえるとき
 いいわけをしないでだまって批判にたえるとき
 いかりをおさえてじっと屈辱にたえるとき
 あなたの目のいろがふかくなり
 いのちの根がふかくなる
 (相田みつを 「にんげんだもの」より)



受講生たちは、これまで全く想像ができなかった刑務所内の公立中学校の様子を直接聞くことが出来た貴重な機会であったことを感想として挙げていた。また法務教官として教育者になる道があることなど、進路を考える上でも参考になったとのコメントが寄せられた。

なお、センター教員の藤田は、平成 22 年に全国夜間中学校研究会の「すべての人に教育を」専門部会主催研修会に参加し、松本少年刑務所を訪問し、桐分校を見学し、「教育人権アプローチ特講」において、同校をテーマとして取り上げている。

(3) 11月19日、26日 子どもの暴力防止プログラムCAP(Child Assault Prevention)西大和トレーナー3名によるワークショップ



第1回：11月19日

- (1) CAPの理念、子どもの権利と自尊感情についての講義
- (2) 子どもの権利を具現化した「安心・自信・自由」についてのワークショップ
- (3) 子どもに対する暴力防止プログラムについてのロールプレイと実践

CAPの理念や取組みについての講義を受け、子どもの権利と自尊感情について、具体的を基に学んだ。その上で、子どもに対する暴力防止プログラムとして、実際に学校で行われているプログラムを実演してもらい、ロールプレイとグループディスカッションを通じて、児童虐待防止と人権についての認識を深めた。

第2回：11月26日

子どもの自尊感情と権利、エンパワメントに関する講義とグループディスカッション：第一回目の講義で学習した内容を踏まえ、学生たちが考える子どもの自尊感情、子どもの持つ力について意見を出し合い、そこで出された内容を基に討議し、理解を深めた。また、CAPの方々の把握している事例を踏まえ、いじめ・暴力・虐待問題についての認識を深めることができた。具体的に、暴力の予防・救済にとって重要である、傾聴の仕方、コミュニケーションのあり方、被害者救済への観点（セルフ・エスティーム、エンパワメントなど）について学んだ。

【学生からの感想】

- ・私たちは、まだ先生ではないけれど、相談はされる側にいると思います。そのときの声かけ、力になる方法、どのようなことを伝えたらいいのか、非常に参考になりました。
- ・今まで受けてきた人権に関する授業でも一番魅力的なものだった。細かい部分まで沢山の配慮があるなと感じた。
- ・これを受けることによって、色んな人に相談すればいいんだなって思えました。

(4) 12月17日 性的少数者（セクシャル・マイノリティ）に関する特別講義：LGBT（レズビアン・ゲイ・バイセクシャル・トランスジェンダー）「当事者の語りを聞く」

小林和香（こばやしわか）：やっぱ愛ダホ！Idaho-net 神戸アクション、

吉川寛（よしかわひろ）：LGBTの声をとどける会

※ Idahoとは、「国際反ホモフォビア・デー」（5月17日）の略称

昨年度に引き続き、興味・関心を寄せる受講生が多かったセクシャル・マイノリティに関し、奈良教職員組合と「性と生を考える会」によって制作された『教職員のためのセクシャル・マイ

ノリティサポートブック』を元に、用語や学校生活の中での支援や家族への支援について学び、さらにDVD等の視聴覚教材を活用して基礎的な知識を得た上で、「当事者の語りを聞く」特別講義を実施した。

年齢に近い当事者の語りを聞くことで、具体的に学校の中で、教員が、どのような支援をしていくことが可能なのか、また大学生として、今の自分たちに何が出来るのかを具体的に考えることにつながった。講義終了時に出されたコメントシートについての回答は、後日スピーカーから頂き、それを踏まえ、特別講義後のふり返り学習（グループワーク）にも取り組んだ。



【講義「人権と教育」を受講しての感想】

以下、受講生のうち4回生2名と受講者数が多い1回生のうち1名の感想を紹介する。

講義を通して最も印象に残ったこと

書道芸術専修 渡久地政音

（昨年度前期の「キャリア形成と人権」も含め）本講義は問題提起という意味で、私自身が認識していない分野や人、それにかかわる問題に気づかせてくれた講義である。本講義で学んだ内容で印象的だったものは多々あり選びかねるが、あえてひとつ選ぶとなると、私は性的少数者LGBTの問題を選ぶ。

性という言葉にいてもそれらは単に男性、女性二つのみの枠組みで捕らえられるものではなく、実に多様であるということをはじめて学んだからである。加えて、当事者の人が実際に講義してくれたからである。

男性、女性というものが、生物学的にも必ず判別できるものではないということ、Aセクシャルという恋愛感情や性的欲求を持たない人もいるということなど、今までに触れる機会がなく知識として初めて知ることが多かった。吉川さん小林さんが仰っていた、性というのはひとつのグラデーションのようなものであるという説明は分かりやすく、頭に入れておくべき考えであると思う。

この問題はデリケートな問題である。そのことを深く受け止めなければならない。男性、女性、ゲイやレズビアンというだけでその人たちが、就職し難くなる、学校職場であるべきではない噂を立てられたり、誹謗中傷の対象になったりする状況は是正されるべきである。これらは社会や個人の良心に基づいて改善されるべきことである。

学校では特に、LGBTに対する理解や適切な配慮が研修などの形で多くの教員に認知されるべきであると思う。通常のコミュニケーションで用いられるような俗語と学術的、専門的な概念を区別できるようになる必要がある。それが誹謗中傷に当たる言動を防止する何よりの対策に繋がると思う。

その一方で、男性、女性という枠組みそのものを悪しきものとして糾弾するような姿勢自体には賛成できない、それ自体はそれなりに意義のあることであると思う。

私には、(生物学的な性としての) 男性として生まれ男性として生きていくことを決めたからには女性を立て、子供の幸せを護って生きたいという信条がある。これは私自身が考える美德や良心を愛する気持ちからくるものである。

性に対する広く深い理解は、むしろこのような「～性」としての美德や信条を深淵なものにするためにも社会により定着すべきものであると考える。

講義を振り返っての感想

英語国際理解専修 今中侑也

今回の講義を通して、LGBT、アイヌ文化、CAPの活動などについてビデオ、ワークショップ、グループでの話し合いを通じて学習した。そして、それらの事柄をまとめて何について学習したかということ、授業名どおり、人権と教育についてだと思う。人権とひとまとめにしていうこともできるが、どういったことを学習すると人権につながるかは、さまざまである。

私がこの講義を受けて感じたことは、2つある。1つ目は、いわゆるマイノリティーと言われる人たちは自分のことを知ってほしい、わかって欲しいと思っているのではないか、ということである。2つ目は自分が偏見をもっていないから、何もしなくてもいいと考えることは間違っているということである。

1つ目についてはビデオに出演されていた方や、LGBTの授業に来てくださった方が積極的に偏見をなくそうと試みている方だったために、私の少し偏った見方になるかもしれないが、私はアイヌ文化の人たち、LGBTの人たちは少しでも自分のことを知ってほしいと思っていると感じた。もちろん、知ってもらうこと以上に理解されることを望まれていると思う。講義でビデオを見たとき、自分がマイノリティーであるために、自分のことについて話せないからしんどいと感じる、そして最悪自殺にまで至るということが紹介されていた。だから、マイノリティーである人には自分のことが話せる人が必要であるし、自分のことが話せる社会作りのために動いている人もいる。そこから私はマイノリティーの人はどう思われるかという心配を抱えながらも、自分のことを知ってほしいと思っていると感じた。

だからこそ、マイノリティーを蔑視しない、受け入れることのできる社会が必要であると感じたし、多文化社会ということが特別なことでなくなりつつある今、違うことを受け入れられるように教育というものが多文化共生社会作りを進めていかなければならない。

2つ目は、1つ目にも関連することだが、私も講義の前には、自分がLGBTやアイヌに対して、その人の個性ともいえる部分だから偏見もないし、自分が何かをする必要もないと思っていた。しかし、私自身がそのことを発信する、もしくは広めることをしなければ偏見はなくなると、講義で感じた。そして、教師として知識を身につけ、教育という形で児童生徒に伝えていくことによって、救われる人も出てくるはずだし、社会も変わってくると考えられる。少なく

とも、自分が思う性と実際の体の性の違いによって、いじめられたり、悩んだりする子供たちがいなくなり、受け入れられるようにしたいと思う。

人権を尊重することは、もちろん大切であるが、そのアプローチについて、これまで知らなかったことを学ぶことができた。また、多文化理解が人権尊重につながると思った。この講義で学習したことを生かして、多文化理解、人権尊重の英語教育というものを作っていきたいと思う。

人権と教育を受講して 特別支援教育専修 松澤希映

私は LGBT に興味があつてこの授業の受講を決めました。少しでも知れたら良いという気持ちでした。しかし、予想以上に内容が濃く、LGBT だけでなくすべての授業で私は人と社会について考えたように思います。

印象に残っているのは CAP の授業と LGBT の授業と、単親世帯の子どもたちについての最後の授業です。

CAP の授業を終えてから、私にしては珍しく、興味をもったことをさらに調べてみるということをしました。CAP は子どもの心によりそえると私は思います。よりそった上で、一緒に歩いて、さらには 1 人で歩き出す手助けができるのだろうと、そう思いました。私はそんな教師になりたいと、そんな人間になりたいと思っています。CAP の授業は、心が沈んで穴に落ちてしまった子どもを引っ張り上げることができる人の授業で、だからこそ私にとってはとても衝撃的でした。

LGBT の授業では、私の知らないことが多くて考える暇がいつもより少なかったかなと思います。初めて LGBT の方と出逢い、その人の苦しみを知りました。ほんの少しの言葉使いだけで傷つくというのは、セクシャルマイノリティだけでなく、個々人でも同様です。そんな当たり前のことを改めて目の前に提示されたように思います。私の身の回りにもいるのだろうか、と考え、そんな人々が、私には打ち明けられると思えるような態度をとりたいと思いました。今ではレインボーを見るとレインボーフラッグを思い出します。何かアイテムを買って身につけていたいなと思っています。

最後の授業の VTR では、泣いてしまいました。辛かったです。VTR を見ながら、この塾の先生のようなことは教師になったらできないのだろうなと思えました。それがまた、私にとってはショックでした。

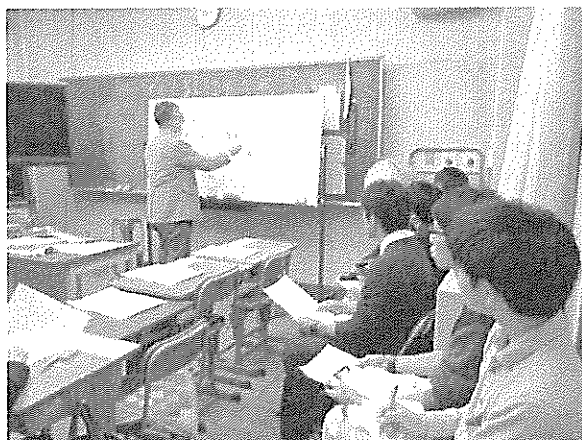
この授業を受け、ぼんやりとしていたことがはっきりと見えるようになり、しかし私は逆に戸惑いを覚えたのも本当です。様々な VTR を見て、授業を受けて、いろいろな人に出会って、私がやろうとしている教育とはなんなのだろうと本気で考えるようになったのです。教師になってできることはなんなのだろう。私が本当になりたい人ってどういう人なのだろう。新たに課題を見つけたように思います。私はさらに様々な事例や知識や出逢いを知るべきなのだろうということも分かりました。

この授業を受けて本当に良かったと心の底から思っています。今の私たちに何ができるのか、学んだことを発信しながら、一緒に考えて進化していけたらと思いました。

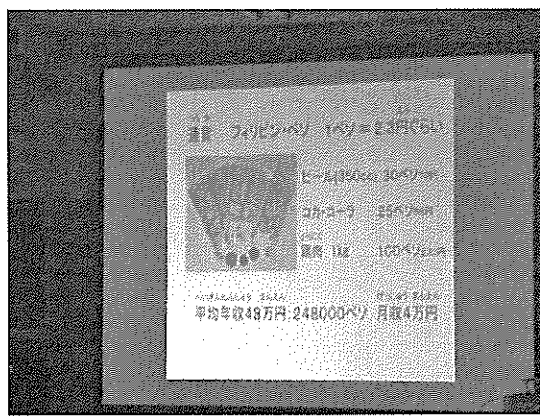
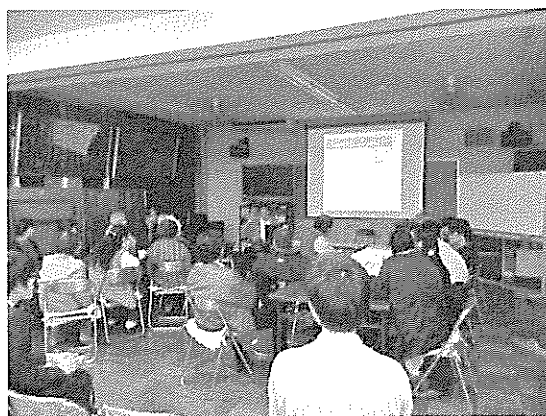
(5) 11月7日 奈良市立春日中学校夜間学級見学

昨年度「教育人権アプローチ演習」および前期「教育人権アプローチ特講」に続き、今期も見学を設定した。そのため、複数回の見学を通じて、受講生からは、「前期の見学に比べると、異なる感受や考え方が生じた」との感想もあった。継続して授業実践を見学することで多面的な気づきが生じると考えられるため、今後も前・後期を通じての見学を設定していきたいと考えている。

今回は、1校時：時事問題を扱った社会科（ニュース）、2,3校時：全校での人権学習（総合：国際理解）、4校時：科学（季節の果物・柿）を見学した。



1校時は、日常生活と密接に関わるテーマについて、マスメディアで取り上げられた内容（ニュース）を題材とした学習で、原発再稼働に関して話題になっていた、覆面作家：若杉冽氏の『原発ホワイトアウト』を取り上げ、映像資料も活用しながら授業が行われていた。前年度に一年間かけて、一級プラント配管技能士として20年間原子力発電所に勤務した平井憲夫氏の講演記録「原発がどんなものか知ってほしい」を読んできたことに関連させて、発展的な学習に取り組んでいることがうかがえた。本学の学生達にとっても初めて知る情報も多く、見学というよりも受講生の一人として学んでいた側面があった。



2,3校時は、全校での人権学習講座が設定されており、在籍生徒の出身国でもあるフィリピンについて、文化、経済、歴史等について学ぶと共に、日本との関わりやフェア・トレードについて、実際にいくつかの商品を近隣の大型店で購入して、具体物を活用した学習に取り組んでいた。

4校時の科学では、奈良の特産品である柿をテーマに、歴史・地理・理科に関連させて、教科横断的な学習が行われていた。見学した受講生達は、春日中の教諭が、大型液晶テレビにiPadを接

続し、生徒の疑問や質問についてネットを活用した講義をしている点が印象に残ったとの感想を述べていた。

見学レポート

夜間中学(夜中)を見学して、まず感じたのは、自由な雰囲気、ある意味で、私が通ったような昼間の普通の学校らしくない雰囲気を感じた。しかし、その雰囲気は学びを妨げるようなものではなく、自由な学びを促したり、学校外での生活に寄り添ったりするような温かい雰囲気であった。

夜中に通う人々は年齢をとっても国籍をとっても様々であり、普段の生活の状況も全く異なる。始業時間よりも前に登校して、心待ちに授業を待つ人もいれば、始業時間に間に合わず遅れて登校してくる人もいる。終業時間まで授業を受ける人もいれば、途中で下校する人もいる。私の知っている昼間の学校であれば、違和感をもつが、夜中にとってはそれが当たり前で、むしろ生徒一人一人の生活を尊重した学校のスタンスがよく表われていると感じた。学校に登校する時間や下校する時間が違えども、夜中に通う生徒の皆さんは学びたいという意欲を強く持って、夜中に通われているということがよくわかった。

授業の様子を見ていると、学ぼうという意欲をたくさん感じ取れた。疑問に思ったことがあればすぐに先生に投げかける。投げかけられた疑問に対して先生は授業を止めて、質問に答える。こうしたやりとりが授業中に何度も繰り返される。型にはまった授業ではなくまさしく生きた授業が展開される。聞いているだけでもおもしろい。ちょっとした気づいたことに先生が反応してくれる。生徒にとってこれほど心地よいことはない。こうした学びの在り方が、夜中での学びの楽しさであると思うし、深みでもあると思う。昼間の子供たちと違うことでいえば、夜中の生徒の人生経験が豊富だということも大きな違いだと言える。書いてある文字を読むことは苦手でも、物事の理屈や筋道、倫理観や人生観への理解や見解は豊富なため、議論にも深みがあるし、何より暮らしや生活に沿った考え方が自然と出てくる。学習する内容がどのような内容であれ、自分の生き方や社会の在り方に照らし合わせて学びを深めることはとても大切である。夜中の生徒の皆さんの豊富な人生経験がそうした学びを体現することを可能にしていると感じた。

また夜中では、多くの国籍の方が在籍していることから、国際理解、異文化理解がとても大切にされていると感じた。たとえば教室などの掲示を見ても日本語以外の言葉が表記されており、人権学習で積極的に国際理解教育が行われているということが印象に残った。

今回は一つのクラスのみの見学となったため、一概には言えないが、夜中における教材づくりではクラスによって何が必要とされているのか、どのような授業を展開すればいいかが気になった。単に文字の読み書きが上達すればいいわけではないし、一般教養を詰め込むだけでいいということでもない。どの校種にもいえることだが、とくに夜中では科目に拘わらず、すべての学びがつながることが大切であると感じた。そしてその学びの成果を言葉に表すことが大切だと感じた。学びの感覚を自分の中に閉じ込めるだけなら、一人で本を読むだけでもできる。皆で学校という場で学びを深めるためには、他者に分かる形、すなわち言語表現によって、学びで得たことを共有し合うことが大切だと感じた。

学校とは、子どもの学び場というイメージがあったため、成人した方が学校に学びに来ていることに対して違和感を覚えた。私の感じた違和感は、「日本で生活しているのであれば、読み書きは出来ていて当然」という固定概念があるが故であると思う。しかし、この度、この固定概念に当てはまらない人が、少なからず存在しているという現実を見学させて頂けた。

授業を観察させて頂き、私が感じたことは、大きく分けて二つある。一つは、授業で扱う教材が思っていたよりも難しいということである。取り上げられていた時事は、政治経済の仕組みや世渡り、長いものに巻かれる人間の心理などが、ある程度分かっているという前提で設定された教材であると感じた。しかし一方、資料にはふりがなが振られ、あえて音読させる活動を取り入れられていた。人権学習の時間には、通訳されながら授業をしているように見える生徒さんもおられた。機能的識字に難しさを感じる方が多い印象を持った。

二つ目は、雰囲気がとてもよく、アットホームであるということである。捕食給食の時間ではコミュにケーソンが多く、生徒さんにとって、憩いの場になっているように感じた。夜間中学には、国籍や年齢、性別を気にしないよい環境があるのだと感じた。

通常学級では、評価というものが必ずあるが、夜間中学においては、評価があるのか、成績があるのか、評価するのであれば、何に準拠した評価をされているのか知りたいと思った。

以上のように、受講生たちは、見学を通じて、今後の学習課題が見いだせ、次に挙げる1月の福島先生の特別講義や、天王寺中学校での見学で学習を深めることに繋げた。

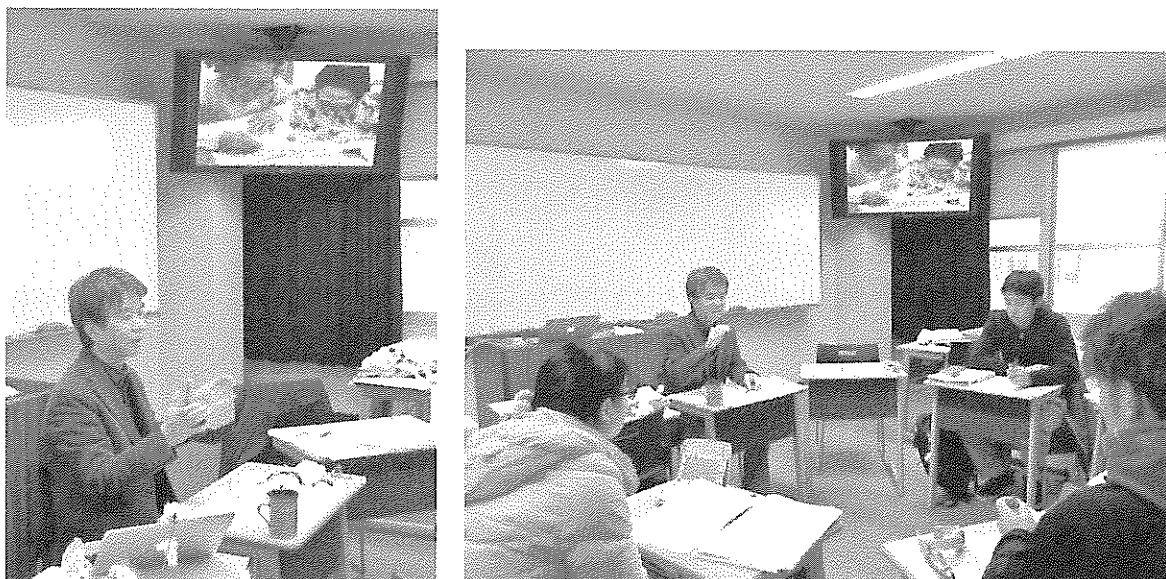
(6) 1月9日 天理市立北中学校夜間学級元教諭 福島俊弘先生 特別講義

「夜間中学の「学び」をつくるために考えてきたこと」

1. はじめに
 - (1) ハルモニの綿
 - (2) ユネスコ学習権宣言
2. 夜間中学生の学校との向き合い方
 - (1) 折れる鉛筆と消しゴムカス
 - (2) 暗い夜道がこれほどまでにワクワクする場所か
3. 私の生徒さんへの向き合い方
 - (1) 歴史・文化・仕事・生活を知る
 - ・なぜ学べなかったか。その暮らしはどんなだったか。
 - 渡日史・帰国 戦後史 韓国籍と朝鮮籍 回覧板 子育て 授業参観 就職など
 - ・家庭訪問で知る 書物で調べる 既刊の作文集で読みとる
 - (2) 学校で学んでいないということの意味を考える
 - ・無学と無学歴 話し言葉だけの世界で生きるための術
 - ・抜群の記憶力
 - ・正確な目分量
4. 「学び」をつくる

- (1) 歴史をたどる（奈良県周辺、岩手県花巻、韓国）
- (2) 畑の教室 トウガラシ、ニンニク、ニラ、綿、麦…
- (3) マキハダの仕事 桜井の地場産業
- (4) 文化祭 夜間中学文化とは

5. 終わりに 夜間中学校教員免許



天理市立丹波市小学校から天理北中学校夜間学級へ異動された経験を持つ福島先生から、「夜間中学の「学び」をつくるために考えてきたこと」についてご講義頂いた。

同校は、在籍生生徒の過半数が朝鮮半島出身のハルモニ（おばあさん）たちであることに特徴を持つ。そこで、在日一世のハルモニ（おばあさん）が40年前に里帰りした際に韓国から綿の種を持ち帰り、家の庭で植え継いできたものを夜間中学の畑に植え、綿作りに取り組んできたことについて、福島先生が新聞紙上に投稿した記事や、綿の樹の現物を持ってきて頂き、どのような講義を行ってきたのかをお話し頂いた。

また、夜間中学生たちがどのように学習に取り組んできたかや、福島先生の生徒さん達との向き合い方について、小学校教諭から夜間中学教諭へと異動した経験を踏まえて、お話し頂いた。家庭訪問を通じて、生徒の学習を取り巻く全容を理解することに務めてきたことや、昼の教育との接点を探りつつ、例えば社会科においては、小中学校の教科書と、ハルモニ達が経験してきた日本社会の実態とを照らし合わせながら教材を作成し、授業を行ってきたことなどもご紹介頂いた。

受講生達は、これまで見学で触れてきた夜間学級の授業で興味を持った点を、どのように昼の授業に生かしていけるのだろうかという疑問を持っていたのだが、その点について、具体的な授業内容を取り上げて討議できたことがいい経験になったとの感想を述べていた。

(7) 1月30日 大阪市立天王寺中学校夜間学級見学

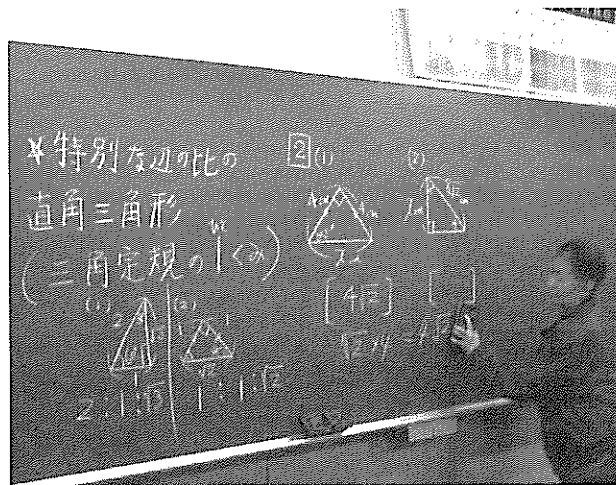
[見学の概要]

教頭による学校概要および、大阪市内の公立中夜間学級が置かれた状況に関する説明と、質疑によるガイダンスを終え、最終学年に相当する6組（高校進学予定者在籍）の数学に参加し、教師2名によるチーム・ティーチングの体制の下、教育人権アプローチ演習受講生達は、生徒とペアになり、個別指導に取り組んだ。

基礎的な学習を進める3花組では、英語：ローマ字の練習、国語：詩の授業に参加した。英語では、個別指導のサポートを行い、国語では、学生達も共に作詩に取り組んだ。



6組での数学

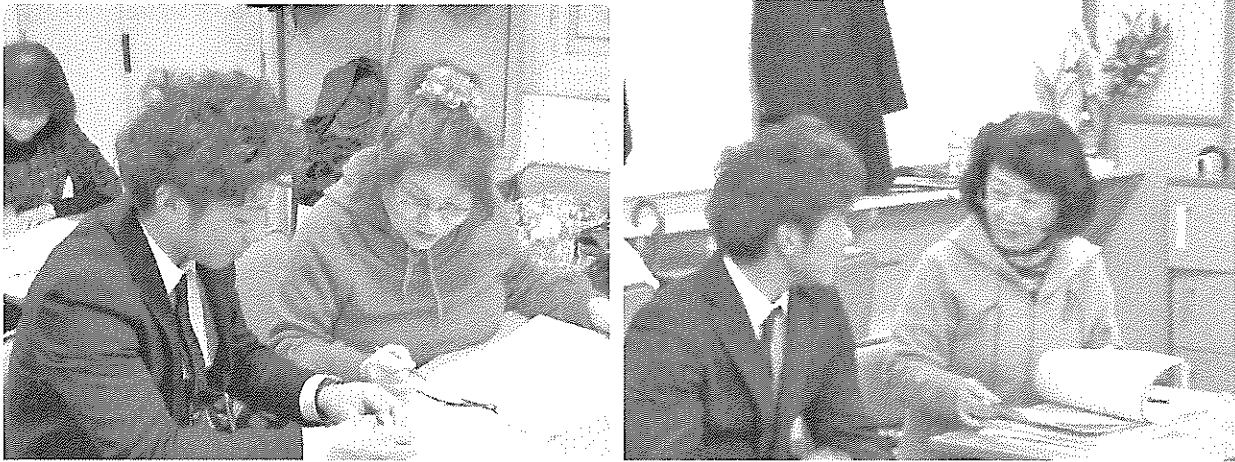


3花組での国語（詩）



リズムをとりながら、全身を使って
詩の授業をする吉岡先生

教育学専修 2回生 森岡 慎太郎



私は前期から引き続き演習の講義も受講することとなったが、後期のこの講義でも自分の可能性を広げる多くの大きな出会いに出会うことができたと思う。夜間学級をはじめとする特殊な形をとる教育のあり方について学んだ結果、夜間学級の現状、これからの課題について大いに学ぶことが出来たと思っている。私はこの一年間のこの講義がきっかけとなり、今後も夜間学級について更に深く知りたいと思うようになった。この一年間だけでは学び得なかったことはまだまだ山のようにあると思うので、卒業するまでは勿論、長いスパンで多くのことを知り、少しでも環境を改善するための力になればと思う。

この演習の講義では春日中学校の夜間学級と天王寺中学校の夜間学級に赴く機会があった。いずれも四時間の授業をすべて見学させていただくという形だったので、多くの生徒達と触れ合うことができ、その中で多くの話を聞かせていただいた。その中で私の思ったことと生徒さんとの話と、印象に残った点についてまとめていきたいと思う。

まず一つ目は夜間学級の雰囲気についてである。私は以前ある友達に「夜間学級は暗い雰囲気だというイメージがある」という話を聞いたことがある。しかし、実際の学級の雰囲気は友達の想像とは裏腹に、とてもとても明るい雰囲気で生徒一人一人の個性で溢れる空間である。生徒の学ぼうという意欲に溢れ、教師も生徒の希望に応えようと振舞っている。私はこの学級を客観的に見て、昼間の学級よりも笑いで溢れている、生徒にとって幸せな空間ではないかと感じた。生徒と話をさせていただく中で多くの方が「夜間学級は私の生きがいになっている」「今が私の青春時代だ」とおっしゃっていた。このような環境は今後も守り続けていかなければならない、彼らが悲しむようなことは絶対にあってはならないと強く感じた。

二つ目は「学力」の現状と教師の対応についてである。夜間学級に通っている生徒には多くの種類の方々がおられる。戦時中に義務教育を受けることのできなかった方々、外国から来られた方々、事情により昼の学校に行くことのできなくなった方々など多種多様な方々が夜間学級で学びを行っている。これらの人々の学力の定着度合いも人それぞれである。若いからといって学力の定着が早く確実であるとは限らず、年を経ているからといって学力の定着が悪いとも限らない。しかし、基本的には年を経ている方々は学んだことを吸収することを苦手としており、その場では学んだ気

になっても時間が経つにつれて記憶から失われていくといったことが多いようである。このことは生徒との話からわかったことであるが、このことは生徒にとって最も辛い出来事のようにであった。夜間学級の生徒の多くは凄く丁寧にノートをとっており、いつでも見返すことができるように丁寧に纏め上げられていた。ここまで学習に対して真摯な姿勢を持った方々が学力の定着という面において苦悩されているということが私にとってもとても辛く、しかしなんともならない不朽の問題であると感じた。夜間学級の教師も多種多様な生徒に対して少しでもわかりやすい授業を行うために、様々な工夫をしながら授業をされていた。その中でも特に印象に残っているのが天王寺の吉岡先生の詩の授業だった。学ぶべき本質をぶらすことなく、生徒が楽しめる授業作りを行う。経験のある教師にしかできない授業作りをされていた吉岡先生には本当に凄いなと思うと共に、あのような授業を見せていただけたことに感謝したいと思う。教師はこのように様々な工夫を凝らしながら、少しでも生徒の要求に応えることができるように努力し、生徒も教師の気持ちに応えようと必死で学びを行うのだが、いくつかの悲しい側面が見えてしまうことも事実であった。

以上に述べたこと以外にも多くのことを学ぶことが出来たが、書き出すと収拾がつかなくなるのでこれくらいにしておく。しかし、この講義から多くの疑問の中で未解決のものもある。夜間学級の教師にはどのような免許が必要なのか。夜間学級の生徒（特に高齢の方々）に対して、学力をよりよく定着させるために効果的な方法は無いのだろうか。夜間学級推進の動きの中に更に必要なものはいったい何なのだろうか。考え出せばきりがないことだが、私はすべての問題について当たりたいたいと思う。夜間学級という、なかなか知られることの無い教育環境で、炎を燃やして勉学に励まれている方がいる限り、私はこの研究課題に取り組んでいきたいと思う。日常ではなかなか経験することのできない貴重な時間を提供して下さった藤田先生、また夜間学級の関係者の皆様には本当に感謝しきれないほどの思いでいっぱいである。本当にありがとうございました。

私は今、この「夜間学級」をテーマに卒業論文を書こうと考えています。この動機を下さった藤田先生には感謝しきれない気持ちでいっぱいです。今後も多くのこととお世話になり、多くのことでご迷惑をおかけすることになると思います。一生懸命頑張りますので今後ともよろしく願いいたします。一年間、教育人権アプローチの講義を受けることができて本当に幸せでした。ありがとうございました。



2014年1月30日に天王寺夜間中学へ見学に行った。校舎に入った時の印象としては、前回見学させてもらった春日夜間中学よりも規模が大きいと感じた。クラスの雰囲気、並びに授業の雰囲気としては、春日夜間中学と同じくらいの明るさを、教師側と生徒側から感じた。教室の数が多く、また教室の広さが普通の教室と同じくらいだったことに驚かされた。

天王寺夜間中学校、春日夜間中学校と見学させていただいて感じたことは、学校や教育に対して、生徒が全くと言っていいほど悲観的な部分がなく、ネガティブなところがないということである。私が過ごしてきた、小中高、加えて大学の教育課程の中では、生徒の立場の人間は何かしらの悲観的な問題や悩み、勉強へのモチベーションを低くするものを持っていたように思う。それは、友人間の人間関係であったり、思春期特有の悩みであったり、部活、モラトリアム症候群など、挙げればきりが無い。その問題を少しでも解決し、生徒が勉強に励む環境作りをすることが私の過ごしてきた教育現場の教師の大きな役割であったように思う。そのような、悲観的な問題点を、私は見学中に夜間中学校から発見することはできなかった。生徒の授業に対するモチベーションは高く、授業を受けることを心の底から楽しんでいたように思える。しかし、夜間中学校の生徒には一般の生徒とは大きな違いがあり、彼らのほとんどが年齢が高く、知識の習得に時間がかかり、また習得への時間にもばらつきがある。何度やってもすぐに忘れる。さまざまな国にルーツを持つ人間が多くおり、適切な対応が難しいなどである。挙げた問題点は私が見学の中で感じたことだけであり、さらに多くの問題点が夜間中学校の生徒に存在すると思われる。しかし、そのような問題に悲観的にならず、明るく、ポジティブに立ち向かっていく生徒と教師の姿をみて、非常に素晴らしい教育の実践現場だなと感じた。天王寺夜間中学校の数学の授業の時、私の隣で授業を受けていた女性が、解けない問題にぶつかっていた。その問題は三平方の定理の基本問題で、私からすれば簡単なものであった。私は解の方法を何度も教えたが、理解できないでいた。しかし、彼女はへこたれることなく、もう一度教えてと言ってくる。孫ほど年の離れた自分に頼んでくる。その知識への食欲さ、ハングリーさ、そして明るさに私は感動した。

生徒のモチベーションが高いが、知識習得能力、知識定着能力が低いというのが夜間中学校の生徒の特徴だと私は考える。ということは、教師はその指導能力、授業構成力、生徒の信頼関係の構築力が大きく必要とされる。そして、これらの能力は小中高といった教育現場の教師に強く必要であると昨今の教育現場では言われ続けている。これらのことから、昼の学校と夜間中学の教師同士の交流を

もっと積極的に行うべきだと私は考える。

最後に本当にいい経験をさせていただきました。これからの教員生活の糧にして頑張ります。

教育学研究科専門職学位課程 教職開発専攻 修士2回生 陶山博考



私にとって二度目の夜間中学の見学は、天王寺中学にお邪魔する形で実現した。奈良の春日夜間中学に引き続き、大阪の天王寺夜間中学の見学を終えて、感じたこと、勉強になったことを以下に述べる。

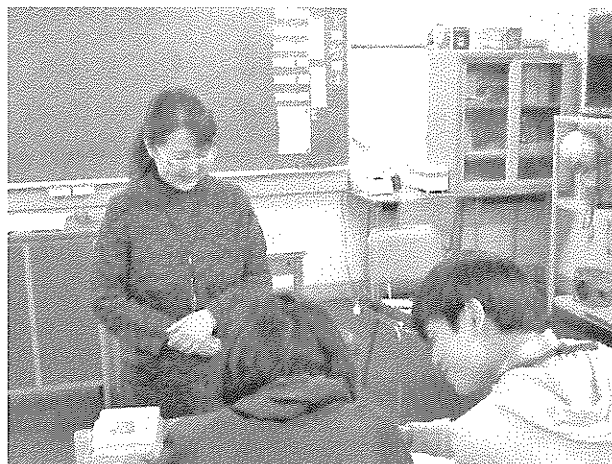
私が感じたこと、それは「夜間中学」の校風、雰囲気为学校ごとに違うということである。年齢や国籍、男女比など、通学されている生徒さん層の違いや学校行事については、資料で確認できる。しかし、授業の進め方や教室づくり、教室の雰囲気、生徒さん同士の関係については、実際に見学してみないとわからないものだ。2校しか見学していないのだが、それでも学校ごとに違いがあるということに改めて気付かされた。どちらの学校も生徒さんの実態や生活背景に合わせた実践をしていると思うので、違いが出るのは当然と考えられるし、決してどちらの学校が良い悪いというものではない。夜間中学では、生徒さんのニーズに合った学校づくりがなされていると感じた。

今回は、実際に授業に参加させて頂き、生徒さんと机を並べて勉強をし、話をさせてもらえる貴重な体験見学となった。生徒さんは私にとって人生の大先輩であり、さまざまな苦労や困難の中を歩み、生きづらさの中でも結婚し子どもを立派に育て上げてきた、尊敬すべき方々である。しかし、大先輩にも関わらず、腰が低く、自分の子どもよりも若い私に恐縮している様が見受けられた。明るくて優しい方々だが、勉強のことになると恐縮される。理解の程度がわからなかったため、私はできるだけ丁寧に勉強を手伝っていたのであるが、それが逆に恥ずかしい想いをさせてしまったのだろうか。

「(今更勉強なんて) 可笑しいでしょ。」「なかなか理解できないの。」と、本当に申し訳なさそうに言われた時、私は目を閉じたくなってしまった。この人の不手際ではない。理由はさまざまであるが、時代の流れで運悪く、義務教育が保障されなかつただけである。むしろ、「あなたは立派です」と言いたかったが、おこがましくて言うことはできなかった。夜間中学に通う生徒さんが、人生でどれだけの不利益や窮屈をされてきたのかはわからないが、常に自分に自信を持てずに生きてきたことは窺えた。私は悲しくなった。しかし、夜間中学で勉強できることをとても幸せに感じておられ、知識の習得にとっても一生懸命であった。これはどの夜間中学の生徒さんにも言える共通のことであると私は思った。

夜間中学は、本来の教育の目的からは少し外れているため、必要性について議論し考えてきた。しかし、実際に生徒さんの様子を見学してもらい、話を聞いていると、たとえ必要性が認められにくくとも、国の責任義務として夜間中学は存続しなければならないと感じる。私は物事に対して、必要性や目的に囚われてしまいがちであるが、それは現場を知らないからであると思う。多くの人が私と同じように、世の中の事象を机上でしか考えられない。夜間中学見学で見たこと感じたことをできるだけ伝えていきたい。

大阪教育大学 特別支援教育専修 一回生 牧野耕典



前回の春日中学に比べ、女性の生徒さんが圧倒的に多いこと、また韓国朝鮮籍の生徒さんが半分近くを占めるということが特徴的であった。授業中のかけ声(「シージャ・始作」(せーの!))など韓国朝鮮語を取り入れ、日本籍の生徒さんもその雰囲気共有されていたのがなんとも友好的で、今緊迫している日韓関係を思わせるようなことは全くなかった。

2 時間目に訪ねた 6 組では、高齢の方を中心に、中 3 最後の単元である三平方の定理の特別な三角形の辺の比の授業が開かれ、大学生が個別指導に回って大変盛り上がった。私にとっても、塾で教えている内容と全く同じだったため、思わず熱が入ってしまった。夜間中学においても、通常の中学校の課程に準ずる教育を実践されていることを知り、驚いた。高校進学への進路もある程度濃厚な雰囲気があることは、生徒さん達にとって夢を実現するよい場所であり、また単に学ぶ楽しさを求めて学校に来るだけでなく、一定の目標を持って通うことになることも魅力的であった。

教壇に立たれた数学の先生には、もっと机間巡視して、生徒の理解度を把握しながら授業を進めるべきだと感じざるを得なかった。普段であれば加配の先生が 2 人であることから、全員の理解を得ながら授業を進めることは難しくはあるが、私が担当した生徒さんは復習を大切にされながらも、やはり当日に習ったことについては理解・定着のスピードよりも、授業の方が先行してしまうということであった。

3 時間目の 3 花組外国語(ローマ字)では、拗音の綴り方を練習していた。プリント学習が主体で、生徒さんはきれいにプリントにひもを通して綴りにされていた。ピャ pya とするべきところをピョ pyo としてしまうなど、アルファベットやカタカナと音との照応が不安定であるようであった。ただ、より生活に即したところで考えるならば、ローマ字は手書きで書くのではなく、むしろキーボードで打ったり、道路の案内標識や駅名の看板を読んだりするなどの活用力が求められるものである。昼間

の中学の校舎のパソコン室等を借用できるのであれば、簡単なチラシや値札を作ったり、タイピングゲーム大会をしたり、借用できなくても、ローマ字駅名読み大会をしたりするなど、さらに授業を盛り上げる方法があるのではないだろうかと感じた。

4 時間目の 3 花組国語では、吉岡先生の詩の授業が開かれた。普段から吉岡先生は詩の群読の実践をされているようで、生徒さん達もはずかしがらずに大きな声で朗読し、詩の制作に取り組んでいた。吉岡先生は小学校の明るい先生のように、また音楽で指揮棒を振るように、体中を使ってリズムを刻みながら、クラス全体を笑いの渦に巻き込んでいた。大変魅力的な先生であった。

吉岡先生自らが好きなものを並べた詩を参考に、生徒さん達もオリジナルの詩を作成し、先生がおもしろおかしく前で発表して一日を締めくくるといふ、生徒さん達にとっても大好きな授業であったと思う。女性の生徒さんが多いことも、春日のように一部の男性が発言し続けるようなことが起こらず、みんなで和やかに一つの雰囲気共有することのできる魅力的な一面だと感じられた。

全体として、活気と笑いにあふれた大阪らしい学校と感じられた。ただ、昼間の学級の校舎に比べれば明らかに老朽化が目立ち、夜間学級の中ではバリアフリーで移動することはできないなど、同じ敷地の中にありながら暗に差別されていることが気になった。このことは、明らかに昼間の生徒達に(あの夜間の校舎に通う達はだめな人たちだとか、お金がなくてかわいそう)などと暗に思わせてしまいかねないと危惧する。さきほどのパソコン室を借用する件など、通常のホームルーム教室以外を使用する際には、昼間の校舎を利用するなど、相互の交流が必要だと思われる。同時に、夜間の校舎では、地域交流室など、昼間の生徒達が総合的な学習の時間で使うことができる場所を作り、昼間と夜間のギブアンドテイクの関係を築くことが大切だと考える。そうすることで、教育行政側にも地域連携の特色有る事業として、よりよく天中の取り組み宣伝することができると思う。ひいては、橋本市長にも天中オリジナルを前面に出せれば、天王寺夜中の未来が明るくなっていくことと思う。

【講演会】文化多様性部門との共催

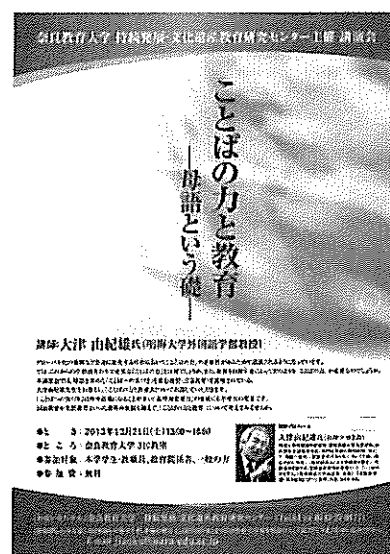
「ことばの力と教育—母語という礎」

講師：大津由紀雄氏（明海大学外国語学部教授・慶應義塾大学名誉教授）

本講演会を企画した経緯を二点挙げる。

- (1) 識字に関する研究に取り組んできた藤田は、前期講義「キャリア形成と人権」において、機能的識字・批判的識字について取り上げ、教員として、一社会人として、受講学生一人一人のキャリア形成の基盤となる批判的思考の獲得を重視した取り組みを行い、とりわけ自己表現・他者理解など多面的な能力を育成する津ために、批判的思考と言語技術について理解することを到達目標に講義をしてきた。

(詳細は、教育実践総合センター研究紀要 No.22「奈良教育大学におけるキャリア教育の構想および展開の現状と課題」生田周二・藤田美佳・立石麻衣子 参照)



- (2) 言語（ことば）と教育に関心を寄せる和泉元千春准教授（文化多様性部門）、中谷いずみ准教授（国語科専修）の3名が、批判的思考と言語に関する研究会を持ち、本学において、学生の思考力、言語力を伸長させる取り組みの一環として、本講演会を設定した。

講演会配布資料

ことばの力と教育 ―母語という礎―

明海大学 大津由紀雄 2013年12月21日

ことばの教育を考えるにあたって心得ておかななくてはならないこと

- (1) ことばは人間（ヒト）だけに与えられた種の特性である。
- (2) ことばによって、人間は思考し、その結果を他者に伝え、また、他者の考えていることを理解し、（さらに文字が加わって）共同体内の相互交流によって構築された個人的・社会的知恵の体系（文化）を後世に伝えることが可能になった。いわば、ことばは人間にとって宝物である。
- (3) ことばには個別性・多様性と普遍性の両面がある。ことばは個別言語（日本語、英語、スワヒリ語、日本手話など）の形態をとって現れるが、個別言語はすべて共通の基盤（その性質が普遍性）の上に構築されたシステムであり、その意味で同質である。
- (4) ことばはその構造においても、機能においても、見える世界と見えない（抽象的）世界の2つに広がりを持つ。
- (5) ことばの運用は創造的であり、決まり文句の集積だけでは運用はおぼつかない。
- (6) 母語（第一言語）の中核的知識は、重度な脳機能障害がなければ、一定の言語経験を取り込むことでその獲得が保証されるが、それによって、その効率的、効果的運用が保証されるわけではない。
- (7) ことばの運用（産出や理解など）は情報処理の過程であるので、情報処理の要因（記憶や注意）や方略（strategy）が関与する。
- (8) 母語教育の第一義的目的は母語の効率的、効果的運用が可能になるよう子どもたちを支援するためである。
- (9) 母語を効率よく、効果的に使うためには、ことばの性質（構造と機能）について意識的に捉える（メタ言語意識、「ことばへの気づき」）力が必要である。
- (10) ある人が身につけた（身につけようとする）言語で母語（第一言語）以外のものを「（広義の）第二言語」と呼ぶが、狭義の第二言語には「狭義の第二言語」（当該言語が生活言語として使われている環境で獲得された言語）と「外国語」（当該言語が生活言語として使われていない環境で学習された言語）があり、ことばの教育を考えるときには、この2者を区別する必要がある。
- (11) 日本における英語学習は外国語学習の典型例（日本では英語が生活言語として機能する状況が非常に稀である）であり、英語との接触量や接触する英語の質から考えて、学習英文法による学習支援が不可欠である。

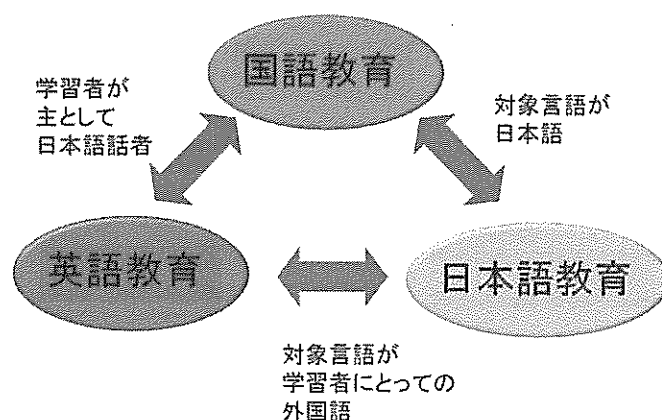
- (12) 学習英文法の理解と活用にはことばへの気づきが必要である。
- (13) ことばへの気づきは直感が利く母語を対象にして小学校段階で育んでおくことが望ましい。
- (14) 母語で育成されたことばへの気づきは母語と同質のシステムである外国語の学習にも有効である。
- (15) ことばへの気づきを育み、より豊かにするためには外国語との触れ合いも有効である。
- (16) 外国語との触れ合いはことばへの気づきをとおして母語の運用能力を高める効果をもたらす。
- (17) 外国語の運用を目指す場合は、学習英文法で得た知識を繰り返し練習によって運用可能な状態にする必要がある（自動化）。
- (18) 外国語の学習を成功させるためには内的動機づけが必要である。
- (19) 社会的状況の変化にも関わらず、卒業後、英語の運用能力が必要になるか、また、必要となる場合でも、どのような運用能力が必要であるかについては人によってばらつきがある。
- (20) 学校英語教育の第一義的目的は母語の効率的、効果的運用を支援するためであり、副次的目的は卒業後、特定の英語運用能力を必要とした場合、最小限の努力でそれを身につけることができるための基礎を形成するためである。
- (21) 日本における、外国人のための日本語教育は狭義の第二言語の獲得の支援である。生活言語としての触れ合いの中で日本語はある程度自然に身につけていくのが普通であるが、学習日本語文法の活用によって、その獲得を効率よく、効果的にする支援をすることができる。
- (22) 日本語教育を実践するためには（日本語を知っているだけでなく）日本語について知らなくてはならず、日本語教師になる過程は日本語について気づく過程でもある（「日本人の知らない日本語」）。
- (23) ことばという、人間にとっての宝物はその力を最大限に活用してこそ意味があり、ことばの教育はその支援をするためのものである。

上のリストは網羅的なものではありませんし、未整理の部分も残されていますが、ことばの教育に携わるといことがいかに多種多様な知識や技能を必要とされるかを理解するには十分かと思いません。

ことばの教育の改善に向けて

上に列挙した事がらを考慮したうえで、わたくしがここ数年、主張していることが「言語教育」研究の実現です。ここでいう「言語教育」研究とは、国語教育研究、英語教育研究、日本語教育研究の総称（寄せ集めに対する名称）ではなく、国語教育研究、英語教育研究、日本語教育研究が有機的に連携した教育を指します（ここには当然、中国語教育、韓国語教育、フランス語教育など、英語教育以外の外国語教育や手話教育が加わるべきところですが、いまのところ、そこまで手を伸ばす余裕がないというのが実情です）。

国語教育、英語教育、日本語教育の関係はつぎのように整理できます。



こう整理すれば、この3者に関する研究が連携しないほうが不思議です。それがこれまで実現しなかったのにはいろいろな理由が考えられますが、もっとも重要な理由は連携の基盤が明確にされなかったことによると考えられます。

今後は教員養成課程のなかで、上に列挙した事らなどをきちんと取り上げ、ことばの教育に携わろうとする人たちがそのあり方について学び、考える機会を組み込むべきです。

もう1つ、今回の講演で強調しておきたいことがあります。それは、今後、ますます重要になってくるのが「グローバル化」が進む現代社会の中でのことばの教育の意義を考えることだということです。グローバル化とことばということになると、いつも英語が引き合いに出されます。実際、日本では、グローバル化は英語（文化）化と同一視されることもしばしばです。しかし、グローバル化のもとでこれまで以上に重要になってくるのが母語、母文化についての理解と個別言語、個別文化の相対性の理解です。

英語一辺倒の歪みが母語の教育や他の外国語教育までも歪め始めています。小学校では、小さい時から英語に親しむのが重要だという素朴な考えから、英語活動（これとても、学習指導要領上は本来「外国語」活動なのです）が導入され、昨今は、それを教科化することや開始学年の引き下げることなどが話題になっています。その反面、学習指導要領では小学校での国語教育はことばの教育であると位置づけながらもその機能を果たしているようには思えません。

大学でも、英語教育が TOEIC 対策講座に成り果てているところが少なくありません。実社会で必要とされる英語運用能力を育成するためと謳いながら、実際は英語運用能力がつかない、むしろ、以前よりも案ずべき状況になっていると受け止めている人は少なくありません。

このような現状を正すためには、ここでも上にに列挙した事ららについて学び、考え、ことばの教育の意義を考え直すことが必要となってきます。

今回の講演がことばの教育の新たな出発に向けたきっかけになってほしいと願っています。



参加者は、本学の学生・院生が 18 名、教員 8 名、現職教員 10 名、他大学の学生・院生・研究者、一般 47 名、計 83 名であった。市内の生涯学習施設（公民館等）へのポスター掲示を依頼した影響か、退職者や日本語ボランティアなど一般参加の方も多数見受けられ、講演会として、ある一定の役割は果たせたのではないかと考える。

講演会終了後は、附属小学校（校長・教頭・教諭）・附属中学校（教諭）と大津先生との間で、教科横断的なことばの教育についての懇談会を行った。

受講者からの感想

貴重な御講義を聞かせて頂きありがとうございました。

人が思考し、創造的な生活を営むために必要な母語の重要性について深く考える機会を得ることができました。

質疑応答の際に日本人の語彙か、言語の運用能力の低下について議論されていましたが、私自身は ICT 機械の発達により手書きで文章を構成する機会が減少したことも原因の一つではないかと考えています。

子どもの母語の習得を担っていく上で、英語、国語、日本語教育の連帯に加えて書写教育の充実も併せて考えていくべきではないかと考えます。

私は子どもの思考力の向上について学びたいと思っている。（私自身それがなく、日常生活で苦労する場合があるからだ）思考力の向上のベースにあるのはことばの力だと考えているが、本日は自分の考えを整理するためのスパイスをたくさん頂き、うれしく思う。

今後もこうした機会があれば、是非参加させて下さい。

非常に興味深く拝聴いたしました。

言語教育をする際に本来ならば重視されるべきである「ことばへの気付き」という要素をあらためて、指摘していただき、今後の自分としての教育への態度を考えるきっかけとなった。

質疑応答の際に子どもたち（大学生を含み）のコミュニケーションモデルが変容し、ことばに対する関心（？）が低下している（ポキャブラリーの減少も）現状に対して、教育者としてどのように対応すべきか、具体的に考えていきたいと思った。

専門外で講者の大津先生と言語学への関心のみから参加させて頂きました。が、お話の中身からは教育やと思っていました。子どもの発達、我々がゆたかに社会生活を送るために何を考えればよいかという多くの問いとヒントを得ることができ、大変勉強になりました。同時に大学教育現場で教員養成に関わる自分自身の課題をぼんやりとですが、みつけることができました。

良い機会を与えて下さったセンターの先生にも ことばで話題提供と頂いた大津先生、ありがとうございました。

英語運用能力を考えるにあたっての母語の役割について改めて確認させていただきました。BICS と CALP を身につける上で、特に高等学校では交渉能力やプレゼン能力を身につけるように考えられている。そう考えるとやはり CALP を養成するに当たっては母語基盤が必ず必要であると思う。L1 にしろ、L2 にしろ、そのような思考力を育てるのは同じ頭の機能から行うことができるとも言われているので、教科別で分けるではなく、教科縦断的なことは必要であると思った。

私は英語教育専修の学部生なのですが、母語つまり国語の教育についてのアプローチを多く知りました。何かを学ぶためには、言語教育を問わず、“気付き”というものはとても大切です。“気付き”から、こどもの興味、関心をひき出す。しかし、実際問題として子ども達はなかなか振り向いてくれません。それはなぜかと考えるときに、私達、教育を担う人々が“気付き”の大切さはわかっていても、その生かし方を理解していないということです。私自身も 20 代なのですが、最近、自分の言彙力の無さを痛感しています。それはやはり、勉強不足であること、つまり 読書が少ないからです。私達も含め、日本人の子ども達は読書離れが進んでいます。読書をするということは“考える”ということです。そして、そこに“気付き”を付加していくことで、より豊かな表現力など、子どもの能力育成、つまり教育の改善になると思います。大変参考になりました。ありがとうございました。

子どもの現状 教育の現状が多数出されたが、ここを鑑ると、ことばの力を教育の中できちんと培うことが今とても必要なことだとわかりました。また、小学校英語についての矛盾もよくわかりました。今日の会はとても有意義でした。ありがとうございました。

本日ありがとうございました。

私は小学校で教員としていますが、英語の教科化については危機感をもっています。

子どもの発達を軽視しているのではないかと思うような 英語の教科化への動きにはどうしても賛成できないと思っています。

その時間を充実し、真に子どものことばの力を伸ばすための 外国語活動の時間を追求していきたいと思いました。今日のお話はそれについて考えるヒントをたくさん与えていただきました。ありがとうございました。

小学校英語の教科ということに関して、自分の知識を増やすことができました。また、国語教育と日本語教育との連携についての知識も増やしていきたいと思った。

英語の教科化について何年後かに 8 年英語を勉強したけど、使えないという日本人が生まれてこないか心配になった。また、英語習得が簡単なものだという考えが増えないかとも考えた。

日本語教師をしようとしている定年退職者です。

今日は目からウロコが何枚か落ちた気がします。

いつも日本語教育と国語教育は本質的に何が違うのか、概念操作の手段が言葉であるなら、日本語か外国語とは関係ないのではないかとボンヤリ考えていたのですが、今日そのことが、だいぶわかってきたような気がします。アリガトウゴザイマシタ。

大津先生のお話が聞けるということですので楽しく来させていただきました。

“外国活動” → “英語の教科化”の流れに押しつぶされそうになっている小学校の現場にいるものとして、母語をていねい

に学ばせることの意味を再確認できました。今やっていること一つずつを丁寧にしていきたいです。小学校国語の文学の授業子どもたち「こう書いてあるから こう思う」とことばにこだわりまくって、読んでいます。

私は来年度から中学校で英語教諭になることが決まっています。英語を通して日本語の美しさに気付いてほしいと思うから、英語教諭を目指しました。大津先生のお話、フロアとの会話から具体的にどういった教育をしていくか、とっかかりがつかめたような気がします。

自分自身 日本語の語彙力の少なさ、誤用の多さを自覚しております。読書量、コミュニケーションの機会の多さ等 問題点に上がったことを自分でも改善して、磨いていきたいと思います。そして、ことばの意識的コントロールができる生徒を育てたいと思います。

貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。私自身大学生として自分の日本語能力というものに不安を感じ、今後教師になるためにも改めて日本語能力を身につけていこうと思うようになりました。

ありがとうございました、学習になりました。こういった講演会をこれからもお願いします。

ことばの力と教育というタイトルで、言語教育とは何か、言語教育の現状について少しお話し頂いてとても興味深く聞かせて頂きました

そこから感じる点がいくつかありました。しかしどういった教育をしていくかを考えた時に、まずはそのための教員を育てなければ、話が進まないと感じました。なので 是非この講座を続けて頂くと同時に学生向けの教員を目指す人向けの(学生や教育現場を目指す人の言語技術の向上のため)言語技術の向上のプログラムあるいは講座を開いて頂きたいと思いました。

今回の企画に感謝します。

語学教育を目指す人々の中でも「ことばの正確さや的確さ」に無頓着な様子が見られます。(私独自の思いかもしれませんが)そのような中 大津先生の御講演は「ことばについて考える機会」を与えて戴けることになったと思います。

日本の国語、英語は勿論 他の教科で「ことばの力」をつけていくことができるよう祈っています。

奈良教育大学 1回生

私にとって難しい講演会でしたが、言語技術能力、また小学校外国語活動の現状について少し知ることができました。

対話の時間のときにたくさんの大人の人が質問やコメントをされていて、普段の授業であまり目にしない光景だったので、感動しました。このような講演会に参加するのは初めてで圧倒されっぱなしだったのですが、質問、コメントまたその補足などで、実際の学校現場の状況や子どもの実態など学ぶことがたくさんありました。

また、具体的な指導内容や対策など学校現場で教師が気をつけていることなどを発言されていて、その対策に対してのコメントなども多数あり、言語技術能力のことについてあまり知らないんですが、とてもわかりやすかったです。「考える力」、本人に気づかせる学びが大切なんやと思ひ、将来教師になった時にそれに気をつけて授業をしていきたいと思いました。今日参加できてよかったです。

このような講演会に参加したのは初めてだったのですが、とても勉強になりました。大津先生の御講演はもちろんですが、後半に行われたディスカッションがとてもよかったと思います。私は普段大学の授業しか受けないので、今日のように様々な年代、分野 職種の人たちに出会うことがありません。今日はその人たちの様々な意見が聞けたことがとても新鮮でした。

長かったので、もう少し早く休憩を入れてもらいたかった。

先日留学生の人と話したのですが、「日本語のコミュニケーションを学ぶためにどんなメディアを使ったらいい？」と聞かれて、私は答えることができませんでした。どうにか考えて、「ラジオは？」と聞いたのですが、「相手の顔がみえないから、難しい」と言われて、困りました。

SNSの発達などにより人と人のつながりが減った。現代の社会において、小学生は親 先生 親族 学校 塾の友人以外と話す機会が減ったと思います。やはり相手を見て、相手のことを考えながら、コミュニケーションをとることにより、本当の意味でのコミュニケーションの力が身につくと私は思うので、もっと社会で子どものコミュニケーション能力を高めるアクションを起こす必要があると思います。

奈良教育大学 書道芸術専修 三回生

言語教育において、小学校からの英語教育には反対であり、第二外国語を学ぶためには、まず母語をしっかりと学び、言語学習の基盤をつくり、「ことばへの気づき」を育てながらがふさわしいというご意見を受け取りましたが、今の日本において、どうして今まで、中学校一年生から英語の学習が行われてきたのか、中学校に入学する時点で、英語学習を行うにふさわしい基盤が小学校のカリキュラムを履修することによって、形づくられていたのか、英語を学習する意味は学習者に理解されていたのか、まだまだ課題や疑問があるのでは、と思いました。

語彙の不足についての議論

主として 今の小中高大学生の語彙の乏しさについて論じられ、一体何が語彙の不足の要因であるのか、様々なことが挙げられましたが、そもそも、今のシニア世代や団塊世代は本をたくさん読み、語彙が豊富だったのか、今のメディアで報いられているバラエティ番組の日本語が不適切であるならば 30代 40代前はどうかだったのか。

向学意識の低い人達のグループに所属する人達の一意見にすぎず、広範囲の視野を得ない、狭い見での議論のように感じました。

一体何と何を比較して、どのようなデータがあり、根拠があるのか、あやふやなままでは問題点ばかりが提起され、解決には繋がらないと思いました。

私は書道教育が専門なのですが、国語教育そして「ことば」について非常に興味があるので、今日の講演では改めて言語教育について考えることができ良かったです。ありがとうございました。

最近 大津先生と鳥飼先生の著書を拝読し このテーマはマイブームになっておりました。大学で外国語教育に携わる者として 大変興味深く拝聴しました。日々 主に大学生の「ことばの力」のなさを痛感しております。少しでも多くの日本人(世間一般を含め)がこういったことに気づいてくれるよう、自分なりにつとめていきたいと考えております。個人的に授業に役立てられそうなお話もたくさんいただきました。どうもありがとうございました。

外国語活動が 2012 年に本格実施されてから、まだ数年しか経過していないのに、もうすでに教科化する動きが始まっている。それには、英語が使える日本人の早期育成を望む経済界が絡んでおり、いくつかの危険も とわかりました。

また、私自身 今回大津先生がおっしゃっていたようにことばの力が弱いな、言語力「ごい力が少ないな」と感じる人が多いです。」私は学生で、先生のお話が難しかったのですが、今の現状を正す必要、良い方向に持っていく必要があると思いました。少しずつですが、自身でもことばの教育について考えていこう、いろいろな情報を吸収していこうと思いました。

貴重なお話 ありがとうございました。

奈良教育大学の学生です。学校の中でこの講演のことを知りました。授業の中で言語技術に興味を持ったため 参加しました。

私は小学校の教員になろうと思っているので、子供たちがコミュニケーション能力や言語技術を付けるためにはどうすればいいのだろう と考えました。その答えになるような話やヒントになるような話を聞くことができました。

自分自身でも論理的な思考や考える力が不足していると思っています。大学在学中には自分のことば能力を高めたいです。

私は現在大学一年生 昨年まで高校生だったのですが、先生が講話中におっしゃっていた「現在の子供達や若者達が欠けている部分」がもう自分にあてはまっているなあ と思いました。

一番 印象に残ったことは最後の対話のときに外国語大学の学生さんがおっしゃっていたことです。「英語の力をつけていても実際に議論できない話すことがない。」確かにその通りだなあ と思いました。

積極的に考えるということが一番自分に不足していることだと感じました。

最近ではメールよりラインの方が主流になってきつつあり、一言で返信する場面がさらにふえてきたように思えます。実際メールよりも文章を考えずにすみ、思ったことをそのまま会話のようにうつことになります。

「うん」などといった相づちなどの一語だけで返信することもあります。またラインはスピードを求められるため グループでのラインであれば、一つひとつの文章を考えて構成する時間がありません。けれどメールより楽なので私自身も利用しています。

便利重視になると、考えることや文章を練る必要性がなくなり、ますます表現力が落ちていくことにつながるのかなと思うと怖くなります。

また わたし自身携帯を手離せないのも、最近漢字を忘れる場面が以前より増えてしまったように思えます。

便利な時代になればなるほど日本語に対しての意識が薄くなるんだと感じました。

京都府高等学校教諭

私は自分が2～5歳の幼少期帯同キコクであり、現公立高校教員として中国帰国、ニューカマー指導を経験しましたので、国語教育、日本語教育、英語教育を学際的に研究することの必要性を常に感じています。このような研究をされている藤田先生 大津先生とお会いできてとてもうれしくなりました。また、自分のやっていることが決してアウトロー的な取り組みではないのだ、と勇気が出ました。

今後とも交流を深めさせていただきたいと強く願っています。私自身は dyslexia の子の指導に現在は興味を持っており、脳科学との関連性も勉強していることです。

大津先生のお話は何度もおうかがいしているのですが、今日は国語教育、日本語教育との関係の大切さが特によくわかりました。大津先生のお話の時間をたくさんとって下さって ありがとうございます。

大津先生の分かりやすい御講演の後 フロアとの意見交換において、大津先生御自身の発言を含め様々な考えを聞く機会ができて良かったと思います。

爽り多い講演会だったと思います。参加して良かったです、どうもありがとうございました。

ことばの重要な役割やことばの特性が分かるようになりました。ことばはコミュニケーションの手段としていろいろな効果が

つくのが認められます。そして ことばは教育に関わる面に対しては どんな役割を果たすかしっかり理解してきました。本日の講演会で発表していただいたことばの力と教育という内容は教育に関わる仕事をしている人に役立つと思います。

ことばの気づき

ある言語教育の導入といえど よく「おもしろさ」という言葉が指摘されていますが、それについてちょっと反論を持っています。「おもしろさ」ではなく「必要」ということが生徒に意識させるのは重要だと思います。その「必要」は先生の説教から分かるのではなく、いろいろな現場に子供を入れて自ら実感させる方が効果的だと思います。

チンパンジーの話がおもしろかった。手話ならば 100~200 も覚えられるのはすごい！！でも言葉のまとまりを作るのはムリってのが興味深かった。

英語を学ぶのも単語テストいっぱい点取れても …って子が多い。漢字も同じく。それが(5)決まり文句の集積ではダメってのと一緒だと思って、話が つながってて 分かりやすかったです。

「トラさんたち」は子どもにも分かりやすい例です。子どもはなんでも英訳できる と思ってるし、すべて漢字にできると 思ってる。そうじゃないってこと 仕組みが違うってことが分かりやすい。外国語活動の必修化によって、「総合的な学習の時間」の1~4 年を社会的なこと 他教科的なことに使えるようになったという現場の声があった。皮肉なことやなーと思った。

それだけ 1~4 年への英語は負担だったのだろうと思う。英語に傾らない言語教育をしていきたい。そして保護者への説明を充実させたいです。

いろん 立場の方から質問が出て勉強になりました。時間を十分にとっていただいて良かった。

「国語」「英語」「日本語」の関係を整理するという研究が連帯しなければならないことを 声を大にして申し上げたいです。

日本語教育に携わっておりまして、この認知度の低さに国策としてもっと外国語としての日本語や日本語教師 に光が当たることを望んでいます。

小さい頃からの「言葉への気づき」が大切であることが先生のご講義を通して再認識いたしました、有難うございました

国際化のためになぜ英語だけなのか 大変疑問です、もっと多言語や多文化に触れる機会を増やすことが国際化に役立つと思うのですが、企業の就職だけの外国語学習でしょうか。

教室 310 の案内板が少なく、大変困りました。そのかわり 結局 日本人学生が部屋の前まで連れてきてもらい、その学生の親切さに触れることが出来て感動しました。

非常に分かりやすく説明して下さい大変勉強になりました。有難うございました。

自分の専門とも重なるので、共感する点が多かった。

ルサンチマンや社会の要請という話があったが、教育にはもともとポピュリズム的なことがある上に「アメリカ人なら子どもでも英語ぺらぺら」などと発言する市長がいるくらいなので、反対する側に自分たちの主張をサポートする論拠(できれば、統計的な証拠)がないと 英語教科化の流れは残念ながら止められないように思う。

その点 日本の英語教育の先生方はどう考えているのだろうか。大津先生は元々言語学系の方なので、英語教育専門の人(教科化推進派)が持っている(はずの) evidence をみたい。また その evidence に対する大津先生の反論もききたい。

自分の研究したい分野の基礎となる内容の話を知ることができ、非常に良かったです。

私は日本語教育と英語教育のはざまにいる人間なので、とても興味深く拝聴させていただきました。三つの教育を切り離して考えることができたいと深く認識しておりましたので、改めて連携していく必要性を感じました。「ことばの気づき」をうまく利用すれば、授業も生徒主体の効果的なものになると思います。

【次世代教員養成センターにおける今後の展開】

学校・地域教育支援は、学校・地域における教育活動に、学生・社会人が支援者として参画することである。学校・地域教育支援に関わる分野として、「スクールサポーター等、教育支援」とその認証制度、「ボランティア活動支援」、これらの枠組み的・内容的側面としてのキャリア教育（人権・市民性教育を含む）である。

本領域の事業目的は、教育支援活動のフィールドの提供、ならびにそのための研修と資格認証を通じて、学校教育、教育活動、支援活動、人権などに関わる知識と実践力を高め、教職に必要な実践的指導力や総合的人間力（コミュニケーション能力・社会性）の育成に寄与するとともに、学生の職能成長、とりわけ教職意識を高めることをねらいとしている。また、県教委や地域教育委員会との連携協力のもと、スクールサポーター研修会やこどもパートナー養成講座の内容を充実させる。

1. 学校・地域教育支援に関わる実践的研究

昨年度に引き続き、奈良県教育委員会人権・地域教育課の「奈良県学校・地域パートナーシップ事業」研修会の企画に関わり、学校コミュニティの育成施策について検討する。

2. こどもパートナーの養成・認証制度の運営

9月に「こどもパートナー養成講座」を実施する。県内高等学校教育コースの生徒や学校コミュニティのコーディネーターに参加を呼びかける。

3. スクールサポーター研修・認証制度の運営

スクール・サポート・オフィスを、学生や学外との対応窓口し、奈良市教委と連携して研修会を実施し、スクールサポート2級および1級の認証を行う。

4. 「スクールサポーター向けの問題解決型事例集」の精査

前年度作成した事例集を用いて、奈良市教育委員会との連携協力のもと、学校教育支援ボランティアが直面する課題について、学校関係者と共有し、共同でその対策について検討し、スクールサポート実践の改善を試みる。

5. 学生の一般ボランティア活動（教育・福祉・環境・野外・国際理解・等）参加の促進

ボランティア・サポート・オフィスを学生や学外との対応窓口とし、宮城教育大学との連携に基づく東北教育復興支援ボランティアや奈良県・奈良市等と連携した、地域連携による放課後活動や学習環境が整わない等の理由による学習困難者への学習支援等を行う。

6. キャリア教育（人権・市民性教育を含む）の展開

昨年度同様、学士課程の教養科目の「教育とキャリア」枠にスクールサポート研修と連動させた「キャリア形成と人権」（前期）、「社会と文化」枠に「人権と教育」（後期）の授業科目を提供するとともに、これらと関連づけた特別講義・講演会などを実施する。

7. 研究開発・調査

(1)教育支援人材認証協会の青少年体験活動奨励制度の運営・プログラム開発研究……こどもパートナー・こどもサポーター・こども支援士といった教育支援人材研修・認証制度はもとより、昨年

度から協会で実施している青少年体験活動奨励制度の運営と制度の充実のためのプログラム開発研究を実施する。

(2)子ども・若者支援専門職養成の総合的研究……専門職の資質能力基準の明確化、養成・研修のカリキュラムの策定など関係団体・NPOなどと連携し展開する。

(3)子どもを取り巻く学校・家庭・地域に関する調査研究……平成24年度からの「子どものストレスと学校・家庭生活との相関に関する調査研究」を展開する。

【これまでとこれから：取組みをふりかえって】

最後に、今年度の取組みをふりかえり、「教育・研究活動」、「本学のキャリア教育と連携した人権・市民性教育の展開」の成果と課題をまとめる。

[教育研究活動]

文科省科研費補助金（基盤 B）「子ども・若者支援専門職養成に関する総合的研究」は、日本社会教育学会六月集会および研究大会においてラウンド・テーブルを設定し、実践的・理論的研究に取り組んだ。その結果、学会での三年間のプロジェクト研究に指定され、専門職の概念や構造の分析、養成システムの構築に取り組んで行く予定である。学長裁量経費による「奈良県の子どもたちのストレスと学校・家庭生活との相関に関する調査研究」は、附属小中学校での質問紙調査を実施した。その分析結果を踏まえ、県内での調査を行う予定である。また、全国的な研究会では、世話人やコーディネーターを務め、人権・市民性教育の充実に資する教育研究活動に取り組んだ。具体的には、第53回社会教育全国研究集会「多文化共生・人権尊重をめざす学習」分科会についての報告は、部落問題研究所『人権と部落問題』2013.12 No.851 pp.60-61、外国人（成人・児童生徒）・障害者・性的少数者など、多様性に関する課題については、国土社『月刊社会教育』2014.1No.699 特集：多文化・多民族共生-違いを豊かさに、藤田美佳「多文化社会における社会教育の課題」pp.4-12.寄稿した。

[キャリア教育と連携した人権・市民性教育の展開]

教員としてのキャリアを形成するための学習として、批判的思考の形成につながる講義・講演会や、公立中学校夜間学級の見学、外部講師を活用したワークショップや特別講義など、具体例を通じて学ぶ機会を提供し、学生の主体的な学びを導くことに努めた。その成果の一部は、本稿に掲載した受講生のレポートにまとめられている。講義を通じて、学生たちからは、普段触れる機会の少ない人々や学びの場と関わりを持つことが、職業意識の形成や再考に繋がり、学びを深めるきっかけになることが述べられていた。

以上を踏まえ、次年度以降は、次世代教員養成センター課題探求教育部門において、多様な実践との関わりを継続させ、教育・研究活動の充実を図っていきたい。

奈良には3つの世界遺産をはじめ、各時代の文化遺産が豊富に存在している。これらの世界遺産や文化遺産についての学ぶことで、地域を知り、地域に生きた人々に思いをはせることができ、地域を愛する心を育てることができる。この地域を愛する心が、持続可能な地域社会の実現にむけた行動の変革の基盤となると考え、学校教育における総合的な学習の時間等の教材開発、生涯教育における観光を通じたESDの推進を研究している。また、ASPUnivNet（ユネスコスクールの活動を支援する大学間ネットワーク）加盟大学として、奈良ASP（ユネスコスクールネットワーク）の事務局を務め、世界遺産教育講演会や学ぶ喜び・ESD連続公開講座、ESD子どもキャンプ、十津川村道普請ボランティア等を行い、ESDのセンター校的機能の充実を図っている。

1. 文化遺産教育研究部門の目的

- ・ 伝統文化や文化財・世界遺産の教材開発、教授法・学習法の開発を行い、教科及び教科横断的内容を豊かにする研究を実践的に行う。
- ・ ユネスコなどの国際機関と連携し、ユネスコスクールに関する取り組みを通して、持続発展教育を推進する。（ASPUnivNet 活動を含む。）

2. ASPUnivNet としての取組

(1) 事務局大学としての取組

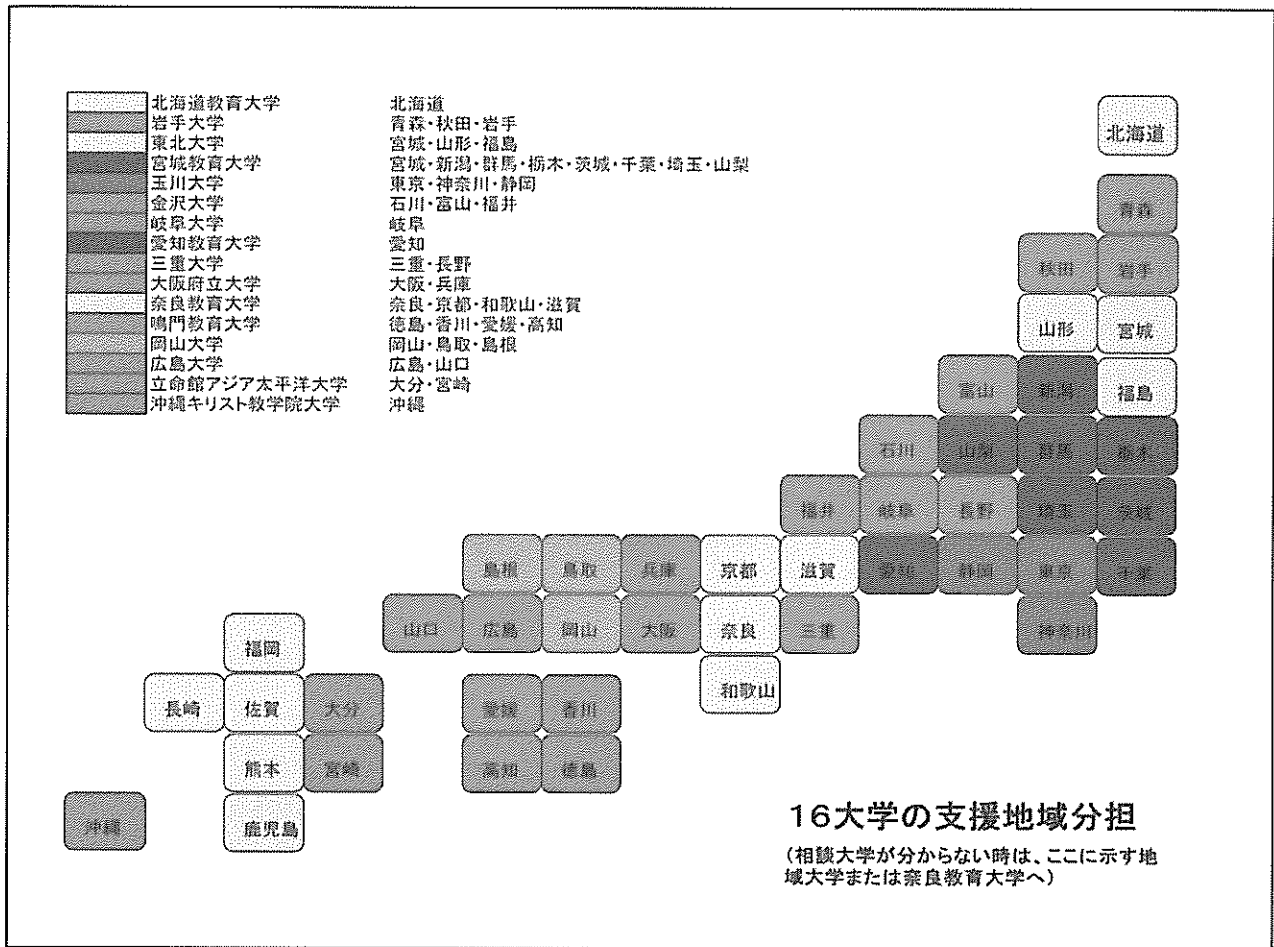
ASPUnivNet とは、2008年に発足した、ユネスコスクールの活動を支援する大学間ネットワークである。本学は創設以来の加盟大学であり、本部門が業務を担当している。特に2011～2012年度においては、ASPUnivNet の事務局大学として、年3回の連絡会議を主催した他、加盟大学のユネスコスクール支援担当エリアを決めたり、ユネスコスクールへの加盟支援サポートチームを設置したり、加盟大学数を増やしたりと、加盟支援や活動支援の円滑化に取り組んだ。

また、日本ユネスコ国内委員会による「ユネスコスクールガイドライン」策定への協力、ユネスコスクール事務局であるユネスコ・アジア文化センター（以下、ACCU）による「ユネスコスクール加盟申請書記入の手引き」作成への協力など、関係機関との連携協力関係の構築に取り組んだ。

さらに、ASPUnivNet 加盟大学を対象としたESD研修会を年2回開催するなど、日本のESDの普及推進に取り組んできた。



ASPUnivNet 連絡会議



16大学の支援地域分担
 (相談大学が分からない時は、ここに示す地域大学または奈良教育大学へ)

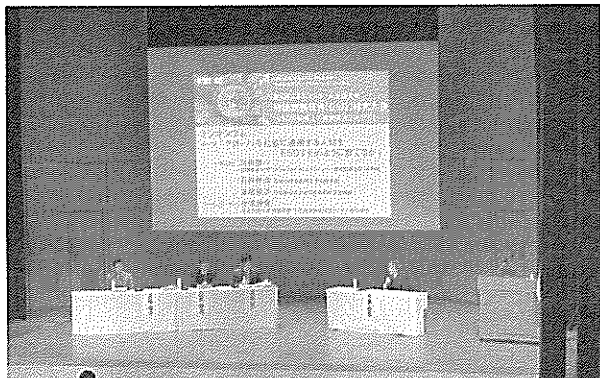
(2) 第4回ユネスコスクール全国大会の開催
 2013年1月26日(土)に文部科学省・日本ユネスコ国内委員会主催の第4回ユネスコスクール全国大会を「ESDの実践上の課題解決に向けて」をテーマに開催し、全国から約600名のユネスコスクールの教職員、関係者の参加を得た。まず、下村博文文部科学大臣(代読:文部科学省加藤重治国際統括官)、日本ユネスコ国内委員会金澤一郎副会長の主催者あいさつ、UnivNet代表・奈良教育大学長友恒人学長の共催あいさつ、奈良市教育委員会中室雄俊教育長の後援あいさつの後、浅井孝司国際協力政策室長から2014年「持続発展教育(ESD)に関するユネスコ世界会議」に関する情報提供を受けた。



閉会式での加藤重治国際統括官のあいさつ

その後、語り部・かたりすとである平野啓子初代日本ユネスコ国内委員会広報大使を特別講師に、奈良教育大学附属中学校1年生と奈良教育大学ユネスコクラブ員による特別授業が行われた。清少納言「枕草子」から「春はあけぼの～」の手話を交えての群読のほか、宮沢賢治「やまなし」の「五月」、最後は会場も一緒になって「雨ニモマケズ」を朗読し、語りとESDの世界をテーマとした実験的な特別授業となった。

その他にも午後からの9つの分科会によるテーマ別交流研修会、「グローバル社会に通用する人材をESDでどのように育てるか」をテーマとしたシンポジウムを開催した。当日はちょうど若草山山焼きの日であったため、情報交換会終了後に鑑賞するなど心に残る全国大会となった。



シンポジウム



情報交換会終了後、若草山山焼きを鑑賞

(3) ユネスコスクール加盟支援

本学は奈良県の他、和歌山県、滋賀県、京都府を担当しているが、2012年度には、九州大学の後を受け、九州地方におけるユネスコスクールへの支援活動を行った。また2013年度にはサポートチームとして福島県での加盟支援も行った。この3年間のユネスコスクール加盟支援校数は次の通りである。

| | |
|--------|-----|
| 2011年度 | 10校 |
| 2012年度 | 10校 |
| 2013年度 | 9校 |

(4) ユネスコスクール研修会の開催

本部門においては、歴史文化都市奈良の特色を生かした文化遺産を切り口としたESDの実践的研究に取り組んでおり、その充実と全国への発信を目的に世界遺産教育講演会（ユネスコスクール研修会）を開催している。

| | | |
|--------|---------------------|----------|
| 2011年度 | 7月17日開催（会場：奈良教育大学） | 参加者数130名 |
| | 12月25日開催（会場：奈良教育大学） | 参加者数250名 |
| | 1月29日開催（会場：東京） | 参加者数 60名 |
| 2012年度 | 7月 7日開催（会場：奈良教育大学） | 参加者数104名 |
| | 10月 6日開催（会場：東京） | 参加者数 30名 |
| 2013年度 | 11月29日開催（会場：奈良教育大学） | 参加者数 36名 |
| | 12月21日開催（会場：奈良教育大学） | 参加者数 30名 |
| | 1月26日開催（会場：奈良教育大） | 参加者数 30名 |

また2013年度からは講演会とフィールドワークをセットにしたESDウォーキングを3回開催した。

| | |
|----------------------|----------|
| 9月22日（会場：東大寺） | 参加者数 27名 |
| 10月27日（会場：斑鳩・法隆寺） | 参加者数 32名 |
| 11月24日（会場：奈良県立万葉文化館） | 参加者数 28名 |

以下にその報告書を掲載する。

① 2011 年度第 1 回世界遺産教育講演会（奈良教育大学ユネスコスクール研修会）

平成 23 年 7 月 17 日（日）本学において「奈良教育大学ユネスコスクール研修会世界遺産教育講演会」を開催し、一般市民、県内学校教職員、本学在学生の他、全国各地から学校関係者や研究者など 130 名の参加がありました。

研修会に先立ち、今回の東日本大震災における、東北地方のユネスコスクール加盟校の生徒を含む多くの犠牲者を悼み、1 分間の黙祷を捧げた。その後、学長による挨拶につづき、前半は文部科学省大臣官房国際



課国際協力政策室長 浅井孝司様による「改訂された ESD（持続可能な開発のために教育）実施計画について」、後半は奈良国立博物館学芸部長 西山 厚様による「こどもたちに伝えたい奈良の心」についてそれぞれ講演していただいた。

大震災後の困難な状況の中、ますます人と人のつながり、地域とのつながり、歴史とのつながりが求められており、地域の文化遺産を通じた ESD である世界遺産教育の重要性が増しています。今回の研修会を通して、世界遺産教育についてより理解を深めて頂き、それぞれの持ち場で又日常においても実践・推進していただきたくその概要をお知らせする。



長友恒人学長

大震災以後キーワードは「絆」、家族の絆、地域社会の絆だと思う。それらの大切さを改めて考え、今一度私達の生活に対する考え方・あり様を考え直す機会となっている。それは再生可能な、持続的な発展が可能な社会のあり様をどう考えるのか、又それに向けてどう実践してゆくのかという、まさに ESD の理念の重要性、正当性を再認識し、議論することである。

本学はこれまで文化遺産を切り口にした持続発展教育を特色ある教育プログラムとして取り組んできたが、この 3 月にはその活動の拠点となる「持続発展・文化遺産教育研究センター」を

新たに立ち上げた。又今年度からユネスコスクール支援大学間ネ

ットワーク（ASPUnivNet）の事務局を宮城教育大学様から引き継いで 2 年間受け持つこととなった。これらの活動を通して、本格的に ESD を本学の教育の中に具体的に取り入れてゆきたいと思う。

本日はお二方の講演を通して持続可能な社会をどのように作っていくのか、そのために何を子ども達に伝えていくべきなのか、一緒に学びあえたらと思う。

【ESD と世界遺産教育】

○世界遺産教育・世界遺産学習の意義と今日までの流れ

ユネスコの「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（1972 年）にも謳われているように世界遺産という人類共通の貴重な遺産を、保護し後世に伝えることは重要である。「保護する」ためには「知る・学習する」ことが必要で、条約の中でも第 27 条、28 条に教育的活動を規定し、その重要性

が明記されている。1998年に改めて世界遺産委員会において教育に重点をおくことが決議され、ユネスコではユネスコスクールを中心に世界遺産教育を実施促進していくことが定められた。我が国では2005年の「国連ESDの10年」の開始にあたり、世界遺産教育をESDの中で推進していく方向を日本ユネスコ国内委員会で確認した。

○世界遺産教育はなぜESDに繋がるのか？

「世界遺産教育を通じて身に付けることのできる力」＝「持続可能な社会の構築を目指してESDで養うべき力」である。その力とは

1. つながりを尊重する態度（時間的・過去～未来、及び地理的なつながり）
2. 未来像を予測して計画する力（未来の人々へ遺産をしっかりと引き継いでいく）
3. 他者と協力する態度（遺産はその土地の人々のものだけでなく人類共通のもの）
4. 多面的、総合的に考える力（遺産そのものの価値だけでなく、当時の生活や社会をも考える）

【ESD実施計画改訂のポイント】

国際的にも国内的にもESDの重要性の高まりが指摘され、様々な社会問題の解決にむけて人と人、人と自然のつながりを大切にする教育が求められている。

1. ESDの普及促進の加速、ESDの「見える化」・「つながる化」の推進
2. 新しい学習指導要領に基づいた実践、ユネスコスクールの活用など、学校教育を活用したESDの推進。
3. 新しい公共の概念との関係を明記：様々な主体の連携による持続可能な地域づくり。
4. 2014年の最終年の先も見据えたESDの更なる促進を図る。

尚、東日本大震災の経験を基にした教訓や復興についての考え方をESDの推進にどう生かしていくかについては、被災地の安定等を待って改めて議論し、再度実施計画を改訂する。

【こどもたちに伝えたい奈良の心】



西山厚学芸部長

今3月11日のことを考えずにして、何も語れない。被災された方々が一時帰宅を許された時、壊れた自宅から何を持ち帰ったか。お金ではなく、アルバムだった。流されてしまった自宅跡で、一生懸命写真を探している様子をテレビで見た。被災地域の人々にとって生きる支えの一つとなった古い一枚の写真、個人にとっての思い出は地域にとっては文化であり、文化の力である。

昨年夏訪ねた山添小学校では、こどもたち全員が、地域のことを良く学び、よく知っていて愛着をもっていたことに驚かされた。彼らに、その地域に伝わる文化財はいつの時代にも皆のように、誰かが大切にし、必死で守ってきたからこそ今に残されてきたことを話した。

今日本は政治・経済のみならず文化も東京一極集中で、それぞれの地域の歴史・文化が失われつつあ



浅井孝司室長

るという危機に直面している。これをくい止めるために今私達がやるべきことは、それぞれの地域の人々が自分達の地域の歴史・文化・自然をとことん良く知って、好きになり、愛着を持ってもらうことである。これをせずして日本の未来はない。

大震災以降、ふるさととのつながり、地域とのつながり、絆というものを大事にする心がめばえつつある。今私は日本ユネスコ協会連盟が数年前に立ち上げた未来遺産プロジェクトにかかわり、今回の大震災の支援活動として「地域に伝承された無形文化の復興によって被災された人々の心を支えよう」という運動をしている。無形文化を復興するためには有形の道具が必要である。すなわち「無形は有形に支えられる」ということで、「心は物に支えられる」ということである。ここで物とは目にみえないもの、文化・自然・時の流れ（歴史）をも含み、それらの「物が心を育てる」のである。心と言う前に物「自然・文化・歴史」を良く知り、大事にすることで心が育つのである。

【東大寺大仏の建立・復興について】

聖武天皇は「全ての動物・全ての植物が共に栄える世の中を作りたい」という切なる思いで大仏様を造ろうとし、「一本の草、一握りの土を持ってきた人にも手伝ってもらいなさい」と言われた。そして、「みんなが幸せになるために大仏様をつくるのだったら力は無いけれど何かの形で関わりたい」という人々がたくさん集まって大仏様を完成させた。この精神は、その後の大仏復興にも受け継がれた。1180年に、平家により大仏様が焼かれたときには、重源上人が「尺布寸鉄（一尺の布、一寸の鉄釘）といえども」と言って、全国から小さな寄付を集め、復興している。又再び戦国時代に焼かれたときは、木造のお顔で屋根もなく雨ざらしだった大仏様に心を痛めた公慶上人が、「一針一草の喜捨」を唱え、一人で全国を回って勧進し、大仏様を復興した。今、私たちが目にしているのは、このときに復興された大仏様だ。聖武天皇の精神がずっと継承され、そして奇跡ともいえる復興を果たしてきた。公慶上人は大仏殿の再建に取り組んだ。しかし、大仏殿再建のための材木を集めるのに大変苦労した。特に大虹梁と言われる大仏殿の大屋根を支える太くて長い木が見つからず苦労した。そうして、やっと材木が見つかり、棟上げも済み、完成まであと一息というところで、公慶上人は亡くなった。過労だった。今、公慶上人の像が大仏殿のすぐ横に安置されており、公慶上人が大仏殿を見守っている。公慶上人は生きている間に大仏殿を見ることはできなかった。そのことを思うたび、私の胸にぐつとくるものがある。

東大寺の大仏殿・大仏様を見るときも、聖武天皇の大仏様を作ろうとした気持ち、又、それが焼かれて、もう一度再建しようと数々の困難を乗り越えて復興を果たした重源上人・公慶上人、又それに携わった人々へ想いをはせる、そうすると大仏殿・大仏様に本当に愛着が湧き、大切に思うことができる。

【正倉院宝物について】

奈良国立博物館では、毎年秋に「正倉院展」を行っており、大勢の方にお越しいただいている。展示された奈良時代の品々を見て、きれいだと言って感動されている。それでもいい、だが、もっと深く知ることで見方が変わる。東大寺の正倉院宝物は光明皇后が聖武天皇亡き後、その遺品を大仏様に献上したものだ。ではなぜ、光明皇后は聖武天皇が使われていたものを大仏様に献上したのだろうか。不思議である。亡き主人の思い出の品々を手元に残そうとせず、すべて献上している。なぜか。それは亡き聖武天皇の愛用の品が身の周りにあり、それが目に触れると「思い出して崩れ砕けてしまう」と光明皇后が書き残している。遺品を目にすると、聖武天皇のことを思い出してしまう、楽しかった日々のことを思い出してしまい、心が崩れ砕けてしまう。だから、聖武天皇が一生かかって建立された大仏様にすべて献上してしまおう、光明皇后はそう思われた。

私たち正倉院宝物をみるとき、この光明皇后の想いに心はせることが大事である。そうするとそれぞ

れの宝物にぐっと愛着が湧き、近づくことができる。

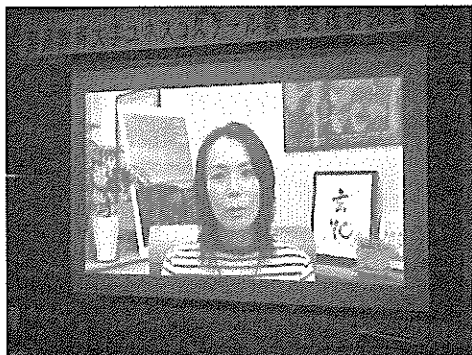
【西大寺の叡尊について】

鎌倉時代に西大寺の復興を成し遂げた叡尊というお坊様がおられた。叡尊は「自分は浄土へ行かず一番悪い世にいて、一番苦しんでいる人を救う」、又「人間は一人では幸せにはなれない、みんなが幸せにならないと自分の幸せはない」という信念で差別されている人々やハンセン病患者の救済活動を行った。そして多くの信仰を集め、権力者からの莫大な寄進は拒否し、少しの田畑、わずかなお金であるけれどもたくさんの人々の寄付を集めて、700ものお寺を復興された。ここにも聖武天皇、重源上人、公慶上人の精神が受け継がれている。奈良にはこういう伝統があるらしい。

このことを伏見小学校で「伏見校区の大先輩・叡尊」と題して話をしたら、6年生全員のこどもたちから感想文をもらった。「伏見校区にこんなすごい人がいたんだとびっくり」とか「伏見の地を誇りに思う」とか書いて送ってきてくれた。このように「知る」ということは大事である。知ることによって、想いをはせることができ、共感することができ、近づくことができ(寄り添うことができ)、大切に思うことができる。これが本当の「学ぶ」ということだ。

それぞれの地域の歴史・文化・自然をよく知り、それを大切に思い、自分達のいる所が最高だと皆が思えるような日本が実現したとき日本は再生する。世界遺産でなくていい、それぞれ地域の歴史・文化・自然をよく学び、好きになり、大切に思う、そういう教育を目指して、実践して行ってほしい。

② 2011年度第2回世界遺産教育講演会（奈良教育大学ユネスコスクール研修会）



河瀬監督から届いたビデオメッセージ

本講演会の第一部では、河瀬直美氏が震災の復興支援のために世界中の映画監督と共同で制作された『3.11 A sense of Home Films』が上映された。3分11秒で構成された短編映画の中には、それぞれの監督が日本の震災によって感じたもの、気づいたことを私たちに問いかけるような内容であった。各映画監督の独自の表現で完成された映画には、ご覧になった方々それぞれが違うメッセージを受け取られたことと思われる。寄せられた感想には『河瀬直美さんのフィルム……胸が詰まる思いでした。まだまだやらなければならないこと、どう生きていくのか……』と記載されたものもあった。

第二部では、気仙沼市教育委員会の及川幸彦氏に『3.11が私たちに問いかけるもの』と題して、現地の状況と、気仙沼市のESDの取組に関する講演していただいた。まず、映し出された大津波の映像に、圧倒された。関西地方では震災関連の報道が少なくなるにつれ、震災が過去のものと感じられるところもある。しかし大津波の映像とそれを実際に体験された及川氏の解説で、大津波の破壊力・脅威を感じさせられた。映像後の講演では、震災から約10か月が過ぎようとしている今でも、気仙沼市の方々は精神的、身体的に被災中であるということ、また私たちが普段「当たり前」と思っていることは、被災地では「当たり前」ではなくなっていること等を伝えていただいた。ショックを受けた、何か忘れかけていたことを思い出すことができた、という感想もあった。

しかし、震災の影響によって、改めて気仙沼市のこどもたちのたくましさも知ることができた。吹奏楽部の中学生による避難所を周る慰問コンサート、高齢者ケアのための肩もみボランティア、また、「復

興に向けて、自分ができることを考えよう。」をスローガンに、津波によって車が突っこんでガラスが散らばった田んぼを清掃し、田植えができる状態にまで復元した中学生などなど、子どもたちの活動に私たちは強く感動を受けた。今の日本にはこのような子どもたちを育てるための教育が必要ではないかと感じさせられた。

気仙沼市では、先進的な ESD の取組が行われている。漁師が森を育てる「森は海の恋人運動」や、地元の産物を活かした「スローフード都市運動」など、気仙沼市から世界に発信されている取り組みも多い。まだ、気仙沼市には震災の爪痕が大きく残っている。しかし、気仙沼復興計画に掲げられたスローガンは「海と生きる」である。海によって壊滅されてしまったが、それでも私たちは自然と共生することが人間としてのキーコンセプトになると及川氏は強く語られた。



講演する及川氏

③ 2011 年度第 3 回世界遺産教育講演会（奈良教育大学ユネスコスクール研修会）

奈良教育大学では、日本／ユネスコパートナーシップ事業の一環として、1月29日、秋葉原 UDX を会場に「奈良教育大学世界遺産教育講演会」を開催した。

文部科学省国際統括官補佐の井村隆様のご挨拶の後、奈良教育大学学長長友恒人が、「奈良教育大がめざす ESD について」と題して講演を行った。長友学長は、学校の主たる役割である学力向上と ESD の関わりにふれ、ESD の理論化こそが高等教育機関の役割であると指摘すると共に、奈良教育大学が目指す ESD として、奈良の自然・地域文化に根差した個性ある教育研究、学際的研究の推進と、アジア地域を見据えた教育研究上の国際化について講演した。教員養成の高度化、質保証、学習とは何か、学びの喜びなどにも言及する奥の深い内容となった。



講演する長友学長

また、華嚴宗大本山東大寺塔頭清涼院住職の森本公穰氏からは「奈良東大寺のお水取りの真実」と題した講演があり、一二六〇年間一度もとだえることなく続けられている東大寺修二会（お水取り）について、練行衆を十四回お勤めになった経験者ならではの話に聞き入った。昨年三月十一日の震災の時、二月堂で本行の最中であったこと、「悔過」の行と震災についての思い、東日本大震災復興ボランティアとしての活動と東大寺大仏に込められた願いについての話など、感銘深い講演会となった。



修二会について語る森本公穰氏

今回の講演会は、奈良教育大学がこれまで取り組んできた ESD ・世界遺産教育の充実と発信を目的としたものであり、今後も引き続き ESD に関する研究と教育実践を蓄積し、発信していく予定である。

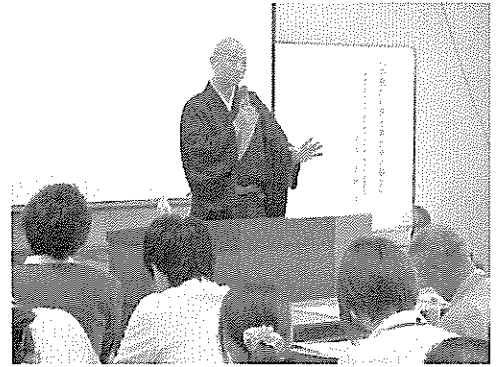
④ 2012 年度第 1 回世界遺産教育講演会（奈良教育大学ユネスコスクール研修会）

「内側から見る東大寺の魅力」上司 永照 氏

【なぜ大仏様があるのか】

聖武天皇の時代は、地震があったり天然痘が流行したりで、大変な時代だった。聖武天皇は自分の統治がよかったならば、被害はもっと小さくて済むだろうと「責めは我ひとりであり」と考えておられた。

仏教に「慈悲」という言葉がある。「慈」とはいつくしみ、「悲」はかなしみである。この「悲しみ」とは、悲しいという感情を共にすることである。人は悲しみにくれているとき、一緒に悲しんでくれる人が側にいると、安心でき、立ち直っていけるものだ。人の感情には「喜び」もある。親しい人が喜んでいてこちらもうれしくなる。でも、親しくない人が喜んでいてのを見た時も、同じように喜ぶことができるだろうか。そこが難しい。誰彼という分け隔てなく、悲しいという感情、うれしいという感情を共有する、それが「慈悲」だと思う。



光明皇后は施薬院や悲田院を設けられ、人々の救済に当たられていた。「慈悲」を実践されていたと言えるだろう。一方、聖武天皇は、理念のようなものが必要だと考えられていた。そのころに河内の知識寺を訪問する機会があり、そこで盧舎那仏をご覧になり、大仏の建立を思い立たれた。

盧舎那仏は「雑華嚴浄」という釈迦の悟りの世界、宇宙の真理の世界の仏様である。「雑」とは「あらゆる種類の生きとし生けるもの」、「華嚴」は「花でかざる」こと、「浄」は「きれい」、つまり、「様々な花できれいに飾る」ということである。「すべての生きているものが花である」ということを表している。では「花」とは何か。人は一人では生きていけないし、一人で生きているわけではない。縁、つまりかかわりあって生きている。たくさんの水晶玉があるとしよう。その水晶玉をよく見ると、隣の水晶玉が映っている。その水晶玉をよく見ると、また隣の水晶玉が映り込んでいる。よく見ると水晶玉にはたくさんの水晶玉が映り込んでいる。一つの水晶玉をとってしまおうと、さっきまでとは映り方が違ってしまふ。そうやって人も関わりあって生きていて、同時にすべての人はかけがえのない存在である。かけがえのない者どうしが関わりあって生きているのが現実である。

この宇宙の真理の光をあまねく隅々まで照らすのが、盧舎那仏である。大仏様は普通の仏像の10倍の大きさに作られている。10倍というのは、四方八方に上下を加え、「無限の世界」ということを表している。大仏様には「動植ことごとく榮える」という願いが込められている。大仏様を見ることで、普段忘れがちな「動植ことごとく榮える」こと「少欲知足」ということを思い出していただきたい。大仏様に込められた祈りや思いは非常に強いものであり、今の世界でも十分に通じるものである。

【東大寺修二会について】

修二会は753年に実忠和尚によりはじめられてから、一度も途切れることなく1260年間続けられている不退の行法である。修二会では、本尊である十一面観音菩薩に「五穀豊穰」「万民豊楽」「風雨順次」を祈っている。この祈りの中でも「風雨順次」が大切だと思っている。風雨順次というのは、季節がいつも通りにやってくることを願うということだ。冬の次に春が来るのは当たり前かもしれない。でも、もし春がやってこなかったら、農作物が作れず大変なことになる。今やっていることで神様の罰が当たって、春が来ないかもしれない。私たちは何でも「しすぎている」。求めすぎたり、望みすぎたり、使いすぎたりしている。だから祈っているだけでなく、十一面観悔過といって、「あやまちを悔いる」ことも必要だ。このやりすぎを悔いるのが悔過だ。

天地が平穏で、次の春がいつも通りやってくることを願うのが修二会である。この願いも人間にとって中心的な願いであるからこそ、1260年間にわたって一度も途切れることなく続けられている。

今の私たちの暮らしは「しすぎ」てはいないだろうか。生き方を考えないといけないと思う。

⑤ 2012年度第2回世界遺産教育講演会（奈良教育大学ユネスコスクール研修会）

「平城遷都1300年祭が実現した、教育と観光の融合魅力」

講師：「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム事務局長 福井 昌平 氏

「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラムは2008年にDESD最終年會合の日本開催を提唱して発足した任意団体。民間からESDの広がりをつながり構築を盛り上げるためのプロジェクトを推進している。そのコア事業として2009年より「ESDの10年・地球市民會議」（今年は11月27日に開催）、そして多様なステークホルダーの連携と活動ゴールの構築を目指した「ESD事業化ワークショップ」を実施してきた。

最終年會合の開催都市が総括會合は愛知県・名古屋市、ステークホルダーの會合は岡山市に決定した。（岡山：11月6日－8日、愛知・名古屋：11月10日－12日）、いよいよ「ESDの10年」の成果を最終的に取りまとめる時期となった。

「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラムでは今年より、地球環境基金の助成でESDの掲げるテーマの多様な広がりにも焦点を当て、特に5つのテーマをピックアップしてその個別内容のとりまとめを目指す「ESDテーマワークショップ」をスタートした。その中の一つが、「歴史文化遺産と人材育成」で、奈良教育大学の持続発展・文化遺産教育センターのご協力でスタートした。

1300年祭で実施された平城宮跡探訪ツアーに県内在住の姉が3回参加したが、3回目には自分がガイドになって友人達に説明したと言っていた。人材育成において、歴史文化遺産の現場で参加体験学習することの影響は大きい。また、探訪ツアーのボランティアガイドは奈良検定1級の人たちが多く参加してくださった。普段はそのせっかくの知識を発揮する場所がなかったが、ああいった活躍の機会があったことは重要なことで、さらにそれに影響を受ける県民、という良い循環を生んだ。「観光」と「教育（学び）」がカップリングできた。

ミラノ市の歴史文化遺産（スフォルツェスコ城）の活用事例で、四歳～九歳の幼児歴史教育をご紹介したい。市、学校、アーティスト、コミュニケーションデザイナーが連携した学習プログラムとして参考になると思う。

リオ+20成果文書へESD条項が包含され、さらなる世界的な広がりが見込まれる。ESDと言ってもE(=Education、学校教育)だけでなく、L: Learning(学び・気づき)も含めることによって世代間、分野間のリンケージにつながると考えている。ESDは「E」(教える)というより「L」(学ぶ)という認識でいる。上から教えるというよりも自分が気づく・学ぶ力を養うことがESDだ。ヨハネスブルグサミットで日本が提唱したことから「国連・ESDの10年」がスタート。2014年の最終年にはユネスコ主催で公式な最終年會合が行われる。

⑥ 2013年度第1回世界遺産教育講演会（奈良教育大学ユネスコスクール研修会）

【講演（1）「ESDテーマ別ワークショップ報告」】

講師 「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム理事兼事務局長 福井 昌平 氏

- ・ ESDはわかりにくいという声がよく聞かれる。日本では、ESDの理論に関する議論が多いが、私たちは実際に活動をしている現場に光を当てたいと考えている。
- ・ 世界から期待されている日本のESDは5つある。

- (1) 防災教育と気候変動教育、(2) 生物の多様性とE S D、(3) 持続可能な生産と消費
(4) 歴史文化遺産と人材育成→奈良が中心に、(5) 貧困撲滅と社会的公正のための教育

- ・ 奈良モデルをベースに色々と議論をした。東京都の八名川小学校によるユネスコスクールの取組、大田市、平泉町、大牟田市、奈良モデルを紹介しながら議論し、歴史文化遺産のE S D推進における有効性を確認した。課題としては、地域の歴史文化遺産を説明できる指導者の育成と継続的な活動の場の創出である。また、地域の歴史文化遺産をE S Dの側面から捉え、授業化できる教員の育成、子どもの心に火をつける教員の育成が重要である。
- ・ 今後の方法には2つある。学校教育においてはユネスコスクールを中心に、歴史文化遺産を通したE S Dの推進、もう一つは観光のE S D化。観光とは地域の光を見るところで、物見遊山ではない。地域の光を見る、体験することが観光だ。観光をE S Dのひとつの入り口にする。社会人のE S Dである。これが全国の場で議論された結論だ。

【講演(2)「歴史文化遺産と人材育成」】

講師 奈良教育大学持続発展・文化遺産教育研究センター 専任講師 中澤 静男

- ・ 高度経済成長期、先人は死に物狂いで働いて、豊かな社会を築いた。その象徴が、1964年の新幹線の開通であり、同じ年の東京オリンピック開催、1970年の大阪万博だった。そして今、問われているのは、現在の私たちがどのような未来を子どもたちに残そうとしているのかということだ。
- ・ 現在、人間社会の持続に関わって2つの大きな課題がある。一つは環境という人と環境との関わりに関する問題であり、もう一つは平和という、人と人との関わりに関する問題だ。
- ・ 環境問題には3つある。二酸化炭素濃度の上昇に伴う地球温暖化、エネルギーなどの資源の枯渇、生物多様性の減少による生態系の危機である。
- ・ 人と人との関わりに関する問題は、人権や多様な文化を尊重しない傾向と、世代内の他者や先人の苦勞、未来の人への無関心という問題だ。
- ・ 私たちには持続可能な社会を形成し、未来の子どもたちに残していく責任がある。そのためには、環境に配慮できることと、人権や文化等に配慮できる人を育てていかねばならない。そうすることが当たり前だという文化を教育を通して作っていくのがE S Dの役割だ。
- ・ 10月19日に岡山で開催されたE S Dテーマ別会議では、持続可能な社会をつくっていかうという市民のやる気をいかにして引き出すのかがテーマとなった。やる気というのは換言すれば「当事者意識」である。
- ・ これまでは、E S Dの講演会などを開催して、市民啓発につとめてきたが、参加者が限られることと、「勉強」のイメージが強すぎるのが問題だった。そこで、奈良教育大学では、観光をおとなのE S Dとしてとらえ、観光によって地域への関心を高め、持続可能な地域社会の形成者の育成を提案している。
- ・ E S Dとしての観光を推進する上で、多様なステークホルダーが集うプラットフォームは有効である。プラットフォームにおいて、新しいプログラムの開発が期待できる。
- ・ 活動を継続するためには、「面白さ」がキーワードとなる。面白いから続けられる、面白いから人を巻き込める、巻き込まれた人が次の人材へと育っていく。

⑦ 2013年度第2回世界遺産教育講演会(奈良教育大学ユネスコスクール研修会)

「E S Dと防災教育のシナジー その接続と融合」

講師 気仙沼市教育委員会副参事兼指導主事 及川 幸彦氏

ESDをベースとした防災教育 シナジー…噛みあって、新たな価値が生まれていく

【ESDにおける防災教育と気候変動教育】

- ・ ユネスコがかかげる3つのテーマ ① 気候変動 ② 生物多様性 ③ 防災・減災
①②③はつながっており、①も②も③に影響を与える
- ・ 昨今、地球上では、東日本大震災以上の災害が頻発している。東日本大震災では、行方不明者を含め、2万人程が亡くなっている。これほどの災害は1000年に一度と言われているが、冷静に考えると大震災以上の災害が地球上ではたくさん起きていることに気付かされる。
- ・ 自然災害と気候変動の影響を関連付けて考えると、4つに分類できる。①気候変動が原因であり、スピーディーに災害が発生するもの（大型台風、竜巻）、②気候変動が原因であり、ゆっくり災害が進行するもの（海水面の上昇、種の絶滅）、③気候変動以外の原因でスピーディーに発生するもの（地震、火山噴火）、④気候変動以外が原因でゆっくり進行するもの（地盤沈下、隆起）。4つに分類してメカニズムを理解することが大切だ。
- ・ ESD的な防災教育では、次の4つ順番で学ぶことが求められる。
 - ① 災害発生メカニズムの理解（知識・理解）
 - ② 我々の生活への影響（つながり・因果関係の認識）
 - ③ 災害への対応と準備・減災（理解と実践）
 - ④ 復興・まちづくり（思考）このプロセスをきちんと踏まえることがESD的な防災教育だ。

【3.11からの教訓とESDの効果】

- ・ 街全体として大きな打撃を受けた。その一つが、失業率の高さ（80パーセント）だ。
- ・ 持続不可能な場面には大きく2つあると思う。①災害（人災・天災）、②紛争・戦争だ。この世の中がいつまでも続くと思っているところに落とし穴があると思う。3.11を体験して、持続不可能な社会を実感した。日常生活のありがたさがわかった。そういう持続不可能な場面をどう乗り越えていくかがESDの大きなミッションだ。
- ・ 東日本大震災で感じたこれまでのESDの効果として、避難所での子どもの活躍を挙げることができる。子どもは指示されるのを待つのではなく、自分で考えて行動していた。すべての学校で子どもたちが立ち上がった。これまでのESDが無駄ではなかったと実感した。
- ・ 持続不可能な状況に対応する4つの力を養うESD
 - ①自助（判断力）自分で自分を守る。
 - ②共助（協働）コミュニティで支え合う。孤立した中で持ちこたえた。
 - ③公助（組織力）行政の役割。
 - ④N助（外からの支援：NPO、NGO、Network）（公助が機能しなかったときに力を発揮した）
- ・ 危機的場面で生きてくるESDの力
 - ①デマに流されずに客観的に判断する力（クリティカルシンキング、）②体系的に考える（システムズシンキング）③全体的に考える（ホリスティックシンキング）④保護者とのコミュニケーション力 ⑤様々な情報を集め、分析する力 ⑥意思決定力災害時・非常時にはこれらが一気に求められる。ESDで育てる力は危機的状況におけるリーダーシップにもつながる。普段からやっておくことが大切だと実感した。
- ・ 共助の部分では、地域との連携がうまくいっていた学校は、避難所運営にも効果があった。

普段から連携するシステムを作り上げておく。ESDはそういう教育だ。顔の見える関係を作っておくことが大切だ。

- ・ 行政との連携（公助） ESDを通じて連携しておく。
- ・ N助 ESDで結びついてきたことが色々な支援に結びついた。

多様な主体の参画と協働こそが、日本型 ESD だ。（Japan レポートのタイトル）これが危機的場面に効果的に機能する。

【ESD からの防災教育の改善】

- ・ つながりキーワードとした防災教育の改善

階上中学校の防災学習：自助・共助・公助に関連した学習を3年かけてサイクルする取組を実践していた。しかし、3時15分頃に想定を上回る津波があり、避難所ごと飲み込まれたところもあったことから、3人の生徒を失った。今までの防災教育ではダメだ、地域ぐるみで取り組まなければだめだと、改善に取り組む。自治会に働きかけて、中学生が中心になって仮設住宅・地域を巻き込んだ合同訓練、避難所設営に取り組む。去年の12月7日に実際に津波警報が発令された時、中学生が避難所を設営し、避難者を受け入れ（300名、教員は2～3人）、対応した。学校を拠点としたネットワークづくり、地域防災を推進している。

小原木中学校の海拔表示プロジェクト

東日本大震災では、23メートルの津波におそわれた。20メートルまでは危険（赤）、海拔35メートル以上ならば安全（緑）だ。地域のみなさんに意識してもらうために、すべての電柱に海拔を表示したプレートを取り付けた。メンテナンスもしている。

【ESD のカリキュラム手法を生かした防災教育の改善（コンテンツ・プログラム）】

- ・ 国立教育政策研究所で開発された ESD で重視する能力態度を防災教育に落とし込み、実際の場면을想定しながら作成した。（目的に即して落とし込む、読み替えていくことが大切）
- ・ 学年ごとのカリキュラムの中に防災に関連するものを抽出して重点的に取り組むようにした。これは「あるものを活用」しただけで、体系立っていない。入口に過ぎない。教科には教科の目的がある。
- ・ 新たなコンテンツを作っていくために、マトリックス・防災シートを作成した。縦軸に教科領域・特別活動など、横軸は低・中・高と中学校といった発達段階を入れて、教科領域と発達段階でできる防災教育のコンテンツを約60～70つくって、はめ込んでいった。それを総合でやる部分、教科でやる部分、その他でやる部分というのを入れ込んでつくったのが防災学習シート。（対象学年や指導案例、ワンポイントアドバイスなどが付けられている）さっき言った一つ一つの枠組みが1シートになっている。このシートを100近く作っていく。1～2時間でできるやつ、いわゆるエッセンスだ。それを縦横にはめ込んで、さらにそれに自助公助などを入れ、知識理解から復興にいたるまでのプロセスも入れ、ESDの7つの能力態度の何がリンクするのかを意識しながらやっていく。
- ・ テーマをつけて、防災シートを組み合わせることでストーリー化・体系化ができ、防災教育の深化発展につながる。
- ・ 作成したコンテンツに優先順位をつけ、高いものにはワークシートや実践事例や資料集もつける。
- ・ この手法は、ESDのカリキュラム開発の手法「メビウスのプログラムチャート」と同じである。
- ・ 一つ一つの活動に魂というか、内容・コンテンツを入れてつなげていくこと。
- ・ しかし、それぞれは地域の実態に合わせて展開する必要があり、それをするのが教員の役割。

【ESD からの復興：復興に向けた重要なポイント】

ESD が基本理念として生きている。ESD はキーコンセプト。危機対応を高める上で重要な視点だ。危機的場面を広域に想定できる力をつける。

自然との共生だ。自然の脅威や人間の力の有限性を自覚する意味でも、自然と共生した暮らし、地域と一緒にあったコミュニティを大事にした教育は重要になる。

ESD が地域復興の担い手を育てる。ベースとして地域を誇りに思う、地域に愛着を持つ、地域を知る、アイデンティティを育成する上で重要だ。地域を大切にしつつ、グローバルな視野で互いの文化を尊重する、という教育が重要だ。これは文化遺産を通した ESD との共通点だ。

自分たちの未来像を描くことができる子どもを育てる。

キーになる 4 項目

1. 防災・減災のためのネットワーク構築に ESD はどう貢献するのか。
2. コミュニティとのリンケージが重要。
3. 縦割りでやっていたんではダメ。様々な教育を俯瞰する視点が必要。
4. 未来を担う子どもたちの能力を育成する。

⑧ 2013 年度第 3 回世界遺産教育講演会（奈良教育大学ユネスコスクール研修会）

演題 「学校教育全体で取り組む ESD」

講師 東京都江東区立八名川小学校 校長 手島 利夫 氏

【ユネスコと ESD】

- ・ ユネスコは諸国民の教育、科学、文化の協力と交流を通じて、国際平和と人類の福祉の促進を目的とした国際連合の専門機関であり、ユネスコの重要課題が ESD だ。
- ・ 地球規模の課題があり、その解決のためにユネスコとして何ができるか。そこから生まれたのが ESD だ。ESD は未来をつくる教育だ。
- ・ ユネスコスクールは現在、世界 180 か国に 9000 校あり、日本には 647 校ある。ESD の推進拠点として期待されている。



【ESD に取り組む意味】

- ・ 何のために学ぶのかを考える。自分が安泰な暮らしをするために学ぶという答えがよくあるが、それだけ終わってしまっていないのか。子どもたちがどういう時代に生き、どんな課題をかかえているのかから、学ぶ意味を考える必要がある。
- ・ 課題
 - i) 大震災：東京や関西でも巨大地震の発生が予想されているが、実際に発生した時どうすればいいのか。解決できていない。
 - ii) 福島第一発電所のような原発事故は、日本中の原発で発生する可能性がある。原発事故を防ぐ方法も解決できていない
 - iii) 温暖化が、地球全体で生じている。年々ひどくなっていくと予想されており、事実、そうなっている。
- ・ 皆が安心して暮らすことができる世の中であってほしい。教育だけで解決できないのかもしれないけれど、教育でも考えていかなければならない。
- ・ 子どもたちは、厳しい地球環境、激変する不安定な世界で生きていかななくてはならない。

- ・ 日本子どもたちがかかえる課題
- ・ 自らに自信をもてない みんなと一緒に行動したがる
- ・ 人間関係をうまく築けない
- ・ 目立つことを極端に恐れる（挙手・発言すらしな）「しゃしゃってると言われたくない」
- ・ 厳しいことから逃避しがち（ネットゲームに逃げ込んで・・・）
- ・ 必ずしも明るい未来ではないが、厳しい時代を生き抜いていく力をつけていきたい。
 - i 厳しい就職戦線
 - ii グローバルな労働市場
 - ・ 外国語で意志疎通する力
 - ・ 相手の文化や人柄を理解する力
 - ・ 協力して、新しいものを創っていく力 →高い能力が求められている
 - iii 多文化共生社会
 - iv 厳しい地球環境、激変する不安定な世界
- ・ 厳しい時代を生きる子どもたちに求められる能力は、①新しい問題を見つけチャレンジできる問題解決能力、②創造的なコミュニケーション能力であり、それを支える健康や体力である。それはつまり文科省の言う「生きる力」であり、ESD でめざす子ども像と同じだ。
- ・ 「生きる力」の教育はすべての学校で取り組まなければならない緊急の課題であるが、どのように進めたらいいのかが明らかでない。だからこそ、ESD の理念や手法が重要だ。
- ・ ESD に取り組む理由は、困難な時代をたくましく生き抜く日本人を育てるため。

【ESD に取り組むことで生まれる価値】

- i) 学校にとって（アンケート結果より）
 - ・ 学校教育方針が明確化（85%）、活動の活発化（55%）、開かれた学校に（35%）、教育方法の改善（26%）
 - ・ 学校の教育方針が明確化されることはとても重要だ。学校教育全体で取り組むべき「生きる力」をどこで育てるのがはっきりしていないのでは、それは実現できない。全体で取り組むというボンヤリしたものが、ESD カレンダーを作成することで明らかになっていく。
 - ・ 教育方法の改善が26%しかないのは問題だ。
- ii) 教師にとって：教育観・指導観が変わり、教師としての資質向上
 - ・ 持続可能な世界のための4つの視点で教科領域の学びをつなぎ、ESD カレンダーに表現する。
 - 環境の教育、国際的な協力、多文化の理解、人権・命の教育
 環境問題解決には国際的な協力が必要。協力するためには、互いの文化を尊重し人間として尊重し合う信頼関係が大切。そして人が人として生きていくには環境が重要というように、4つの視点は相互に関連しあっている。
 - ・ 1年間の各教科の単元をつないでイメージマップをつくる。各教科をつないでいく。その際、4つの視点で色分けする。生活科や総合的な学習の時間は、各教科をつないでいく時間、教科で学んだ内容を「活用」する場となる。「活用」にあたるものは白枠にして表す。
 - ・ さらに総合的な学習の時間の学習指導要領から、4つの視点を改善し、①環境の教育、②国際理解や協力、③人権・命の教育、④学習スキルとした。

環境 : 環境の諸問題、水、ごみ、動植物や生態系、災害、エネルギー、放射能、食料生産

国際理解や協力：多文化理解、国際協力、地域の人々の暮らし、伝統や文化、異質への寛容

人権や命：福祉、健康、バリアフリー、生命、人権、災害

学習スキル：情報、表やグラフ、新聞づくり、論文・説明文の書き方、インタビューの仕方

- ・ ESD カレンダーはみんなで創ることに意味がある。人は体験をとおして納得する。発想だけで納得させるのは難しい。体験させて、そこから転換の芽を育てる。
- ・ 地域人材との連携を通して、教員に学習コーディネーターとしての力が付く。
- ・ 地域人材との連携をカリキュラムに明示することで、誰とつながればいいのか分かる。
- ・ カレンダーがあると、カリキュラム内で軽重をつける計画が立てることができる。あるレベル以上の取組が可能となる。
- ・ フォルダ内に指導資料を蓄積・活用する。ただし単に模倣するのではなく、これを乗り越えていく土台として使うこと。(システムが重要。一人でできることは限りがある)
- ・ 問題解決型の学習の充実を図ることができる。

⑨ 2013 年度第 1 回 ESD ウォーキング (奈良教育大学ユネスコスクール研修会)

【奈良の魅力発見 ESD ウォーキング】

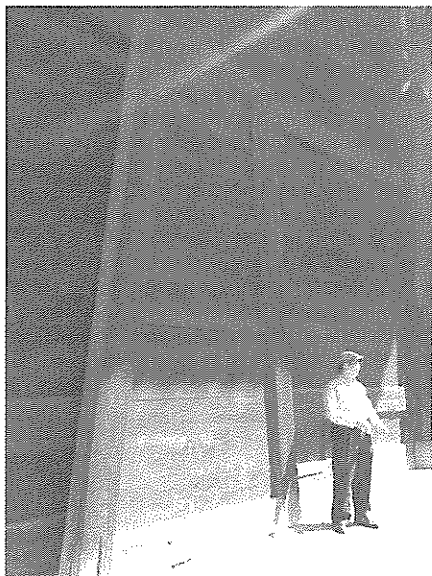


頭塔を望む

「頭塔」767 年に東大寺の実忠和尚が築いた。もとあった古墳を壊して、下層頭塔がつけられている。この場所は、東大寺の真南であるとともに、新薬師寺の西の野にあたっており、平城京からは一段高い場所である。平城京から見える位置とすることを意識したのかもしれない。頭塔に配置される石仏は、760 年～767 年に制作されたものと見られる。石仏に見られるほおなどが豊かな様式を唐から伝えたのは 753 年に来日した鑑真であろうと思われる。ところが 752 年の大仏開眼時に造られた東大寺八角灯籠火袋の音声菩薩像もこの様式に近く、不思議である。

「南大門：金剛力士像」

金剛力士像は、慶派によって、たった 69 日間で作成された。しかし、彼らはそれ以前に大仏殿の四天王像など、この金剛力士像よりも大きな像をすでに造っており、大きな仏像を作成するスキル



南大門に残る枡板

があったものと思われる。一度据え付けてから、下から見上げたときにどう見えるかを考え、修正している。おへその位置や右手をふりあげているところなど、見事である。

南大門の西の壁に沿って、木造の構築物があることを教えていただく。「さあ、これは何でしょうか？」(山岸)

フィールドワークの後半で、転害門を見学したとき、構築物が何のためにあるのか、いやあったのかがわかった。かつて南大門につづいて土堀が築かれており、当時は版築(はんちく)といって土をつきかためて壁を造っていた。これはその土をかこむ枡板である。明治時代になって、大仏殿で県議会が開催されたりしたが、馬車が入らないという理由で、壊されて、今はこれしか残っていない。

「東大寺ミュージアム見学」

伝日光立像・伝月光立像の修理された指先をみる。月光立像の指先は銅芯が使われているため、奈良時代のまま残っている。日光立像は奈良時代以降に修理されているが、銅芯ではなく鉄芯を使ったため、錆びて膨張し、像を壊してしまっている。奈良時代に守られていた芯には銅を使うと言うことが、すでに伝わっていなかったものと思われる。その他、講演会で教えていただいた陰剣・陽剣を見る。

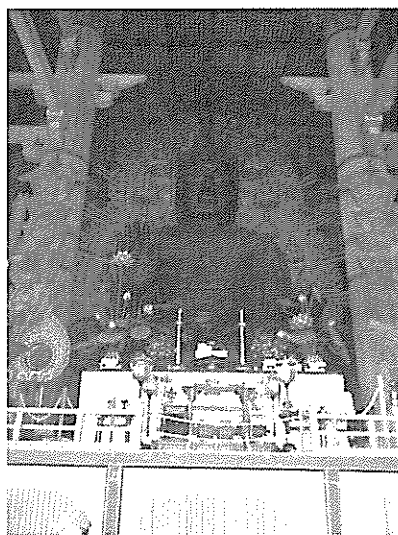


東大寺西塔跡（七重塔）



東大寺西大門跡（ここが奈良時代の正門）

「大仏殿」



盧舎那仏坐像



連弁線刻蓮華蔵世界図のうちの須弥山世界（レプリカ）

大仏殿は、江戸時代に再建されたが、創建当時は現在よりも1.5倍ほど横に広がった。大仏様も大理石でできた白石の座の上にあった金色の蓮台の上に安置されており、今よりも1メートルほど高かった。また后背は円形で高さが29メートルもあった。台座には須弥山世界が描かれている。

大仏様は確かに大きいですが、宇宙のスケールは計り知れない。台座に描かれた宇宙に比べれば、この日本もちっぽけなもの。

巨大な宇宙と小さな人間を感じさせるねらいがあるのではないかな。

⑩ 2013年度第2回 ESD ウォーキング（奈良教育大学ユネスコスクール研修会）

- ・ 斑鳩は、7世紀から現在までの様々な文化財が濃密にある地域だ。
- ・ 法隆寺を代表する三体の仏像を取り上げ、宇宙をキーワードにお話する。
- ・ 釈迦三尊像、救世観音像は飛鳥時代前期、伝百済観音像は飛鳥時代後期の作と考えられており、その時間差は640年頃から660年頃とわずか20年ほどだが、その間には何か違ったものを感じさせるものがある。仏像に込められたコンセプト・宇宙観の違いを感じる。

- ・ 7世紀初めに法隆寺が建てられたが、5世紀からの古墳があることから明らかなように、その前の時代にももちろん人が住んでいた。(藤ノ木古墳：6世紀後半、大塚古墳：5世紀)

【藤ノ木古墳】

- ・ 藤ノ木古墳の石棺には2体の男性の人骨が納められていた。587年にあった崇仏・排仏戦争で、穴穂部皇子(あなほべのみこ)と宅部皇子(やかべのみこ)が蘇我氏の軍勢に殺されており、この二人ではないかと考えられている。



藤ノ木古墳

- ・ 斑鳩はもと、穴穂部皇子の領地であり、亡き後はその妹であった穴穂部間人皇女(あなほべのはしひとひめみこ・聖徳太子の母)が領有したものと思われるため、聖徳太子の母領地であるということと大阪への便が良いという両方の理由があって、斑鳩に法隆寺が建てられたのではないかと考えられている。

- ・ 藤ノ木古墳の石棺の奥に馬具一式が納められていた。銅に金メッキをほどこしたものだが、その装飾には、ユーラシア大陸の国際性が感じられる。装飾の一部にあるアジア象は、当時日本にはいなかったことから舶載品を

思わせる。一方、像の上にあしらわれた四弁の花びらは半パルメットであり、パルメットや半パルメットは地中海発祥で5世紀頃に中国に到達したものである。主に仏教関連のものに見られるものだが、馬具に使われている例は、中国にはなく、朝鮮半島でも1~2例しかない。しかし日本では数十例ある。日本では馬がステイタスのシンボルであったということもあわせると、国産品であるということも十分に考えられる。

- ・ 馬具につける飾りである杏葉(きょうよう)にもパルメットがほどこされている。釈迦三尊像の作者が司馬鞍作首止利(しばのくらくりのおびととり)であることから、馬具を作る一団がいたとも考えられ、崇仏・排仏戦争で亡くなった方への鎮魂の意味で作られたものであるかもしれない。

【法隆寺】

- ・ 創建法隆寺(若草伽藍)は五重塔と金堂が南北に配された四天王寺式であったが、670年に焼失した。

現在のものは西院伽藍といい白鳳建築である。

- ・ 東院は643年に焼失した後、奈良時代に再建された。
- ・ 西院伽藍の釈迦三尊像(飛鳥前期)と百済観音像(飛鳥後期)、東院の救世観音像(飛鳥前期)は、いずれも再建後にどこから持って来られたと考えられる。
- ・ 釈迦三尊像は銅造に鍍金されており、その光背に刻まれた文言から621年に聖徳太子の母が亡くなり、聖徳太子とお后も亡くなった後の623年に作ったことがわかる。



法隆寺金堂と五重塔

- ・ 文化遺産を見るときには、作られたときそのままなのかを考えて見るのが大切。
- ・ 光背が法隆寺献納宝物196号類似していることから、それをお手本にしたのかもしれない。
- ・ お手本の製作地について
中国説 成都万仏寺出土 仏七尊像(南朝期)

龍門石窟 仏五尊像（北朝期）

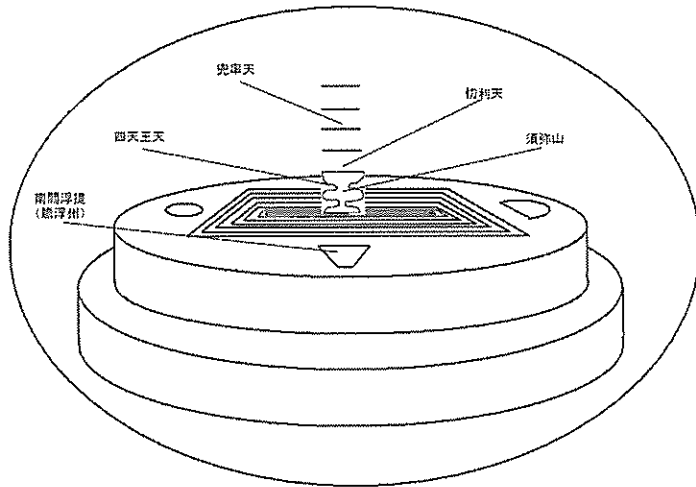
日本は南朝との交流があったため、南朝の影響が考えられるが、100年の開きがある。

韓国説 百済の益山蓮洞画 仏坐像の光背細部「火炎」との類似

長野県観松院菩薩半跏像は火炎から百済の作と推定されるが、これが右脇侍菩薩立像と似ている。また、年代的にも近い。

【須弥山世界：インドの宇宙像】

- ・ 像形は仏教の宇宙像を表現している。



- ・ 南閻浮提（贍浮州）が人の住むところ
- ・ 中腹に四天王の住むところ
- ・ 忉利天は平らになっており、そこでは釈迦が亡くなった母・摩耶夫人に説法を行った。法隆寺釈迦三尊像は、忉利天に位置づく釈迦を表現したもの。
- ・ 大阪の野中寺弥勒菩薩半跏像、法隆寺献納宝物 159 号にも山の文様がある。
- ・ 弥勒は釈迦の弟子で早世した弟子マイトレーヤを原型としており、兜率天に住み、生きとし生けるものを気遣っているとさ

れ、56 億 7 千万年後、人々を救うために南閻浮提に再生すると考えられた。

- ・ 須弥山石 石神遺跡出土（飛鳥資料館）
- ・ 日本人は、7 世紀に仏教の宇宙像を驚きと共に受け入れた。
- ・ 伝百済観音 木造（楠） 随との関連が考えられる。

円通寺旧蔵（堺市博物館）の観音菩薩立像との類似。像高 210.9 cm と見上げる高さである。

釈迦や弥勒が実在の人物をモデルとしているのに対して、観音は万物の救済神であり、創造物。

須弥山世界が魚卵のように横にたくさんつながっており、その西のはてに浄土があり、そこは安樂世界で阿弥陀仏がいるというのがインドの宇宙観。そして阿弥陀仏は、『観無量寿経』に仏身の高さは六十万億那由他恒河沙由旬（那由他：無限、恒河沙：ガンジス川の砂、由旬：約 10 km？）と、想像できない身長が記されている。また、同経には、観音には宝冠に小さな仏がついていとされる。伝百済観音の宝冠の全面中央にも仏が見える。

光背を支える支柱（竹のように彫られているが、かやの木）の根元に 5 cm ほどの山が彫られており、それが須弥山を表現していると考えられる。

さらに同経に、観音菩薩の身長が八十万億那由他由旬とあり、こちらも想像を絶する高さ。

※ 広大な宇宙観への驚き

世界の中心と考えていた須弥山をわずか 5 cm に表している。 ← 見上げる高さ
この宇宙観を表現しているのが、この仏像である。

⑩ 2013 年度第 3 回 ESD ウォーキング（奈良教育大学ユネスコスクール研修会）

「万葉集でめぐる明日香の魅力」 講師：奈良県立万葉文化館 主任研究員 井上さやか氏

- ・ 【あをによし 奈良の都は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり】

この歌は、奈良で歌ったものだと思われているがそうではない。太宰府に派遣された役人が、故郷を出てはじめて知った奈良のよさを歌ったものだ。故郷をはなれたからこそ、そのよさがわかるということが多い。こういった感覚は、1300年前の人も現代の人も同じだと思う。



井上さやか氏の講演

- ・ よく「飛鳥」と「明日香」、どちらが本当なのかと聞かれる。どちらも昔から使われていた。

- ・ 万葉仮名クイズ

【寒過、暖来良思 朝鳥指 滓鹿能山尔 霞軽引】（作者不詳 10 一八四四）

「ふゆすぎて はるきたるらし あさひさす かすがのやまに かすみたなびく」

寒：冬、暖：春とよむ。当時はまだ、漢字が固定化されていない。

朝鳥：カラスは太陽の使い（中国思想）

中国の文字を使って日本の言葉を書き表そうとアクロバチックなことをしていた時代が明日香。

- ・ 滓鹿：かすが 滓という漢字は明らかに良い意味ではない。漢字の持つ意味をあまり重視せずに使っていたものと思われる。

- ・ 土地をほめたたえる枕詞がある。

飛鳥：飛ぶ+鳥 とぶとりのあすか

春日：春+日 はるひの春日

長谷：長い+谷 ながたにの長谷

奈良には、枕詞がそのまま地名になっているところがある。

- ・ 【若草乃 新手枕乎 卷始而 夜哉将間 二八十一不在国】（作者不詳 11 二五四二）

「わかくさの にひたまくらを まきそめて よをやへだてむ にくくあらなくに」

二八十一：2+九九（81）：にくく 当時は九九も中国より伝わっていた。漢字の使い方が自由な時代だった。（他に16：猪（シシ））

- ・ 【…毎見 恋者雖益 色二山上複有山者 一可知美…】（笠朝臣金村之歌中 9 一七八七）

「みるごとに こひはまされど いろにできれば ひとしりぬべみ」

山上複有山：山の上にまた山：出る

中国にも戯書（ぎしょ）というたわむれがあるが、それを取り入れようとしている。中国文化をなんとか取り入れようとしていた時代が明日香。

- ・ 歌垣

【紫は灰指すものそ海石榴市（つばいち）の八十（やそ）の衢（ちまた）に逢える児や誰

たらちねの母が呼ぶ名を申さめど路行く人を誰と知りてか】

古代の男女の恋愛・結婚は現代とはずいぶん違う。まず、戸籍がなかった。一夫多妻が当たり前、別居婚（通い婚）が普通の形態だった。

まず、実績としての通い婚を経て、ある程度してから結婚するのが当時の風習だった。

現代の風習を当たり前のものとせず、海外や過去の日本の風習を知ることによって、複眼的な見方ができるようになる。

歌垣：古代の恋愛の形態。歌で相手を見つける。歌を掛け合うのが本来の意味。

紫：染めるのが難しい色から、「高貴な色」：内面から美しい女性の意味も。椿の灰を指すと、もっと

美しく発色することから、灰（私）を受け入れるともっと美しくなれますよ、の意味。

児：かわいらしいもの、愛しい者、女性に使う言葉。

誰：名前を教えてください：プロポーズ

たらちねの母が：万葉時代は、社会が女性中心から男性中心への過渡期だった。

名前は魂そのものと考えられており、簡単に明かすものではなかった。名前を伝えること、住所を伝えることは、受け入れるということの意味。

・ 宮処としてのアスカ

【采女の袖吹き返す明日香風都を遠みいたづらに吹く】(1 五一)

宮処：天皇の宮があったところ

采女：天皇の身の回りのお世話をする女性（貴族出身・才女・美女）

「明日香から藤原へ、都が遠くなってしまったので風がむだに吹いている」と歌っているが、実は、明日香と藤原は目と鼻の先の距離。前の都をなつかしむだけの歌ではない。明日香から藤原へのこの時代は、中央集権化が強まり、律令制へと移り変わる時代であった。社会の大きな変革を背景に歌われた歌だ。

【大君は神にし坐せば赤駒の匍匐（はらば）ふ田居を都となしつ】(19 四二六〇)

【大君は神にし坐せば水鳥のすだく水沼を都となしつ】(19 四二六一)

考古学者：壬申の乱以前から明日香はあるから、赤駒の～ということはありません

文学者：752年になってからわざわざ記載していることから、史実や現実をとらえたものではない。できそうもないことをした人だからすごいという意味で、天皇を称えた歌だ。

【わが里に大雪降り大原の古りにし里に落ちまくは後】(2 一〇三)

【わが岡のおかみに言ひて落らしめし雪の摧（くだ）けし其処に散りけむ】(2 一〇四)

雪：めでたいもの、大原：現在の小原。万葉文化館の南。すごく近いところ。

「おかみ（竜神）に言って降らせた雪のおこぼれがあなたのところに降ったのですよ」

・ 故郷としてのアスカ

【神岳に登りて山部宿祢赤人の作れる歌一首 併せて短歌】(3 三二四)

神岳（かむをか）：神聖な山、三諸：三輪山

漢籍においては、地をほめたたえる歌がある。その素養を身に付けた山部赤人があってほしい理想の景色をよんだ歌。

【明日香河川淀さらず立つ霧の念ひ過ぐべき恋にあらなくに】(3 三二五)

明日香への思いは、立ち去らない霧と同じだ。

【故郷の明日香はあれどあをによし平城の明日香を見らくし良しも】

故郷：なつかしい、元興寺（法興寺：今の飛鳥寺）：飛鳥寺が明日香の象徴だった。

・ 明日香川の歌枕化

【世中はなにかつねなるあすかどはきのふのふちぞけふはせになる】(古今和歌集)

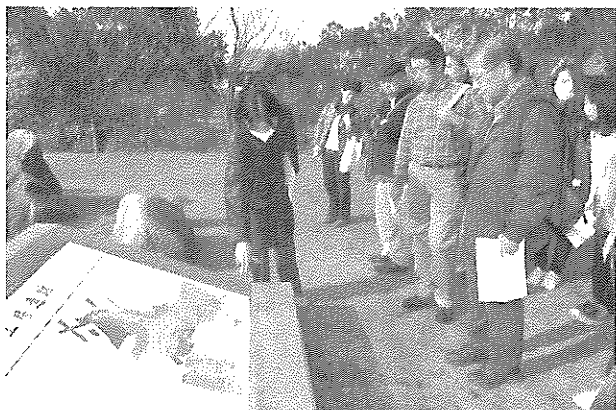
世の中には安定したものなどない

平安時代の歌人：平安時代の歌人は現地に行かずに歌をつくるようになった。言葉遊び化。

・ 例えば「山」という言葉からイメージするものは人によって違う。言葉に込める意味は、実は人それぞれ少しずつ違っている。人は言葉を通じて意思の疎通や外界の把握を行っている。

土地には記憶が重なり、それがその土地の文化になっていく。

文学を通して、土地の文化を知る、過去の時代の文化を知る等、多様な価値観を知ることができる。文学を通して、違う土地の文化を知る、違う時代の文化を知る。人と人のつながりを意識できる。



飛鳥池工房遺跡

富本銭の鑄造が行われていた。富本銭はまじないように使われていた銭ではなく、貨幣経済への導入を意図するものであった。



飛鳥寺

当時は瓦ぶきは寺だけだった。瓦ぶきの寺が立ち並び、塔がそびえるなど、明日香は最先端の国際都市であった。

3. 奈良 ASP ネットワークとしての取組

奈良には約 30 校園のユネスコスクールがある。本部門は、ESD センター校機能を果たすために、奈良のユネスコスクールのネットワークである奈良 ASP ネットワークの事務局を担っている。奈良 ASP ネットワークでは、毎月 1 回の連絡会議において、各校の ESD の取組に関する情報交換、ユネスコスクール間の学校間交流の支援、ESD に関する研修会、ACCU・奈良市教育委員会への協力事業としての韓国教職員やアメリカ教職員との交流事業を行った他、奈良 ASP ネットワークの特色ある取組として奈良 ASP ネットワーク ESD 子どもキャンプを開催している。



学生と現職教員の交流：奈良 ASP ネットワーク連絡会議

2012 年度から始めた ESD 子どもキャンプは、①ESD についてみんなで学び合う、②奈良のよさを見つける活動を通して、地域よさを見直す目を養う、③みんなで仲良く活動し、友情を育てることを目標に、本学のキャンパスにテントを設営して実施している。

参加者数は次の通りである。

2012 年度 106 名

(児童生徒 45 名、学生 25 名、教職員 32 名、奈良ユネスコ協会青年部 2 名、看護師 2 名)

2013 年度 118 名

(児童生徒 57 名、学生 33 名、教職員 27 名、看護師 1 名)

ESD 子どもキャンプの特色は、学生と現職教員との協働による手作りキャンプであるというところである。学校での野外活動を得意とする現職教員のアドバイスを受けながら、学生が主体的に企画し、運営することで、児童生徒との関わり方や指導の仕方など、現場感覚を体験できる機会となっている。さらにプログラムの立案を通して、ESD について学び合う機会にもなっている。キャンプ当日のお手伝いだけでなく、準備段階から関わることを重要視している。



はじめてテントを体験



テントを前に大はしゃぎ



感動的なキャンプファイヤー

奈良 ASP ネットワークでは、現職教員と学生の ESD に関する宿泊研修も実施している。2012 年度は、気仙沼市教育委員会の協力を得て、3.11 東日本大震災被災地の見学、ESD 防災教育研修会に参加することができた。以下に、その報告書を記載する。

2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分に宮城県沖を震源とするマグニチュード 9.0 という巨大地震が発生した。またこの地震によって引き起こされた大津波により、東北地方と関東地方での太平洋沿岸部では壊滅的な被害が発生した。

今回訪問した気仙沼市における東日本大震災・津波による被害状況は、死者数 1,038 人、行方不明者数 259 人、被災住宅棟数 15,698 棟、被災世帯 9,500 世帯という甚大なものであった。しかし、児童生徒の生存率は 99.8%。学校管理下の児童生徒の死者は 0 人という事実が、これまでの気仙沼市の防災教育の成果を如実に表している。奈良県には津波はない。しかし 30 年以内に南海・東南海地震が発生するだろうといわれている他、奈良で育った子どもが将来、海の近くで暮らすこともあり、防災教育の充実喫緊の課題の一つである。そこで、今年度、『学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける』教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化」プロジェクトの一環として、奈良ユネスコスクールネットワーク（奈良 ASP）の県外研修として気仙沼市を訪問すると共に、気仙沼市教育委員会の防災教育研修会

に参加させていただいた。

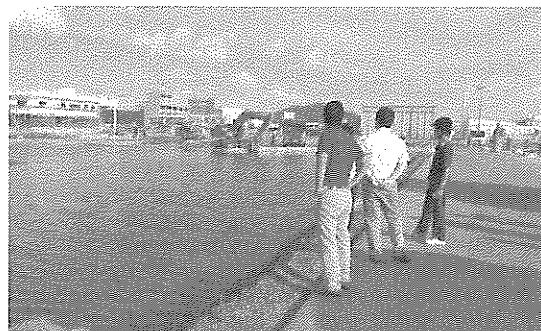
気仙沼市教育委員会副参事の及川幸彦氏の案内で、被災地を見学した。海の近くでは全体的に地盤沈下しており、海水が入り込んでいるところがある。がれきは取り除かれているものの、取り壊し中の建物が見えるだけで、新しく町が建設されている様子はまだない。関西方面では震災に関する報道が少なくなり、それにつれて人々の関心も低くなってきているが、復興にはまだまだ時間がかかるということが感じられた。

鹿折（ししおり）地区は、津波で流された重油タンクに引火して火災が発生し、3日間燃え続けたと聞いた。今も津波で流されてきた大型漁船がブルーの自動車を押しつぶしたまま道路わきに残されている。気仙沼市ではこの船舶を解体するか、被災のモニュメントとして保存するかを住民も参加する形で協議を続けている。

気仙沼市立鹿折小学校を見学させていただき、小野寺校長先生から、震災発生時の状況と学校の対応について話をいただいた。小野寺校長は、昨年まで大谷小学校長をされていた。その日は年次休暇をとっていたが、たまたま学校にやってきたときに地震が発生した。電気系統に被害が出て、放送設備が使えなかったため、教頭先生が学校中を走って、全員運動場に避難するよう指示していた

（一次避難）。当時、1年生は下校していた。2年生から6年生までを集まさせ、避難所に指定されていた丘に向かう（二次避難）。大谷小学校の避難場所の丘は、学校よりも海に近いところにあるため、海に向かって避難した唯一の学校ではないかと、おっしゃっておられた。避難完了してから、下校した1年生のうち4名が、海に近いバス停でバスを待っているのではないかとということに気が付き、教務主任をバス停にむかわせ、4名を避難させた。直後に津波が発生し、大谷小学校を取り囲む形で波が押し寄せ、水位がどんどん高くなった。避難している丘へも水が押し寄せ「自分は、ここで子どもと一緒に死ぬんだ」と観念されたという。津波の状況にあわせて、次へ次へと避難できる場所を避難場所にすべきだとおっしゃっておられた。

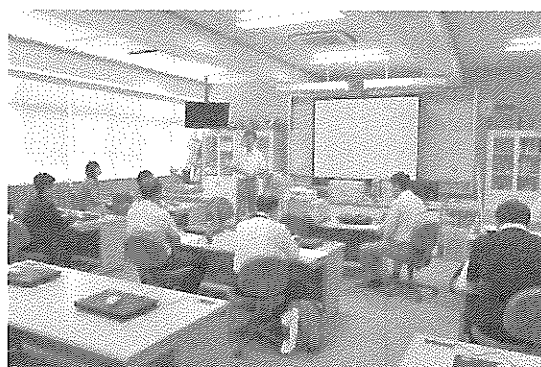
市役所における防災教育研修会では白幡教育長自ら「東日本震災から学ぶ防災教育」と題したご講演をいただいた。その中で特に心に残ったことは「災害時の役割が規定されていなくても、頼られたとき、社会的使命が生まれる」ということである。災害に備えた防災マニュアルの作成は重要である。しかし、今回の大震災で「想定外」という言葉を度々耳にしたように、防災マニュアルは一定の災害を想



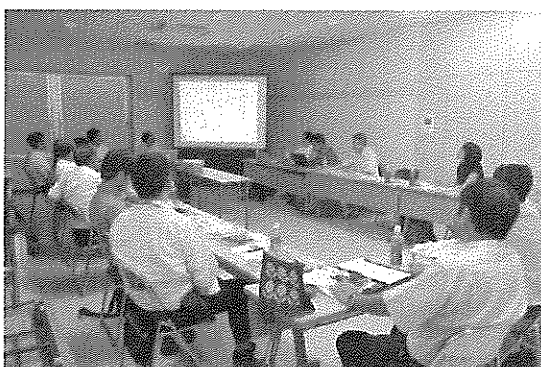
冠水したままの市街地



打ち上げられた大型漁船



大矢校長先生のご講演



防災教育研修会

定しており、実際には場面に応じた判断が求められるということである。当時、中井小学校教頭であった及川副参事は、地震発生後に多くの保護者が学校に訪れたが、一人の子どもも引き渡さなかった。学校が地域で一番高い位置にあるため、低い位置にある家庭に子どもを返すことは危険だと判断されたからである。奈良の学校では引き渡し訓練をしており、子どもを保護者に引き渡すことが避難訓練の目的化しているところがある。命を守るということを中心に、場面に応じた行動がとれるよう、教員も子どもも訓練する必要がある、防災教育の重要性はますます高まっていると感じた。

今回の研修を通じて、防災教育とESDの関わりについて2つ学ぶことができた。一つ目が大谷小中学校の「ハチドリ計画」である。大矢小中学校では以前から学校近くの田を借り、環境に即した「ふゆみずたんぼ」の取組が行われてきた。今回の津波被害でその田もがれきで埋まってしまい、今年は田植えができないとあきらめたが、地域の方々や小中学生、全国からのボランティアによって見事に復活したという報告があった。多くの方が連携協力することで、不可能も可能になるという希望を学ばせていただいた。二つ目が「住み続けられる町づくり」「住み続けたい町づくり」は持続可能な地域社会実現への取組と同じであるということである。気仙沼市では中学校が学校間交流を行いながら、将来の地域づくりの主体である中学生が、持続可能な気仙沼市の実現に向けた取組を始めている。

また2013年度には、東吉野村において森林環境をテーマとした現職教員と学生による合同研修会を実施した。

平成25年9月14日～16日に奈良県東吉野村で行われた奈良ASPネットワークESD体験合同研修会に参加した。台風18号の影響で、2日目からはプログラムを変更しての研修だったが、それまであまり関心が高いとは言えなかった森林環境について親しむよい機会となった。

研修は、現地のふるさと村活性化協議会の全面的な協力によるものであった。林業の現場や加工場を案内していただき、そこで働いておられる人々の熱い思いを聞かせていただくことができた。人々の温かさ、真剣さにふれながら、めったにない研修に参加できたと思う。今回は、現職教員と学生、大学院生、大学教員の合宿研修であった。交流の中で、刺激を受け、多くのことを学ばせていただいた。

今回の研修成果の報告をまとめたと思う。

1日目は10時にふるさと村に着き、すぐにフィールドワークを開始した。ふるさと村活性化協議会の事務局長の上高垣内さん、会長の阪本さんが出迎えてくださり、さっそく和佐羅滝へとむかった。非常に険しい登り道で、足場も悪い。すぐ左を清流が流れているのだが、景色を楽しむ余裕もなく、前を行く学生さんの後ろを追う。到着した和佐羅滝は、見事な滝だった。落差60メートルを一気に水が落ちていく。あたりには冷気がただよい、さっきまでの汗もひいていった。



ご夫婦でされている割り箸工場

和佐羅滝で休憩したのち、植林帯に登りなおし、阪本さんから林業を取り巻く状況についてお話を聞く。林業について知らなかった情報を次々教えていただく。「日本の自動車や機械を海外に売るために、安い外材が輸入される。それが木材価格を引き下げ林業を立ち行かないものにしてしまった。このままでは、後を継いで林業をやろうという若者がいなくなる。林業が廃れると山が荒れ、自然災害も発生しやすくなる。日本の国土の70パーセントほどが山林だ。日本は国土の70パーセントを捨てているようなものだ」阪本さんはたくさんのお話を伝えてくれて仕方がないようすであったが、このあとのプログ

ラムもあるので途中で山を下りていった。和佐羅集落だ。ここも以前はたくさんの人が住んでいたらしいが、今は空き家が目立つ。人の気配を感じなかった。

自動車で製材所に向かう。山から切り出されてきた木材が、まっすぐな板になっていく様子を見学した。ここには近隣の山から切り出された木材が集められ、様々な用途に切り分けられ、乾燥後に出荷される。このとき発生する端材を利用して作るのが割り箸である。次に訪れた割り箸工場では、割り箸の製造過程を丁寧に見せていただいた。木材の場合は、杉材よりも檜材の方が高価であるが、割り箸では杉の方が香りもよく高級になるそうだ。不思議な気がする。そして、使い道のない

木材は、チップとして紙の原料になる。チップ工場では、木を砕くものすごい騒音の中で働いておられた。チップにも2種類あり、色も白く形も整ったチップはトイレットペーパーなどの原料になり、樹皮などの混ざったやや黒いチップは段ボールの原料にされるらしい。続いて訪問したのが、高級木材工房だった。ここでは吉野材だけではなく、海外からも高級木材を輸入し、テーブルセットなどを製作されている。大変高価で手の届くものではなかったが、木々のぬくもりは確かにいいものだと感じた。

最後は阪本さんの銘木店の倉庫を訪れる。そこには数百本の床柱が林立していた。「よい時には1本70万円ほどで取引されていたのが、今は4万円ほどにしかない。それでも売れたらいい方だ」と、残念そうに語っておられた。

1日目のフィールドワークは、山の立木を見るところから始まり、製材所へ、そこから用途に分けられた利用される工場をすべて見て回るなど、よく考えられたコースであった。また、どの工場の方々も親切で、人のつながりがあってこそそのフィールドワークであると感じた。教材開発の仕方のお手本を見ているようで、教員を目指す学生には、大変勉強になったことだと思う。

2日目は山仕事体験のはずであったが、台風接近による大雨のため、山守の東平さんから道具を見せてもらったの講演となる。これまで森林環境について授業することもあったが、実際は「教科書を」教えていたと反省する。山の道具はそれぞれ一人で使えるように工夫されている。特に木の切り出しの時に使うくさびのような道具は、一度打ち込んだら絶対に抜けない（抜けると危険）仕組みだそうだが、なぜそうなるのか、東平さんも分からないと言う。昔の人は木を知り尽くしていたのだろう。その知恵に驚かされる。今回はできなかったが、次の機会があれば枝打ちや間伐なども是非体験したいと思う。

林業を巡る状況

夜には4名の林業家の方々や東吉野村で小水力発電に取り組んでおられる方と、宿舎のテーブルを囲んで座談会を行った。お話によると、農業は第二次世界大戦後に農地解放が行われ、多くの自作農が誕生したが、林業ではそれが行われず、未だに不在地主や一部の人が山を持っているという状況らしい。そういう人たちは経済的余裕があり、自分で山を見に来ることがない。だから、力はあっても政府に働きかけるといことがない。だから、山の状況は改善されないのだと嘆いておられた。山には保水や洪水調整、保温、保湿、空気清浄、木材産出、動物のすみかといった様々な役割がある。これが放置されると大変なことになる。教育を通して林業の現状を伝えていく必要性を強く感じた。



林業家との座談会

今回の研修会は、フィールドワークの楽しさや醍醐味を実感できるものであった。いつもとは違う環境に身を置き、学生や院生、大学教員の方々と話し合えたのがよかった。教育現場に立つ前に、このよ

うな学びに参加できる学生や院生がうらやましくも思える。現場の教員にとっても、教材研究、教材開発に生かすことのできる有意義な研修となった。ただ、残念なことに、現職教員の参加は、私一人であった。多くの現職教員が参加することで、よりダイナミックな学びの取り組みができるのではないだろうか。

4. 地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

(1) 十津川道普請E S D体験ボランティア

① 平成23年9月の台風12号による被害について

台風12号の接近にともない、紀伊半島の広い範囲で河川の氾濫や洪水、土石流、土砂崩れなどの被害が発生した。奈良県五條市大塔町においても大規模な土砂災害が発生し、本学の奥吉野実習林も被害を受け、現在も研究施設の利用ができない状態である。

十津川村においては、死者6名、行方不明者6名、負傷者3名という人的被害の他、家屋への被害、長殿、栗平の2か所における土砂ダムの形成など大きな被害を受け、現在も仮設住宅での生活を余儀なくされている方もおられる。また、十津川村には後述する紀伊山地の霊場と参詣道という世界遺産に登録されている2本の道があるが、この道においても土砂災害や倒木被害が発生するなど、通行不能になっているところがある。これらの道は世界遺産に登録される以前に、十津川村民にとって生活道路である。村民は代々これらの道の保全や修復に取り組んできたが、今回の被害の大きさと村民の高齢化に伴い、道普請ボランティアを募集することとなった。

② 紀伊山地の霊場と参詣道について

日本には現在16件の世界遺産が登録されており、そのうちの3件が奈良県にある。法隆寺地域の仏教建造物(1993年登録)、古都奈良の文化財(1998年登録)、紀伊山地の霊場と参詣道(2004年登録)であり、いずれも文化遺産として登録されている。

紀伊山地の霊場と参詣道は三重県、奈良県、和歌山県にまたがる紀伊山地にある吉野・大峯、熊野三山、高野山という3つの霊場とそれらの霊場をつなぐ参詣道(熊野参詣道、大峯奥駆道、高野山町石道)から構成されている。奈良県内の具体的物件として、吉野山、吉野水分神社、金峯神社、金峯山寺、吉水神社、大峯山寺等が登録されている。また県内にある参詣道としては、吉野・大峯と熊野三山を結ぶ修験者の修行の道である大峯奥駆道と熊野参詣道のうち高野山と熊野三山を結ぶ小辺路(こへち)がある。

③ 十津川道普請E S D体験ボランティアの概要

第1回 日時 : 平成24年1月21日~22日(奈良県南部振興課との共催)

参加者 : 学部生6名、大学院生1名、教職員3名 計10名

活動場所と内容

1日目: 玉置神社近辺の大峯奥駆道の修復

2日目: 玉置神社近辺の大峯奥駆道の修復と間伐材運搬の森林ボランティア

第2回 日時 : 平成24年2月23日~24日

参加者 : 学部生2名、大学院生3名、教職員1名 計6名

活動場所と内容

1日目: 十津川村歴史民俗資料館で十津川村の概要や世界遺産を学ぶ

十津川村観光振興課地域雇用創造協議会の方から、現状や「道普請」について学ぶ

2日目: 熊野参詣道の小辺路(神納川から三浦峠)の修復

第3回 日時 : 平成24年5月26日～27日

参加者 : 学部生5名、大学院生4名、教職員1名 計10名

活動場所と内容

1日目: 笠捨山の道の修復

2日目: 竹筒集落近辺の道(玉置神社参詣道)の修復

第4回 日時 : 平成24年11月24日～25日(ろうきんとの共催)

④ ボランティアの実際

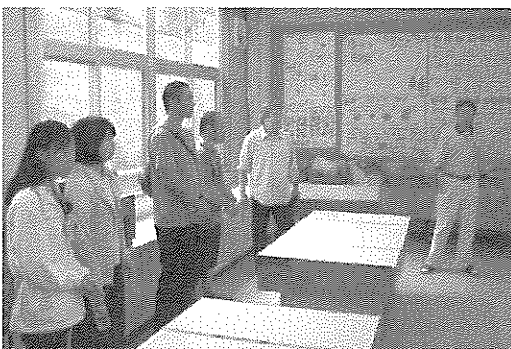
【シンポジウムの開催】

第4回の道普請では、経験者を中心にボランティアサポートセンター学生スタッフとユネスコクラブで学生実行委員会を立ち上げ、企画から携わった。今回はろうきんとの共催であり、学生・一般の参加者を募集するため、10月26日に事前シンポジウム「十津川村でボランティア」を開催した。

【勉強会の実施】



第2回の道普請では、宿泊地である旧五百瀬小学校神納川HBPにおいて、地元の方に過疎化や学校の統廃合、村での暮らしといった十津川村の現状について交流する。旧五百瀬小学校校舎には、最後の在籍児童たちのメッセージが黒板に残されていた。また図書室には児童の絵画作品も掲示されており、地元の方々にとって、小学校がなくなる意味の大きさについて実感させられた。



【十津川村立十津川第一小学校訪問】

第3回の道普請では、ユネスコクラブの先輩が勤務する十津川第一小学校を訪問させていただいた。本小学校では、昨年の台風による河川の氾濫で1名の児童が亡くなっている。台風時のことや卒業式などでの対応、また避難所運営等について、教頭先生から指導していただき、あらためて教員という仕事の重さについて考えさせられる。

【道の修復と森林ボランティア】

道の修復といっても、重機を使うようなものではない。台風によって道に覆いかぶさっている土砂や枝、倒木などをトンガやジョレン、竹ボウキといった道具を使い、全くの手作業で整備していく。ただ、作業現場までの道のりが遠く、急斜面を登り続けたり、道なき道を行ったりという苦しさがある。その分、整備された道を見ると充実感を得る事ができる。



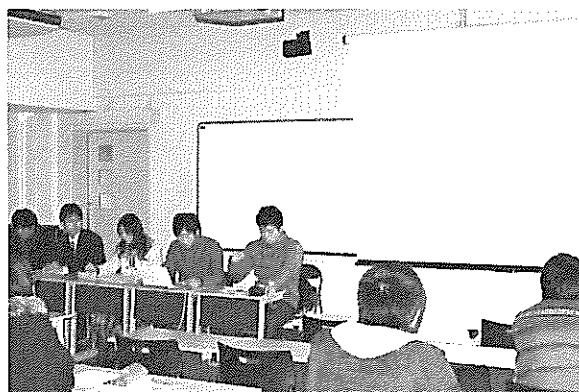
【森林ボランティア】

第1回の道普請の2日目には、十津川村主催の道普請に参加されていた方々とともに、間伐材の運びだしなどの森林ボランティアも体験する事ができた。健全な育林に間伐は欠かせない。ところが林業家の高齢化等により、間伐してもそれを林道まで運び出せない現状がある。チェーンソーを使った伐採は林業家にまかせ、間伐材の運び出しボランティアに汗を流した。



【報告会の開催】

ボランティア体験を学びにつなげる目的で、体験レポートの作成を行っている。また他者への伝達を目的とした報告会を開催し、活動を紹介すると共に意見を交流することで、ボランティア活動の意義を考え合う機会としている。東日本大震災津波の被災地でボランティア活動をした学生からの意見など、学べることが多い。



⑤ 考察

第一次産業が主流であった時代、自然を相手にする産業では、季節ごとに仕事が決まっていたり、緩急があったりと時間は不規則な円運動として捉えられていた。また職人の世界では労働時間に関わらず、仕事の出来栄によって賃金が決められていた。そこでは時間は自然との関係性や労働との関係性の中に存在していた。ところが現代の私たちは、時間とは常に一定の速さで流れている（時間の矢）客観的な存在であるという概念を持っている。我々はこの客観的な時間の存在を前提に労働に従事し、時間当たりの労賃によって生活していると同時に、時間に即して生産された商品を購入している。つまり現代の市場経済は時間と共に存在しており、我々の存在もそのシステムの中に位置付けられている。

現代社会において、自然との関係性の中にあつた時間が「合理的でないもの」「効率の悪いもの」として退けられてしまったことが、自然の一部である人間の生きにくさや、自然を無視した経済活動による環境破壊の一因であろう。報酬を求めないボランティアは「時間×労賃+利潤=商品価値」という市場経済の定式を乗り越え、人間・自然と時間の関係性の再構築を手がかりに持続可能な社会のあり方やそこでの人の生き方を考察する糸口になるのではないだろうか。

十津川村では村民の手で、数百年にわたって道普請が行われてきており、その一部が世界遺産に登録されている。これまでも台風被害は何度もあり、失われて当たり前な道が現在も存在しているのは、村民の利他的行動の蓄積であろう。今回の道普請はその長い利他の歴史を受け継ぐことでもある。自分のことより人のこと、まわりの生物のことを考えて行動することが、持続可能な社会の構築に決定的に必要であり、道普請はそれを体験的に学ぶ機会として重要である。

（2）陸前高田市文化遺産調査団

事前調査 平成24年6月22日～25日

教員3名による現地情報の収集・受け入れ態勢の調整

本調査 平成 24 年 9 月 6 日～ 9 日 8 名の調査団による現地調査
平成 25 年 8 月 26 日～29 日 同上

① 調査団について

E S D 実施計画に「私たち一人ひとりが、世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、行動を変革することが必要であり、そのための教育が E S D です。」と記載されているように、E S D では主体性を重要視している。一人一人の価値観や行動の変革を通して持続可能な社会の実現をめざしており、いわゆる下からの社会改革であろう。

本調査団においても、参加者一人一人が自己の良いところを出し合い、双方向に影響を与え合うことで、互いに高まり合う「テトラモデル」による学習活動を意識した。仏教美術、E S D、社会科教育、防災教育など、参加学生の研究分野は様々であり、事前学習会においてもそれぞれが自己の関心から調査した内容を持ち寄り、相互に刺激を与えあいながら協力体制を形成することを目的とした。

② 調査の内容

i) 常膳寺での仏像調査

常膳寺は気仙三十三観音霊場の二十七番札所になっており、中心的な建物である観音堂には、気仙三観音のひとつである像高 324.5cm の木造の十一面観音菩薩立像が安置されている。主な建造物としては、本堂、観音堂、阿弥陀堂、牛頭明王堂がある。本尊である不動明王立像の他に、上述した十一面観世音菩薩立像、千手観世音菩薩立像、毘沙門天立像、阿弥陀如来坐像、薬師如来立像が安置されている。

胎内に文書があるとの言い伝えのある十一面観音菩薩立像、及び千手観音菩薩立像にファイバースコープを挿入して、胎内の様子を調査しようとしたが、ファイバースコープがなかなか挿入できず、残念ながら文書を発見することはできなかった。今後、エックス線などによる調査が実施されることで、明らかになることがあると思われる。

一方、薬師如来立像には像の前面に直径 2 センチメートルほどの穴が開いており、そこからファイバースコープを差し込んだところ、背板内面と体部前面に墨書が見つかり、像の製作年と大願主、及び仏師が記されていた。①製作年：天保十三年（1842 年）8 月、②大願主：小友村肝煎及川庄兵衛、③仏師：邑上牛彦。

この製作年と大願主の名前に注目し、事前学習会で講読した陸前高田市史に記載されている「中吉丸漂流記」との関連が予想されたことから、聞き取り等の追加調査を行った。

ii) 中吉丸の漂流事件

天保十年（1839 年）11 月 15 日（太陽暦では 12 月 21 日）に、気仙郡小友村の商い船である中吉丸は、魚 201 俵、鰹節 354 箱、昆布 248 俵を積み込み、常州那珂湊（現ひたちなか市）に向けて出航した。船主は小友村の肝煎であった及川庄兵衛である。乗組員は船頭三之丞（55 歳）、舵取勇治（45 歳）、水主和吉（35 歳）、同三蔵（35 歳）、同徳松（35 歳）、同清吉（35 歳）の 6 名であった。



十一面観音菩薩立像の調査



薬師如来立像胎内の墨書

出帆から10日程たった頃、鹿島沖で大時化にあい、帆柱を切り倒し、積み荷を海中に投げ捨てることで転覆はまぬがれたが、太平洋に吹き流され方向を見失い、洋上を漂うこととなった。35日間の漂流の末、かろうじて見知らぬ島にたどりつき、九死に一生を得た。この中吉丸の漂着先が小笠原の父島であった。当時の小笠原には日本人は住んでおらず、捕鯨船への物資補給を商いとしていた外国人が住んでいた。それらの島民に助けられ、二か月ほど過ごした後、船を修理した中吉丸は出帆し、3月24日に無事に銚子湊に着船した。小友浦を出港してから実に四か月半ぶりに、全員無事に帰国したのである。

しかしその後の役人の取り調べにおいて、外国人と接したことが問題視され、密航貿易の疑いで及川庄兵衛も江戸に呼び出されて九か月もの間取り調べを受け、島から持参した品物を没収した上で、全員が無事に帰村できた（天保十三年2月）。

薬師如来立像を手がかりに奇跡的な史実をたどることで、わくわくするような学ぶ喜びを味わうことができる。また子孫へのインタビューや今も続く小笠原村との交流についての学びから、地域の歴史や生きた人々への関心を高めることができる。さらに、人と人のつながりの大切さに気付き、異文化交流への興味を高めることで、子どもの目や心を世界に向けることもできると考え、教材開発を行った。

iii) 高田松原について



枯死する前の奇跡の一本松

陸前高田市の名勝、「高田松原」は市民からも大変愛される陸前高田市のシンボルであった。約7万本もの松が海沿いに2キロメートルにわたって続いており、高田市民はもちろん、観光客にも海水浴や、憩いの場として親しまれていた。しかし、高田松原が自然に形成されたものではなく、多くの人が植え、守ってきたものであるという事実はほとんど知られていない。高田松原は1666年に仙台藩主であった伊達綱宗が気仙郡高田村の豪商、菅野杵之助（かんのもくのすけ）に立神浜（当時の高田松原）の田畑に被害を及ぼす塩害や、強風を防ぐため、気仙郡高田村に、長さ440メートル幅220メートルに渡る松の植栽を命じたのが始まりである。翌年から、杵之助はのべ200人を動員して約6200本の松を植えた。しかし活着したのは半分程度であった。その後1673年までの7年間に、のべ672人を動員して、さらに18000本の松を植えたが、志半ばに倒れ、その子七左衛門が父の遺志を継いで完成させた。その50年後の1724年、旧仙台領の主要金山の一つであった玉山金山を治める

松坂新右衛門が、仙台藩から新たに御山林方御横目を仰せつかり、気仙川流域の新田を塩害、風害、洪水から防ぐために今泉村（陸前高田市気仙町）に松の植林を行った。

杵之助が植林した松原は「高田松原」、新右衛門が植林した松原は「今泉松原」と呼ばれていたが、1955年の町村合併によって陸前高田市となって以来、その2つを合わせて高田松原と呼ばれるようになった。アカマツ、クロマツ約7万本が2キロメートルに渡って、海岸沿いに続いていた。しかし、この高田松原はこれまで何事もなく伝えられてきたのではない。1896年の三陸大津波、1933年の三陸大津波、1960年のチリ地震津波では海水



高田松原を守る会で育てている松の苗木

や土砂を被り、大きな被害が出たが、その都度地元の人たちが補植し、景観が保たれてきた。しかし、2011年3月11日の東日本大震災津波によって高田松原は1本を残して崩壊した。その1本も今は枯死してしまった。

陸前高田市には高田松原を守る会がある。今回の調査を依頼された3人の方もその会員である。現在、陸前高田市は津波によって高田松原を流されただけでなく、塩害によって、海岸沿いには松が育つことができない状況になってしまった。そのような中、高田松原を守る会の方々は、震災前に松原の松ぼっくりを使って作られていたクリスマスリースから種を採取し、苗木を育てておられる。こういった高田松原再生のための取り組みをされている方々にインタビューし、高田松原や街の復興に対する思いを開き取ることで、自分も何かしようという能動性が生まれ、学習者の行動の変革をもたらすものと考え、教材開発をおこなった。

③ 成果と課題

調査結果をもとに事後学習会を繰り返し、報告書を作成すると共に、小中学生対象の教材と教員対象の地域教材を通したESDの指導事例を作成し、陸前高田市教育委員会を通じて地域の小中学校に配布していただいた。活用されることを期待している。

25年度は前年度の調査結果の報告会を小友町コミュニティセンターで開催し、50名ほどの参加があった。調査に参加した学生のレポートに「それ

まで本当に地域の人たちにとって文化財を調査することは励みになるのだろうかとか、もっと効率の良い地域のためになるなにかがあるのではないかと若干不安を感じていたのだが、杞憂だったようである。被災地で一般にイメージされるボランティアや復興活動とは違う文化財調査という形でも、地域の方々に貢献することができるのだということを知ることができた。」とあるように、調査の意義を感じることができた。

調査団全員が被災状況を前に言葉を失くしたが、それを乗り越えて生きていこうとされている姿に接することで、元気をいただいた。調査を通して人と人のつながりの大切さ、事実を知ろうとすることの大切さを教えていただくなど、互恵性のある取組であったと感動している。



小中学生対象に作成した教材（24年度）

【ESD学会の設立について】

現行の学習指導要領にESDの理念が反映されたことから、今後すべての学校教育においてESDの取組が推進されていくと思われる。現在は、先進的な教員による教材開発が行われている段階であるが、今後は、研究者と実践者の共同研究による理論に基づいた実践が求められていく。

奈良では文化遺産を通したESDの理論研究については本学が担い、実践研究については、奈良市教育委員会や奈良のユネスコスクール等において盛んに行われているというように、協力体制が構築されている。今後はこの組織を全国規模に整備し、ESD全般にわたる研究者と実践者を結ぶ組織が必要になってくると考え、その母体として、奈良教育大学ESD学会を設立した。



文化多様性教育研究部門

センター長・教授 頓 宮 勝

准教授 和泉元 千春

1. 文化多様性教育研究部門の目的

センター発足時までの留学生受入・派遣実績を基盤に、その軸をアジアに据えることで、文化多様性教育の理論的・実践的研究と教育を次の諸点から進める。

- ① 留学生教育を背景とした持続発展教育を推進する。
- ② 提携大学との交流を基盤としつつ、アジアに視点を置いた教育・研究に関わるプロジェクトの企画・コーディネートを行う。

2. 業務内容

- ① 受入留学生の資質に合ったプログラムの維持と改善
- ② 派遣留学制度の広報及び派遣留学生の事前事後指導に関わる企画
- ③ 学術交流に関わるプロジェクトの企画、調整、運営への参画
- ④ 文化多様性及び日本語・日本文化に関する講演の企画・運営
- ⑤ 国際的視野に立った教員の養成に資するプログラムの検討

(⑤は 2013 年度に改正された「国立大学法人奈良教育大学国際交流に関する基本方針」の改定を受けたものである)

3. 協定校リストと紹介

本学が研究者及び(又は)学生交流に関する協定を結んでいるのは次の 7 カ国 11 大学である。

()内の学は学生交流、研は研究者交流の協定を締結していることを示す)

①ロック・ヘイブン大学 (学・研)

アメリカペンシルベニア州にあり、本学が 1986 年に海外の大学として最初に協定を締結した大学で、毎年 1～2 名を受入・派遣している。

②ハイデルベルク大学 (学・研)

ドイツの歴史ある名門大学の一つで、派遣の歴史は 30 年以上あり、相互互惠による派遣・受入が始まったのは 1993 年からで、以来毎年 2 名を限度に交流を重ねている。

③セントラル・ミシガン大学 (学)

アメリカミシガン州にあり、派遣の歴史は 30 年以上あり、1996 年に協定を結んでからは毎年 2 名を限度に交流を重ねている。

④嶺南大学 (学・研)

1999 年の協定締結以来、受入は毎年 1～2 名、派遣は断続的に 1 名の学生交流を続けている。また、日本の協定校大学学生向きに当該大学が 8 月末から 9 月にかけて開催する「短期韓国語・韓国文化研修講座(渡航費のみ日本側負担)」に、毎年 1 名を派遣している。

⑤ブカレスト大学(学)

1999 年に 2 名を限度とする学生交流の協定が結ばれた。当初の 2 年間を除き、以後は受入が主となっていたが、昨年再び 2 名を派遣した。

⑥リヨン第三大学(学・研)

2004年に協定を締結し、以後毎年1～2名の受入・派遣を続けている。

⑦インドネシア教育大学(研)

2005年に一般協定を締結し、それに基づく大学推薦の日本語・日本文化研修生を受け入れている。現在、学生交流に関する協定を結ぶ方向で当該大学と協議に入っている。

⑧西安外国語大学(学・研)

2005年に協定を締結して以来、1～2名の学生を受け入れているが、本学からの派遣がない状態が続いている。

⑨公州大(学・研)

2009年に協定を締結した韓国の大学であるが、過去一度受入について打診があったものの当該年度の事情で実現せず、また派遣もまだない状態である。

⑩華東師範大学(学・研)

2009年に協定を締結し、受入は2012年に始まったが、派遣に関してはまだ実績がない。

⑪光州教育大(学・研)

2010年に一般協定を締結した韓国の大学であるが、具体的な学生交流に関してはこれからの課題となっている。

表1. 協定校からの受入学生数

| 国名 | 大学名 | H22 | H23 | H24 | H25 | 合計 |
|--------|-------------|-----|-----|-----|-----|----|
| アメリカ | セントラルミシガン大学 | 1 | | 1 | 3 | 5 |
| | ロックハイブン大学 | 1 | 1 | 2 | 2 | 6 |
| ドイツ | ハイデルベルク大学 | 3 | 2 | 2 | 2 | 9 |
| フランス | リヨン第三大学 | 2 | 2 | 2 | 2 | 8 |
| ルーマニア | ブカレスト大学 | 4 | 2 | 2 | 2 | 10 |
| インドネシア | インドネシア教育大学 | 1 | | 1 | 1 | 3 |
| 中国 | 西安外国語大学 | | | 1 | 2 | 3 |
| | 華東師範大学 | | | 1 | 2 | 3 |
| 韓国 | 嶺南大学校 | 1 | 1 | 2 | 2 | 6 |
| 合計 | | 13 | 8 | 14 | 18 | 53 |

表2. 協定校への派遣学生数

| 国名 | 大学名 | H22 | H23 | H24 | H25 | 合計 |
|-------|-------------|-----|-----|-----|-----|----|
| アメリカ | セントラルミシガン大学 | 2 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| | ロックハイブン大学 | 2 | 3 | 2 | 1 | 8 |
| ドイツ | ハイデルベルク大学 | 3 | 4 | 2 | | 9 |
| フランス | リヨン第三大学 | 2 | 1 | 1 | | 4 |
| ルーマニア | ブカレスト大学 | | | 2 | | 0 |
| 韓国 | 嶺南大学校 | | | | | 0 |
| 合計 | | 9 | 9 | 8 | 2 | 28 |

3. 受入留学生プログラム

3-1 各プログラムの概要

2011～2013 年度に実施した受入学生数プログラムは以下のとおりである。

| |
|--|
| 正規課程 |
| 教育学部 |
| 大学院教育学研究科 |
| 文部科学省国費外国人留学生用プログラム |
| 教員研修留学生プログラム（1年間：4月開始） |
| ※ただし本学での研修前に大阪大学にて半年の日本語集中研修を修了。 |
| 日本語・日本文化研修留学生プログラム（約1年間：10月開始） |
| 交換留学生用プログラム |
| 協定校交換留学生プログラム（約1年間：10月開始） |
| 協定校交換留学生プログラム<米国協定校>（半期：9～12月、二期：9～7月） |

プログラム内容は以下の通り。授業シラバスは以下の URL を参照されたい。

<http://syllabus.nara-edu.ac.jp/fmi/xsl/g-jikanwari/findrecords.xml?-view>

(1) 学部学生向け

(1-1) 学部学生、日本語日本文化研修留学生、協定校交換留学生向け

●日本文化科目

<前期>

| 科目名 | 内容 | 担当教員 |
|-------|--|------|
| 比較文化論 | 文化の根底にあるものを抽出した上で、その比較の意義を考える。 <内容>自然環境の中に置かれた人類が、生死の問題に関して意識的に関わることによって見いだした思想の表現が文化であり、それをはぐくむ器としての制度や組織が文明であることに触れ、文化を比較する上での基盤を示す。時間的余裕があれば、文化という語に潜む暗部についても考察を広げていく。 | 頓宮 勝 |
| 国際文化論 | 「国際」という語の意義を問い直した上で、文化を比較する際の基盤を示す。 <内容>文化という語の背景あるいは基盤に、その文化圏を形成してきた社会に共有されている世界観ないし思考法があり、科学と宗教という一見相反するものが照応していることを示し、文化相互疎通の可能性を考える。 | 頓宮 勝 |

| 科目名 | 内容 | 担当教員 |
|-----------------|--|-------|
| 比較言語文化論 I | ことばの言語的側面ではなく文化的側面に焦点を当て、発想法の観点から文法を考える。春学期は英語の視点から記述されたテキストを参考に使う。 ＜内容＞日本の近代化を支点にして、日本人の発想法において表面的に変化を受けたものと変化を受けなかった基盤にあるものを見だし、言語を文化の側面から比較する。 | 頓宮 勝 |
| 日本語文献講読 (文化) | 留学生が専門分野について研究する場合に必要な文献を読むための基本的な情報を提供する。 ＜内容＞日本文化に関する論文や研究書を使い専門用語や記述法などについて解説する。 | 頓宮 勝 |
| 現代日本論 | 大学生活を送る「奈良」に関するプロジェクトワークを通じて、日本語運用力を伸ばし、より深い「文化」理解を目指す。 | 和泉元千春 |

<後期>

| 科目名 | 内容 | 担当教員 |
|------------|--|------|
| 比較言語文化論 II | ことばの言語的側面ではなく文化的側面に焦点を当て、発想法の観点から文法を考える。秋学期は日本語の視点から記述されたテキストを参考に使う。 ＜内容＞現代日本語に至るまでの過程を、漢字の導入期と日本の近代化を支点にして捉え、日本人の発想法を他言語環境における発想法と比較しながら言語の文化的側面を考察する。 | 頓宮 勝 |
| 日本文化史 | 個別的に日本文化について説明するのではなく、日本文化といわれるものの形成に当たってその基盤をなしたと見られるものを列島文化と名付け、その本質を論じて新しい日本文化観を提示する。 | 頓宮 勝 |
| 日本人の宗教観 | 文化の基盤となっているにもかかわらず、その関係についてはあまり触れられてこなかった「宗教」を、列島で生まれた生死の解釈として論じる。 | 頓宮 勝 |

2012年度、2013年度開講の「現代日本論」に関しては、特色ある取り組みとして3-2に詳細を示す。

●日本語科目

日本語科目は 2012 年後期より能力別クラスに再編成した以下の科目を開講している。

<前期>

| 科目名 | 内容 | 担当教員 |
|----------------|-------------------|--|
| 「日本語Ⅰ」 | (上級)アカデミック聴解・書く技術 | 和泉元 千春 |
| 「日本語Ⅱ」 | (上級)アカデミック読解・要約技術 | 湯通堂 誠 |
| 「日本語演習（読解）」 | (中上級)文学読解 | (2011-2012 年度) 堤 智子 (2013 年度) 櫻井 千穂 |
| 「日本語演習（作文）」 | (中上級)レポート執筆技術 | (2011-2012 年度) 堤 智子 (2013 年度) 櫻井 千穂 |
| 「日本語コミュニケーション」 | 口頭表現能力の養成 | 和泉元 千春 |

<後期>

| 科目名 | 内容 | 担当教員 |
|-------------|-------------------|---------------------|
| 「日本語Ⅰ」 | (上級)アカデミック聴解・書く技術 | 和泉元 千春 |
| 「日本語Ⅱ」 | (上級)アカデミック読解・要約技術 | 湯通堂 誠 |
| 「日本語演習（読解）」 | (中上級)アカデミック読解 | (2011 年度) 堤 智子 |
| 「日本語演習（作文）」 | (中上級)レポート執筆技術 | (2012-2013 年度) 櫻井千穂 |
| 「日本語文献講読」 | 4 技能の統合学習 | 和泉元 千春 |

2013 年度開講の「日本語コミュニケーション」に関しては、特色ある取り組みとして 3-2 に詳細を示す。

●その他

<前期>

| 科目名 | 内容 | 担当教員 |
|--------|--|--------|
| 日本語教育論 | 初級レベルの日本語を教える基礎となる、日本語を分析する能力、授業を組み立てる能力を育成する。 | 和泉元 千春 |
| 行書法 | — | 福光 左今 |

<後期>

| 科目名 | 内容 | 担当教員 |
|----------|---|--------|
| 日本語教授法特講 | 自身の外国語学習の経験を振り返りながら、日本語を教えるための基礎的な知識を得、授業デザインをイメージする。 | 和泉元 千春 |
| 書写特殊講義 | — | 福光 左今 |

2013年度開講「日本語教育論」に関しては特色ある取り組みとして3-2に詳細を示す。

(1-2) 米協定校向け

米国ロックヘイブン大学、セントラルミシガン大学の留学生受け入れにあたっては、協定書に基づき、半期受け入れの場合は9月～12月、1年受け入れの場合は9月～7月のプログラムを実施している。

<秋学期>

| 科目名 | 内容 | 担当教員 |
|---------------------------|--|------------------|
| 基礎日本語 A | (入門～初級)総合日本語 | (2011年度)片岡パトリンシア |
| 基礎日本語 B | (入門～初級)総合日本語 | 湯通堂 誠 |
| | 『GENKI 1』(The Japan Times)を使用 | (2012年度)櫻井 千穂 |
| | | 湯通堂 誠 |
| | | (2013年度)吉兼 奈津子 |
| | | 湯通堂 誠 |
| A View of Modern Japanese | To learn Japanese society and language through experiences by utilizing various resources outside the classroom. | 和泉元 千春 |

※上記科目以外に、米協定校留学生向け日本語補講(通年週2コマ、担当教員:山本修)を開講し、日本語未習で来日する留学生の日本語学習支援を行っている。

本プログラムでは、半期終了時（12月）に英語での派遣元大学紹介、2期終了時に日本語での「私の日本体験」をテーマにした全学公開の発表会を実施している。

なお、日本語科目が開講されていないロックヘイブン大学と、本国での日本語学習歴1年以上が受け入れ条件となっているセントラルミシガン大学に関しては、2013年度両大学から複数人（2-3名）ずつを受け入れることとなり、同一クラスでの日本語学習がこれまで以上に困難となったため、本学の他の留学生プログラムの日本語授業の利用及び専任教員の補講によって何とか協定書記載の学習時間数を確保した。今後、両大学から一定数の学生を同時期に受け入れる場合は、新規科目開設を含む本プログラムの日本語授業の再編成が必要である。



交換留学生による大学紹介
(2013年12月18日)

(2) 大学院生向け

大学院生及び学部研究生を対象として、以下の補講を開講している。

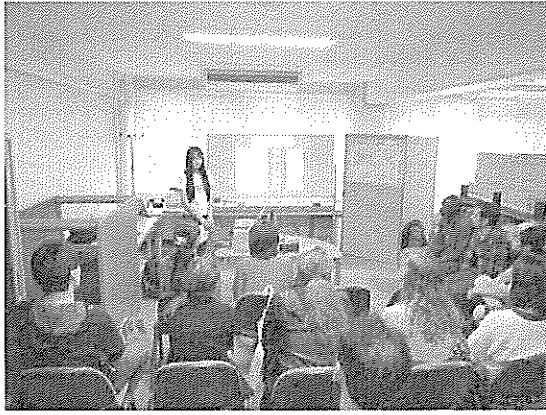
| 科目名 | 担当教員 |
|---------------|-------|
| 日本語補講Ⅰ（総合日本語） | 駒井 裕子 |
| 日本語補講Ⅱ（作文基礎） | 駒井 裕子 |

(3) 教員研修留学生プログラム

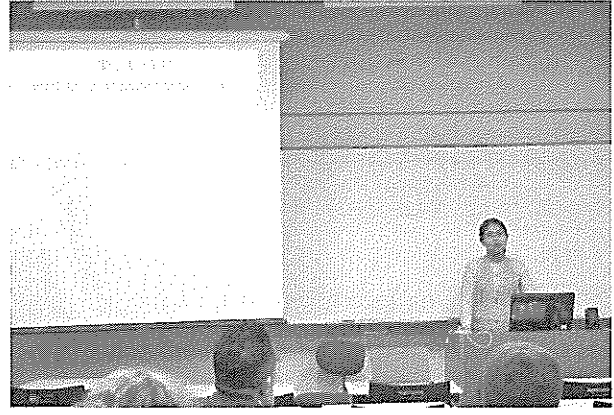
| 科目名 | 担当教員 |
|-------|----------------|
| 日本語中級 | 頓宮 勝 和泉元 千春 |
| 日本事情 | 湯通堂 誠 |

2012年度より日本語・日本文化教育の一環として、本学附属中学校を訪問し、授業参観、及び附属中学校教員との懇談を行った。

さらに、本学での日本語・日本文化学習の成果として、研修中盤（12月）に「私の国紹介」、研修終了時（2月）に「私の日本体験」をテーマとした発表会を開催している。



2012年度「私の国」発表会



2013年度「私の日本体験」発表会



2013年度附属中学校訪問（2013年12月11日）

●文化体験

主に協定校交換留学生、日本語日本文化研修留学生、教員研修留学生を対象として、以下の日本文化体験を実施している。

・日帰り学習旅行

2011年度（2011年5月15日実施）：伊勢神宮

2012年度（2012年11月9日実施）：琵琶湖博物館見学、水荃焼体験、近江八幡散策

2013年度（2013年11月8日実施）：水荃焼体験、水郷めぐり、八幡堀散策

・1泊学習旅行

2011年度（2011年11月11-12日実施） 河口湖

2012年度（2012年5月11-12日実施） 天橋立

2013年度（2013年5月10-11日実施） 三重県答志島

・歌舞伎鑑賞（毎年1月実施）※2013年度はスケジュールの関係で実施せず

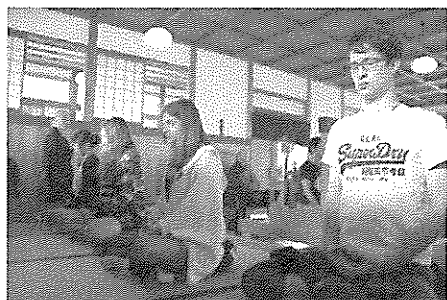
・喜光寺での写経・茶道体験（2013年1月16日実施）

・文楽鑑賞（7月実施）

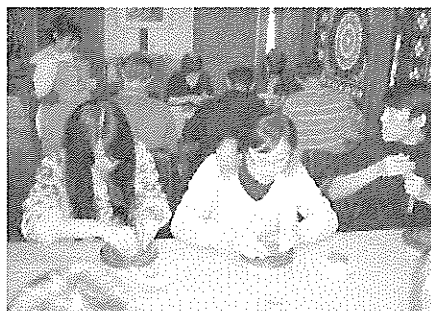
・大相撲観戦（3月実施）

※「大相撲観戦」は大阪大学教育関係共同利用拠点（「日本語・日本文化教育研修共同利用拠点」）事業として実施した。

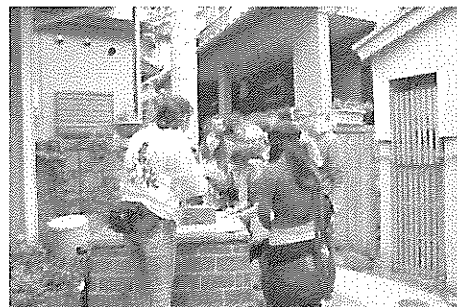
<学習旅行>



天橋立での座禅体験 (2012年5月11-12日実施)



近江八幡での水茎焼陶芸体験
(2012年11月9日実施)

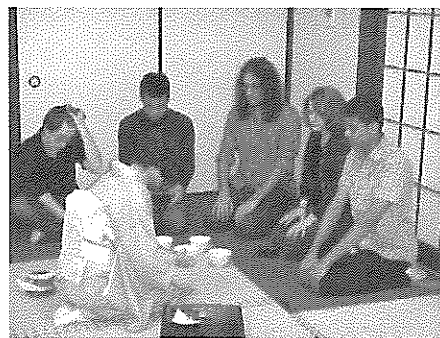
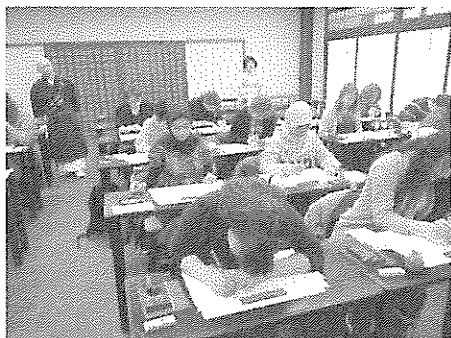


答志島学習旅行
(2013年5月10-11日実施)



八幡堀散策
(2013年11月8日実施)

<文化体験>



喜光寺での写経・茶の湯体験 (2014年1月16日実施)

3-2. 特色ある取り組み

3-2-1. 来日前準備キット

日本語・日本文化研修留学生及び協定校交換留学生に対するレディネス・ニーズ調査、本学留学生プログラムに関する情報公開を目的として、来日3カ月前を目途に「来日前準備キット(プレキット)」を送付した。

米国協定校、特に日本語科目が開講されていないロックヘイブン大学からの受け入れ学生に対しては、来日前に段階的に日本語・日本文化の基本的情報を提供し、本学での日本語学習がスムーズに開始できるようキット内容に配慮した。

来日前準備キットの内容は以下の通り。

<日本語日本文化研修留学生及び協定校交換留学生用>

1. Program guide (本プログラムの概要説明)
2. Questionnaire (レディネス・ニーズ調査)
3. Check list (来日時に持参したらいいもののリスト)
4. Web site (来日前の情報収集及び学習に役立つサイト紹介)
5. Message from SENPAI (本プログラム修了生からのメッセージ)

<米協定校交換留学生用>

①Pre-kit A (プログラム開始3ヶ月前に送付)

1. Program guide (本プログラムの概要説明)
2. Questionnaire (レディネス・ニーズ調査)
3. Pre-task A (事前学習用教材、タスク)
4. Check list (来日時に持参したらいいもののリスト)
5. Web site (来日前の情報収集及び学習に役立つサイト紹介)
6. Message from SENPAI (本プログラム修了生からのメッセージ)

②Pre-kit B (プログラム開始2ヶ月前に送付) / ③Pre-kit C (プログラム開始1ヶ月前に送付)

Pre-task B/C (事前学習用教材、タスク)

3-2-2. 地域、附属校との連携事業

当部門では地域、附属校との連携を強化し、留学生教育プログラムの充実と地域及び連携機関の国際交流活性化への貢献を目指す取り組みを行った。

①地域との連携

<現代日本論>

留学生科目として開講している「現代日本論」では2012年度より、多文化背景を持つ学習者同士との協働による「奈良の伝統」に関するプロジェクトワークを行った。

●授業の概要

【目標】①奈良の伝統に関わる人物へのインタビューを中心としたプロジェクトワークを通して、文化を複眼的な視点で捉えなおし、理解を深めること

②調査・発信するプロジェクトワークを通して、日本語運用力を伸ばすこと

【授業内容】

第1回 奈良のイメージ共有

第2～3回 文化的気づきを深める視点の紹介

第4回 プロジェクトの概要説明と計画

第5～6回 プロジェクト活動日

第7・8回 中間報告会

第9回 発信のための日本語

第10・11回 プロジェクト活動日

第12・13回 最終報告会の準備

第14回 最終報告会

第15回 自己評価と振り返り

【評価】以下の方法で最終評価を行った。

①成果物（中間報告、最終報告）の内容（50%）、②「活動記録（計8回）」と「振り返りシート」（40%）、③自己評価（10%）

●プロジェクトワーク題目

2012年度 ・柿の葉ずし、・元興寺と奈良の寺社仏閣、・新しい祭り、
・奈良のまちや

2013年度 ・現代の人とおん祭り、・元興寺に関する考察、・柿の葉ずし、
・奈良のまちや、・奈良の鹿、・奈良のキリスト教

本実践では、多文化背景を持つ留学生同士が行う「フィールドワーク」を通じた教室外での「体験」とそこでの気づきが、教室での教師を含む他者との共有によって深まっていく様子が観察された（和泉元 2013）。一方、地域の調査協力者からも「留学生とゆっくり話ができてうれしかった」という異文化接触機会に対する満足の声や、「留学生の興味に触れ、奈良の魅力に気づかされた」等、自文化への意識が高まったというコメントが聞かれた。

②附属校との連携

これまで本学附属中学校の異文化理解教育に対しては附属中学教員が主導となって本学留学生を募り、留学生プログラムと連携することなく実施されてきた。2011年度からは、本部門が積極的に関わり、留学生プログラムとの連携を模索してきた。2013年度には留学生プログラム開講科目「日本語教育論」との連携を図り、留学生、附中関係者にとって非常に満足度の高い活動を展開することができた。一方、本学附属小学校は立地的に交流のしやすい環境にありながら、これまで相互交流が行われることがほとんどなかった。そこで、2013年度は附属小学校が行っている「言語・文化」の授業に、留学生プログラム開講科目「日本語コミュニケーション」を受講する留学生が参加する取り組みを試行的に実施した。

<本学附属中学校での模擬授業（「日本語教育論」）>

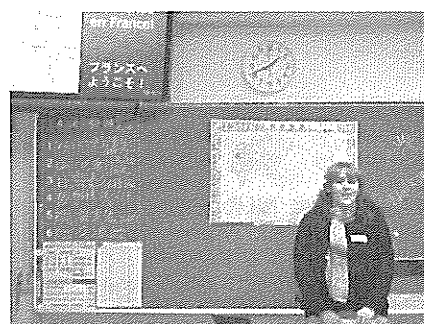
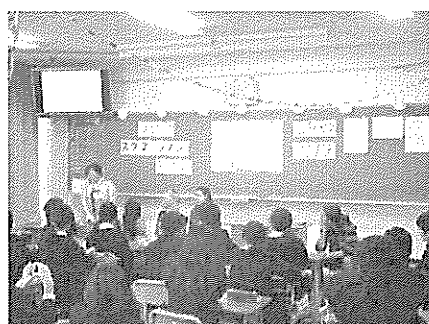
2013年度秋学期に行った本取り組みは、これまで附属中学校主導で行ってきた異文化理解教育への留学生の協力を留学生科目「日本語教育論」の学習内容とリンクさせることで、留学生教育に明確に位置付けたものである。

「日本語教育論」は、初級レベルの日本語を教える際の基本的な知識と技能の獲得を目的とした科

目であり、その中では外国語教育の中で「文化」を扱う際の基本的な考え方を踏まえ「文化」をどのように教室活動に取り入れるかについても扱っている。そこで、附属中学校の異文化理解教育の一部を留学生自身が自国の「文化」を紹介する授業とし、模擬授業（授業の計画と実践）を行うこととした。

本取り組みにおいては附属中学校、本学が双方で事前事後学習を行い、模擬授業の活動が単なる「留学生との交流」に終わらないよう工夫した。

| 附属中学校 | <学習活動> | 本学留学生 |
|---|-----------------------------------|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 来訪する留学生の国について基礎情報を学ぶ ・ 留学生への質問作成 ・ 留学生に紹介したい日本文化を考え、日本文化紹介の活動を計画、準備する | <事前学習> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業デザインのための基礎知識を学ぶ ・ 附中生徒からの質問等を参考にしてレディネス・ニーズを検討する ・ 1組あたり 5-6名で自国文化紹介のための授業教案を作成し、教具・教材を準備する |
| 昼食を一緒に食べる <授業後半 60分> 組ごとに文化を紹介 | 2014年1月24日実施 <アイスブレイク> <授業> | 昼食を一緒に食べる <授業前半 60分> ・ 計画した教案に沿って文化の授業を行う |
| 留学生に英語で手紙を書く | <事後学習> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 文化学習の理論等を学び、実践を振り返る 振り返り内容をレポートに記述する（附中へフィードバック） |



<本学附属小学校での異文化交流（「日本語コミュニケーション」）>

2013年度からは、本学附属小学校が外国語活動の在り方を巡って独自に実践を試みている「言語・文化」の授業に留学生が参加協力した。

【第1回 文化の多様性を知る（留学生との交流会）】（5,6年次共通）

「言語・文化」の授業の第1回となるため、「多言語・多文化への興味、意識の喚起」という本授業をねらいと、留学生を交えての活動に対するアイスブレイクを目的とした授業が行われた。

詳細は以下の通りである。

①事前打ち合わせ：大学教員と5,6年担当検討委員が行い、各担任教員には検討委員を通じて授業概要の説明がなされた。

②授業日時：2013年11月5日（火）11：25-12：05

③参加者：児童（5年次3組、6年次3組）、留学生（4・5名×6組）

④事前学習：

＜児童＞留学生への質問を考える

＜留学生＞日本の教育制度に関するガイダンス、あいさつカード作成、自国紹介、

⑤授業の流れ：

| 活動の流れ | |
|---------------------------------------|---|
| ＜クラス全体（30分）＞ 自己紹介 あいさつあて クイズ | ※黒板に各国のあいさつが書かれたカード（カタカナ表記）を貼っておく 留学生「わたしは＜名前＞です。」 ② 留学生は黒板の前に順に立つ ②児童は黒板のカードを見て、立っている留学生が使うあいさつをあてる ③児童が正しいあいさつを選んだ場合は留学生は自国の言語であいさつを返す（他にも短いあいさつも可） |
| 出身地の位置紹介 | 留学生は世界地図上の自分の町の上にシールをはって出身地の名前を紹介する |
| ショートスピーチ（1人1分） | 留学生は日本に来てびっくりしたことを話す |
| ＜グループ活動（20分）＞ | ・留学生出身地紹介、児童からの質問 ※授業後、留学生も各クラスで給食、昼休みを体験 |

⑥振り返り活動：

＜児童＞振り返り活動（感想文、授業での気づきの共有等）

＜留学生＞言語的、文化的気づきの共有、日本語能力の自己評価

⑦授業所感：

＜担任教員＞異文化理解に対する児童の動機づけ、児童の言語的気づきの場としての意義を評価する一方で、表面的な気づきに留まったとの声も聞かれた

＜留学生＞留学生の主な気づきは以下の通りである。

1) 文化的気づき

・教師と児童の関係や様々な活動に関する気づき

2) 言語的、語用論的気づき

・児童、教員の言語使用に関する気づき

3) 自律的な学習態度の醸成

・自身の日本語能力や行動に対する自己評価と今後の目標設定

＜児童＞

1) 多言語、多文化意識の芽生え

・「外国人＝アメリカ人・中国人」「外国語＝英語」というイメージの変化

2) コミュニケーションストラテジーの使用

・パラフレーズによる言語的挫折の修復

3) 自文化との比較や関連づけによる多文化理解

4) 自律的な学習態度の醸成

・交流後の自主的な調べ学習

今回は留学生が附属小の授業に協力する初めての機会だったため、保護者や他学年の教員の参観もあり、本授業への高い関心が窺えた。参観者からは子どもたちの生き生きとした積極的な参加態度に対して高い評価の声が聞かれた。

【第2回 表記ルールの意識化】（6年次）

6年次にとって第2回となる授業で、韓国語話者である留学生を授業補助者として表記規則を発見する活動を行うこととした。この活動を通じて、既存の知識を活用しながら表記体系の規則を理解する体験を行った。

①事前打ち合わせ：

第1回：6年担任教員全員と大学教員によって授業の目的と大まかな授業の流れが話し合われた。

第2回：大学教員、6年担任教員全員に加え、授業に参加する留学生のうち1名を交えてハングルに関する必要知識の確認や授業の流れの詳細を相談した。

第3回：6年次担任教員と授業協力する留学生とが組ごとに教具の作成（語彙カード等）や授業の流れについての確認を行った。

②授業日時：2013年12月初旬の授業（40分）

③参加者：児童（33・34名×3組）

留学生（韓国語話者1名×3組）

日本人学生（異文化理解関連科目受講生3名）もオブザーバーとして参加

④事前学習：

<児童>ローマ字表記の復習

<留学生>①事前打ち合わせを参照のこと

⑤授業の流れ：

【6年次第2回授業「表記ルールの発見」概要】

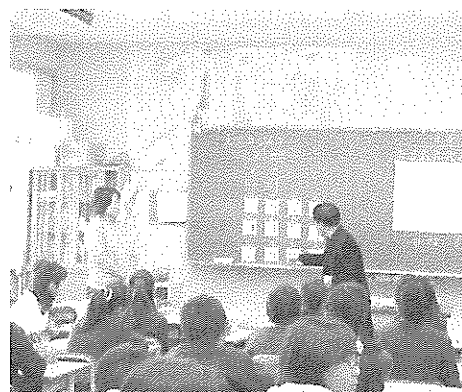
| 活動の流れ | |
|--------------------|--|
| 既存の言語知識の活性化 | ローマ字表記の復習 |
| 未知言語の表記体系から規則を発見する | 留学生は児童の名前(3-4名)（ハングル表記）のカードを黒板に貼る。 児童は既存の言語知識を使って文字の構造を分析する |
| 規則を確認する | 教員はハングルの体系の概要を説明する 留学生は情報を補足する |
| 発見した規則を使ってみる | 児童は発見した規則に従って、いくつかの韓国語（ハングル表記）を読んでみる。留学生は正しい読み方を提示する |
| メタ的言語能力の意識化 | 教員は既有知識を活用して言語を分析的に捉える重要性についてコメントする |

なお、2014年度以降、附属小教員、留学生、将来教育現場に立つ本学学生の三者の協働によって「言語・文化」の授業における附属小児童の学びを支える仕組みを構築し、教員養成プログラムとの連携を視野に入れて、本取り組みを展開していく予定である。グローバル化に対応した人材育成が求められる中、国際的視野に立った教員の養成は教員養成大学にとって重要な課題である。しかし現在までに教員養成大学としての「グローバル人材」の在り方とその育成に関する研究は緒についたばかりだと言える。またこのような動きから、近年協定校との学生交流が推進されているが、教員養成カリキュラム等の問題で留学希望者が少なく、学生の異文化経験の不足が問題となっている。さらに日

本人学生と留学生との双方向交流の有効性が認識されているものの、実際には両者が対等な立場で異文化理解を深めていく場は少ない。大学が有する留学生を含む人的リソースや教育環境を統合的に活用した、附属小学校の外国語活動を中心とした教育実践での協働を通して、教員養成大学における「グローバル人材」育成の在り方、及びそのために必要なカリキュラムの構築を目指していきたいと考えている。



第1回交流会（2013年11月5日）



6年次授業風景（2013年12月10日）

3-3. 日本語・日本文化研修留学生、協定校交換留学生 修了レポート題目一覧

日本語・日本文化研修留学生及び協定校交換留学生については、本学での1年間の学びの成果として、指導教員の指導の下、修了レポートを作成し「修了レポート集」としてまとめている。2010年10月受け入れ～2012年10月受け入れ留学生の修了レポート題目は以下の通りである。表中種別の「日研生」は日本語・日本文化研修留学生、「協定校」は協定校交換留学生を示す。

●2010年10月受け入れ

| 種別 | 学生氏名 | 国/協定校名 | 題目 |
|---------------|--------------------------------------|------------|--|
| 日研生 (大学推薦) | NAJWA FAT HIA | インドネシア教育大学 | 日本とインドネシアの教育制度 |
| 日研生 | Mariia LAKHONINA | ウクライナ | 仏教から見た日本社会 |
| 日研生 | Jovana MARJANOVIC | セルビア共和国 | 日本人の美意識 |
| 協定校 | Oana PAVALOIU | ブカレスト大学 | 日本人大学生とルーマニア人大学生のほめ言葉への返答 |
| 協定校 | Tobias WUERZBURGER | ハイデルベルク大学 | 現代日本社会と宗教 |
| 協定校 | YOON Hyeongseok | 嶺南大学校 | 日本のプロ野球 |
| 協定校 | Charly POISSON | リヨン第3大学 | 日本映画史ー日本映画の特徴ー |
| 協定校 | Yannick BRUSAPORCO | リヨン第3大学 | 日本の部活動 |
| 協定校 | Viktoria ENGELKE | ハイデルベルク大学 | 現代大衆小説の対話体から分かる登場人物の人間関係ー小説シリーズ『心霊探偵八雲』(神永学作)における対話ー |
| 協定校 | Sinziana ZARINSCHI-DOBROG EANU | ブカレスト大学 | 現実の小説か狂気の小説 大江健三郎の『ここより他の場所』と『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』 |
| 協定校 | Magda Cristina URSACHE | ブカレスト大学 | 女のことばについて |
| 研究留学生 | Susanna WALLNER | ハイデルベルク大学 | 浮世絵師の月岡芳年 |

●2011年10月受け入れ

| 種別 | 学生氏名 | 国／協定校名 | 題目 |
|----------------|------------------------------------|---------------|-------------------------------------|
| 日研究生 (大学推薦) | COMSA Sabina Violeta | ブカレスト大学 | 日本の現代文化における古典文学 －「古事記」と「竹取物語」 |
| 日研究生 | HOK Mey | カンボジア | 情感を伝える日本語 |
| 日研究生 | PROSHINA Anna | ロシア | 外国語教育におけるレアリアの使用 |
| 日研究生 | SAGMAN Begum | トルコ | 三島由紀夫『春の雪』について －作家・時代背景・体験からの考察－ |
| 協定校 | KEEN Timothy Charles | ロックヘイブン 大学 | どうして日本の自殺率が高いか －日本の自殺の背景を発見－ |
| 協定校 | DRESP Sina | ハイデルベルク 大学 | 芥川龍之介－生涯と作品－ |
| 協定校 | WEBER Maurice Michel | ハイデルベルク 大学 | 大江健三郎の『個人的な経験』の分析 |
| 協定校 | JOO Seokhwan | 嶺南大学校 | 高齢化社会 |
| 協定校 | GHEORGHE Rodica Elena | ブカレスト大学 | 日本社会におけるシルクロードの影響 |
| 協定校 | EL OUNI Mehdi Stephane | リヨン第3大学 | 江戸時代の画家の自然観 |
| 協定校 | ROUMEZI Benjamin Emmanuel Denis | リヨン第3大学 | 日本の漫画における「繋がり」 |
| 大学院 研究生 | WALLNER Dominic Kajetan | ハイデルベルク 大学 | 神が自身を語る－アイヌのカムイユカラー |

●2012年10月受け入れ

| | 学生氏名 | 国 又は協定校名 | 題目 |
|-----------------|--------------------------------------|----------------|--|
| 日 研 生 (大学推薦) | MUTHI AFIFAH | インドネシア 教育大学 | 初級日本語学習者のための日本語パン フレット・チラシ表現 |
| 日 研 生 (大学推薦) | VISAN Florina Daniela | ブカレスト大学 | 「雨月物語」における食人鬼 |
| 日 研 生 (大学推薦) | STALDER Lucas Kim Thani | リヨン第3大学 | 楽焼、前衛的な焼き物 |
| 日 研 生 (大学推薦) | PULLEM Johan Pablo | ハイデルベルク 大学 | 中国文学史における小説性・虚構性の 成立過程その仕組みと『杜子春』にみ る漢文的理想像の反映 |
| 日 研 生 | BHATT, Srushiti Piyush | インド | 日本の食文化 |
| 日 研 生 | TRAN MAI HUONG | ベトナム | 日本語とベトナム語における主語省略 |
| 日 研 生 | ARDILS QUIROZ Valentina Constanza | チリ | 明治時代の翻訳について |
| 日 研 生 | HEVIA PENNA Pablo Antonio | チリ | 日本においてのアニミズム的思考 |
| 日 研 生 | QUEVEDO HERNANDES Edwin | メキシコ | 日本ポップカルチャー外交 |
| 日 研 生 | HIRSCH Tamara | オーストリア | 草食系男子 |
| 日 研 生 | SHMATENKO Olesya | カザフスタン | 日本語と外来語の使い分け |
| 日 研 生 | GROMADZKI Pawel Sebastian | ポーランド | 新興宗教の天理教から見た日本人の宗 教観 |
| 日 研 生 | SZTAFIEJ Przemyslaw | ポーランド | 日本文学有名人－安部公房－ |
| 日 研 生 | BOC Weronika | ポーランド | 村上龍作『希望の国のエクソダス』に 基づく日本における希望の概念 |
| 日 研 生 | IAKUPOV Ural | ロシア | 日本における国際結婚という社会的な 現象。その歴史、現代状態や問題点 |
| 日 研 生 | CHUPIKOVA Elizaveta | ロシア | 日本語教科書におけるフィラー言葉 |
| 協定校 | FOWLER JR Eric | セントラルミシ | 大衆文化 |

| | | | |
|-----|------------------------------|---------------|--|
| | Demond | ガン大学 | |
| 協定校 | CARNEY Adrian | ロックハイブン 大学 | 日本とアメリカのファッション |
| 協定校 | STARK Ryan David | ロックハイブン 大学 | My Experience in Japan |
| 協定校 | STANCU Andreea Florentina | ブカレスト大学 | ビジネス文化 |
| 協定校 | FAUSER Mitschiko Melanie | ハイデルベルク 大学 | 「急の曲－Symphony for two worlds」 「間」という日本音楽の現象 |
| 協定校 | BRAENDLIN Yannick | リヨン第3大学 | 安土桃山時代 |
| 協定校 | NA Jeahyun | 嶺南大学校 | 日本と韓国の学校教育における水泳 |
| 協定校 | LEE Eunhwa | 嶺南大学校 | 日本の家の構造はどういう風に変わっ てきたのか。 |
| 協定校 | 王玫 | 西安外国語大学 | 日本における謝罪文化の原因に関する 一考察 |
| 協定校 | 金雄豪 | 華東師範大学 | 日本のプロサッカーは中国と比べてど うして強いのか |

2013年10月受け入れ留学生（日本語・日本文化研修留学生、協定校交換留学生）は以下の通りである。（2014年8月に修了レポート集を発行予定）

| 種別 | 学生氏名 | 国又は協定校名 |
|----------------|-------------------------------------|-------------|
| 日研究生 (大学推薦) | LEE MIN HUI | 嶺南大学校 |
| 日研究生 (大学推薦) | BERGER LISA DANIELA | ハイデルベルク大学 |
| 日研究生 (大学推薦) | MUTIA KUSUMAWATI | インドネシア教育大学 |
| 日研究生 (大学推薦) | STANCU ANDREEA MIHAELA | ブカレスト大学 |
| 日研究生 | PANDHARI Sanket Avinash | インド |
| 日研究生 | RODRIGUES Marcos Alexandre | ブラジル |
| 日研究生 | ZEYNALOVA Surayya | アゼルバイジャン |
| 日研究生 | KACHKAN Olena | ウクライナ |
| 日研究生 | PRUULI Tuuli | エストニア |
| 日研究生 | MLAKAR Kaja | スロベニア |
| 日研究生 | KISS Boglarka | ルーマニア |
| 日研究生 | VANDE MERGEL Aaron | ベルギー |
| 日研究生 | NGO Hoang Duc | ベトナム |
| 日研究生 | Pribadi Gita Siwi | インドネシア |
| 日研究生 | DAO Khanh Ngan | ベトナム |
| 日研究生 | KAMINSKI Marcin Marek | ポーランド |
| 協定校 | YEO Juhui | 嶺南大学校 |
| 協定校 | ROBINO Elsa | リヨン第3大学 |
| 協定校 | STOCKINGER Arnaud Jean-Michel Alain | リヨン第3大学 |
| 協定校 | SCHMIDT Nadine | ハイデルベルク大学 |
| 協定校 | 蒋竺君 | 西安外国語大学 |
| 協定校 | 唐瑛 | 西安外国語大学 |
| 協定校 | 黄茜 | 華東師範大学 |
| 協定校 | YING Xiaoqian | 華東師範大学 |
| 協定校 | TIRTARA Alin Gabriel | ブカレスト大学 |
| 協定校 | BOWMAN Eric Colin | セントラルミシガン大学 |
| 協定校 | BREEN Arielle Krysten | セントラルミシガン大学 |
| 協定校 | DOUGLAS Keenan Terrell Maurice | セントラルミシガン大学 |
| 協定校 | BULLMAN Caitlin Elizabeth | ロックヘイブン大学 |
| 協定校 | DOAN Samuel Francis | ロックヘイブン大学 |

4. 学内外における異文化交流活性化にかかる取り組み

前述のように2013年度に「国際的視野に立った教員の養成」が本学の国際交流の基本方針の1つに明文されたことにより、留学生教育が教員養成という本学のミッションに明確に位置けられることとなった。

「国際的視野に立った教員の養成」には、様々な形で異文化体験が不可欠である。本部門では、本学学生に対して、以下の2つのアプローチで異文化体験の場を提供してきた。1つ目は、学内で行われる異文化交流の活性化にかかる取り組みであり、2つめは主に協定校への学生派遣といった海外をフィールドとした異文化交流の取り組みである。

なお、以下の取り組みは2013年度学長裁量経費申請プロジェクト「「国際的な視点に立った教員」の養成のための異文化交流の活性化プロジェクト」（予算規模640千円）に採択されたものである。プロジェクトメンバーは以下のとおりである。

(代表) 和泉元千春 (持続発展・文化遺産教育研究センター・准教授)

岩坂 泰子 (英語教育講座・特任講師)

小島 道子 (実践教育研究センター、ボランティア・サポートオフィス)

頓宮 勝 (持続発展・文化遺産教育研究センター長・教授)

吉村 雅仁 (教職大学院・教授) (50音順)

4-1. 学内における異文化交流活性化にかかる取り組み

4-1-1. 留学生との交流に関する意識調査

本学では前述の通り、日本語・日本文化研修留学生、協定校交換留学生を積極的に受け入れているにも関わらず、日本人学生側の異文化接触への不慣れやカリキュラム上の制約から、日本人学生と留学生の交流が非常に限られたものになっているのが現状である。そこで日本人学生と留学生の交流活性化への取り組みを本格化するにあたって、2013年に日本人学生を対象とした留学生との交流に関する意識調査を行った。

実施日：2013年4月11日（木）、12日（金）、18日（木）、19日（金）

対象：「留学生と友達になろうキャンペーン（4-1-2を参照）」参加学生176名

質問項目：Q1. あなたは留学生との交流に興味にありますか？

Q2. あなたは親しい留学生の友達がありますか？

Q3. (Q2「はい」回答者) 留学生とどのようなきっかけで親くなりました？

(Q2「いいえ」回答者) 留学生となれないのはどうしてだと思いますか？

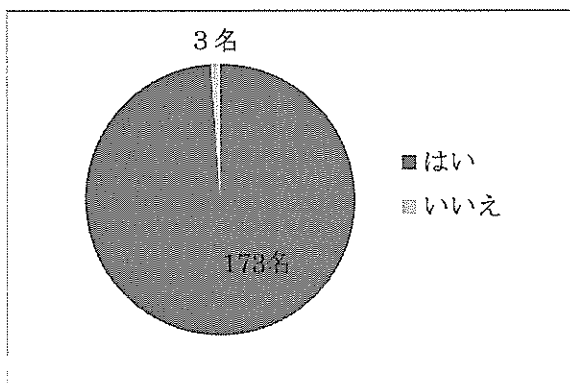
Q4. どんなイベントに参加してみたいですか？(複数回答可)

Q5. いつだったら参加しやすいですか？

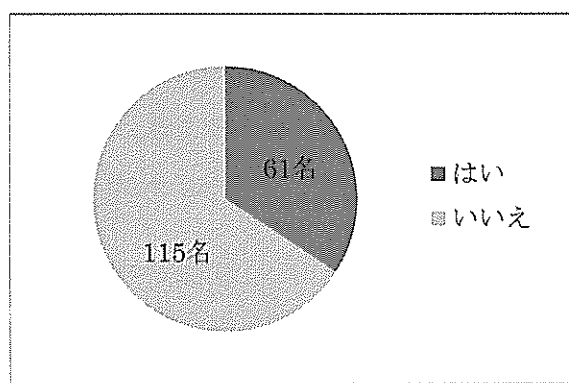
Q6：留学生と交流について意見や要望があれば、何でも書いてください

調査結果

Q 1. 留学生との交流に興味がありますか？



Q 2. 親しい留学生の友達がありますか？



Q 3-1. (Q 2 「はい」回答者) 留学生とどのようなきっかけで親しくなりましたか？

(自由記述回答)

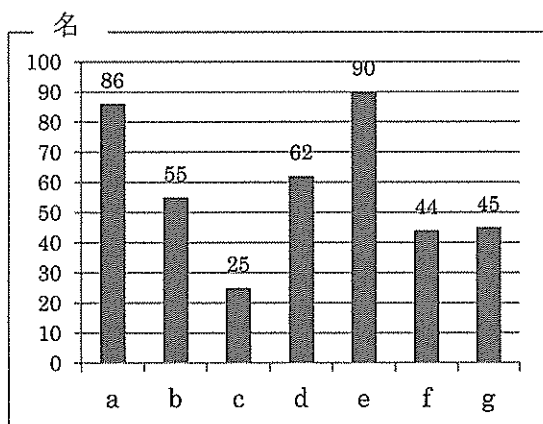
- ・部活やサークル活動 . . . 28名
- ・国際交流室への出入り . . . 3名
- ・同じ寮に居住 . . . 8名
- ・同じ授業を受講、同じ専攻 . . . 5名
- ・国際交流イベントへの参加 . . . 11名
- ・その他 . . . 5名

Q 3-2. (Q 2 「いいえ」回答者) 留学生となれないのはどうしてだと思いますか？

(自由記述回答)

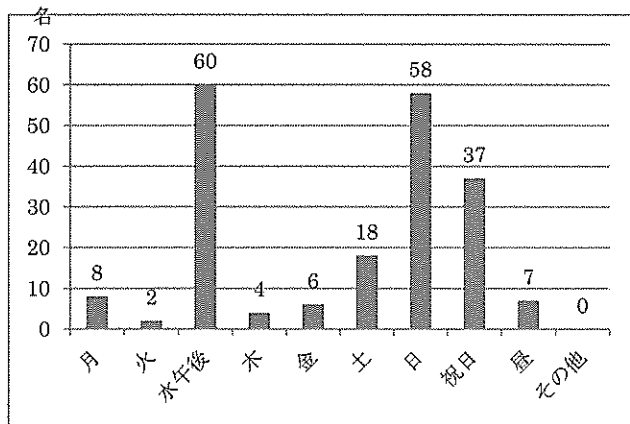
- ・交流・接触機会のなさ . . . 65名
- ・自身の積極性のなさ . . . 28名
- ・英語(外国語)力不足 . . . 8名
- ・恐怖心 . . . 3名

Q 4. どんなイベントに参加してみたいですか？(複数回答可)



- a. 日本語でおしゃべり
- b. 留学生の発表を聞く
- c. 特定の話題について日本語でディスカッション
- d. 外国語レッスン
- e. 外国の文化を体験
- f. 大学近郊の散策
- g. 電車に乗って日帰りピクニック

Q 5. いったったら参加しやすいですか？



Q 6 : 留学生と交流について意見や要望があれば、何でも書いてください

<主な回答>

- ・もっと交流する機会がほしいです。
- ・大学主催の行事がもっとあるといいと思う。
- ・チューターをもう一度やりたいです。
- ・どの人も日本語が上手でびっくりしています。
- ・英語ができないので日本語で話したい。
- ・もっと現地のことが知りたい、出身国の発表会があればぜひ参加したい。
- ・仲良くなりたいです。

調査の結果、「留学生との交流に興味がある」という回答がほぼ100%であったのにも関わらず、実際の交流状況は非常に限られており、その理由として「交流のきっかけがない」「自身が積極的に働きかけないから」といった回答が目立った。留学生との交流に関しては潜在的なニーズがあるものの、消極的な傾向にあると言える。また、自身の英語（外国語力）不足への言及も見られた。実際には本学留学生の多くは一般的な日本語会話には不自由しないレベルの日本語力を有しているのだが、日本人学生側がこれまでの異文化接触不足から「留学生との交流＝英語（外国語）使用」といった先入観を持っており、留学生との交流に躊躇していることが明らかとなった。

また、日本人学生が希望する交流内容の中には既に実施されている内容も散見されることから、国際交流の活動をさらに充実させるとともに、学内広報を徹底させる必要性も認識された。

4-1-2. 学内における異文化交流活性化の取り組みの概要

4-1-1の調査結果を受けて、留学生と日本人が交流を持つきっかけを提供し、自主的な交流への橋渡しとするため、以下の取り組みを行った。

a. 「なつきょん's café」

なつきょん's café は、実践教育開発センターボランティアサポートオフィスの有志が中心となって運営する留学生と日本人学生の交流イベントであるが、継続的な実施が困難となり、不開催が続く状態だった。そこで、2013年度に当部門とボランティアサポートオフィスが協力し、運営を再開することとした。運営再開にあたっては、日本人学生と留学生の協働によって企画運営する

システムの構築をすることとした。

2013年4月には留学生、日本人学生有志による企画運営グループを設置し、教員からは「日本人学生と留学生が対等な立場で相互交流することを目的とする」「継続的な開催を念頭に置いて企画運営にあたる」「将来的には国際交流室の有効活用に繋げる」という3点のみを依頼した。

その後、2013年5月17日にはリニューアル第1回なつきょん's caféを開催した。以降、月1回のペースで企画運営グループが自主的に内容企画、広報、運営、振り返りを行っている。また、この活動を通して海外留学への希望がより現実的、具体的になった者も散見された。

今後、2014年夏季には現在運営を行っているメンバーの大半が留学及び帰国してしまうため、それ以降の継続的な運営体制に関する対応が必要となっている。

<第1回>

日時：2013年5月17日（金）16:30～18:00

場所：学生会館1階

テーマ：ファッション、食べ物、音楽

参加者：留学生12・3名程度、日本人学生10名程度

<第2回>

日時：2013年6月28日（金）16:30～18:00

場所：学生会館1階

テーマ：留学生に聞く、日本でびっくりしたこと

参加者：留学生12・3名程度、日本人学生8名程度

<第3回>

日時：2013年7月31日（水）16:30～18:00

場所：学生会館1階

テーマ：おすすめの旅行先、帰国するとき持って帰る物

参加者：留学生7名程度、日本人学生6名程度

<第4回>

日時：2013年10月22日（火）17:00～18:30

場所：学生会館1階

テーマ：「日本の第一印象」

参加者：留学生16名程度、日本人学生4名程度

<第5回>

日時：2013年11月29日（金）16:30～18:00

場所：学生会館1階

テーマ：留学生と一緒に世界の遊びを体験しよう！

参加者：留学生12名程度、日本人学生10名程度

<第6回>

日時：2014年1月29日（火）14:00-15:30

場所：学生会館1階

テーマ：「もうすぐバレンタインデー！！」

参加者：留学生10名程度、一般学生10名程度

b. 「留学生と国語教科書を読もう」

本取り組みでは、日本の国語教科書のピアリーディングを通して留学生と日本人学生の異文化間（コミュニケーション）能力育成を目指した課外活動を実施した。国語教科書はその性格上、国の文化、時代の価値観が端的に表れ、また本学日本人学生にとって将来の教育現場がイメージしやすい素材でもある。

実施日：2013年11月19日（火）14：40-16：10／11月20日（水）13：00-14：30

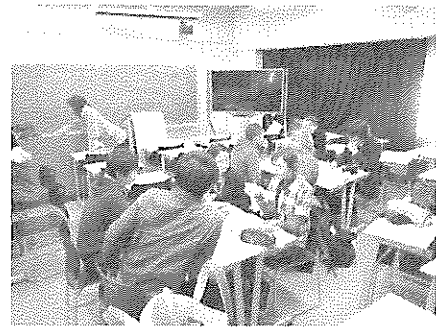
<活動の概要>

第1回 教材のピアリーディング

- ① 事前課題「泣いたあかおに」を途中まで読む
- ② 日本人学生・留学生混合で内容確認
- ③ 話の続きと教訓を考える
- ④ 話の続きを読む
- ⑤ 意見交換

第2回 自文化との関連づけを促す活動：自国の「妖怪」を紹介しあう

上記活動後、参加者に自由記述形式で感想を書かせ、その内容を質的分析した。その結果、留学生・日本人学生双方に日本語使用のモニター、日本理解の深化、日本人の中の多様性を含む他文化への関心等、異文化間能力に言及する記述が観察された。しかし本実践では「異文化間の誤解や衝突に対して効果的な解決（Council of Europe 2001）」が必要な場は生まれなかった。今後ファシリテーターとしての教師の役割や素材の選定等、検討が必要である。



c. 「留学生と友だちになろうキャンペーン」

留学生との交流を通じた異文化交流への興味を喚起するために、本学留学生有志が中心となって「留学生と友だちになろうキャンペーン」と銘打ち、昼休み時間中の食堂前にブースを設置し、留学生が出身地域の文化紹介を行った。

実施日：2013年4月11日（木）、12日（金）、18日（木）、19日（金）

時間：12：00-13：00

場所：食堂前アゴラ

内容

①4月11日（木）<インドネシア・インド・ベトナム・韓国等>

主な内容：民族衣装で記念撮影、自国料理の提供

②4月12日（金）<チリ、アメリカ合衆国、メキシコ等>

主な内容：民族衣装で記念撮影、お菓子の提供、各国の子どもの遊び

③4月18日（木）<ドイツ、フランス、ルーマニア、オーストリア等>

主な内容：各国の写真展示、民族衣装で記念撮影、スナック提供、子どもの遊び

④4月19日（金）〈ロシア、カザフ、中国、ポーランド〉

主な内容：おみくじ付きお菓子の提供、きり絵体験、手作りお菓子の提供、
各国の写真展示

本取り組みは、年に1度の恒例行事としたいと考えていることから、2013年度の参加留学生には、次年度の留学生に向けて引き継ぎのコメントを残してもらった。コメントには、「このようなイベントをする理由を（日本人学生に）伝える必要がある」「日本人と友だちになるチャンスがないと思っても諦めないで！自信を持って頑張ってください」といった日本人の消極性に対して留学生から積極的に働き掛ける必要性があることへの気づきが多く見られた。また、次年度のイベント内容について「日本人も1つのゲームに参加するとみんな盛り上がる」「民族衣装を着たら注目が引ける」「ぜひよかったら名刺を作ってね。連絡しやすくなるため。」といった具体的な方策を助言するコメントも見られた。本取り組みは、ゲストとしての立場にあることの多い留学生が、主体的な態度で大学生活に関わる必要性を認識する機会となったようだ。

上記の他にも、留学生教育プログラムの一環として開催している各種発表会を全学に公開している（3-1を参照のこと）。さらに、学生支援課（留学生担当）によって月1回国際交流イベントが企画されている（例：田植え・稲刈り体験、ならまち散策、若草山ハイキング等）。

上記のような異文化交流イベントの開催においては、多忙な大学生活を送る日本人学生にとって分かりやすく実質的な価値を示していくことが不可欠であると言える。異文化体験に慣れない日本人学生の参加を促すことで学内の異文化交流の裾野を広げていく努力が必要である。

一方、留学生にとっても、ゲストとしてではなく自らが企画運営に関わることによる対等な相互交流によって多くの学びが得られるであろう。また言語的、文化的に多様な背景を持つ留学生を多数有するという本学の留学生教育の特色を生かして、留学生対日本人という安易な二項対立に陥らない工夫も必要である。文化の多様性への意識付けは、国際的視野に立った教員の養成にとって不可欠な要素であると考えられるからである。本学の日本人学生と留学生の交流活性化への取り組みはいまだ十分であるとはいえない現状であるが、新センターへ移行後も引き続き方策を模索していかなければならない。

4-2. 協定校への派遣にかかる異文化交流の取り組み

4-2-1 これまでの派遣実績

総体的に言えば、前述の協定大学の照会でも触れているが、アメリカ及びドイツの大学への派遣が順調で、それに次ぐのがフランスで、全体として受入過多の状態が続いていることは否めない。（派遣実績は66p、表2を参照のこと）

ただ、過去3年間の派遣実績は、2011年が2名、2012年が7名、2013年が8名と、2011年を底に増加傾向にあり、これを維持さらに増加させるための具体的な方策が課題となっていると言える。

以上のことから今後は、派遣先の偏りが是正すべき課題ではあるものの、派遣先大学における学習環境を支える生活環境への懸念も留学する際の大きな要因であることを認識して、留学先の的確な情

報収集に今まで以上務める必要がある。

4-2-2 短期留学に関するアンケート調査結果

本学学生の留学制度に対するニーズ把握と留学制度の周知を目的として、本学における短期留学制度に関するアンケート調査を行った。

実施日：2013年7月

※2013年度前期第2外国語科目の授業終了時に配布

対象：全学1回生（283名）

回答数（回収率）：265（93.6%）

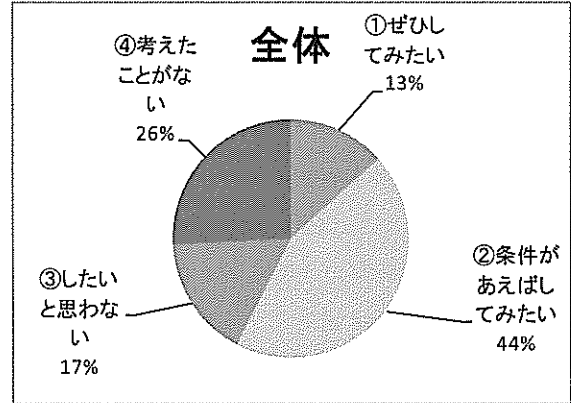
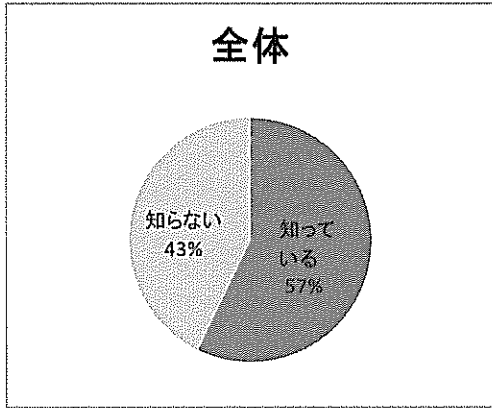
質問項目とアンケート結果の詳細は〈資料1〉を参照のこと。

今後アンケート結果を参考にしつつ、協定校への学生派遣の活性化と交流について検討が必要である。

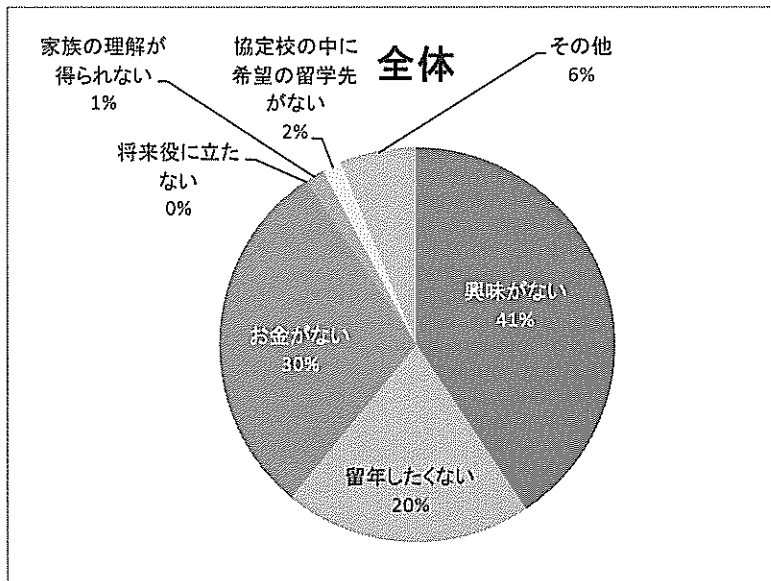
<資料1>

Q1：本学に協定校への半年間または1年の派遣留学制度があるのを知っていますか。

Q2：留学してみたいと思いますか。

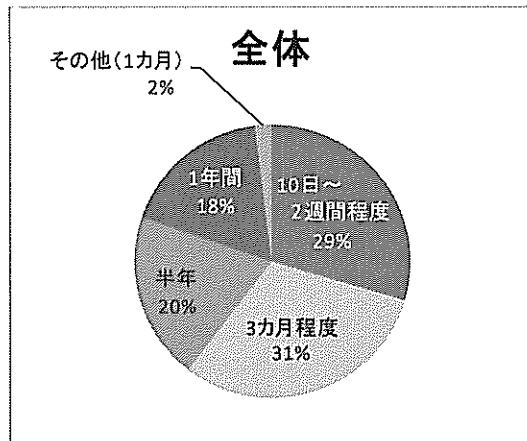


Q3：2の質問で③と答えた人は、以下の質問に教えてください。留学したくない理由は何ですか。

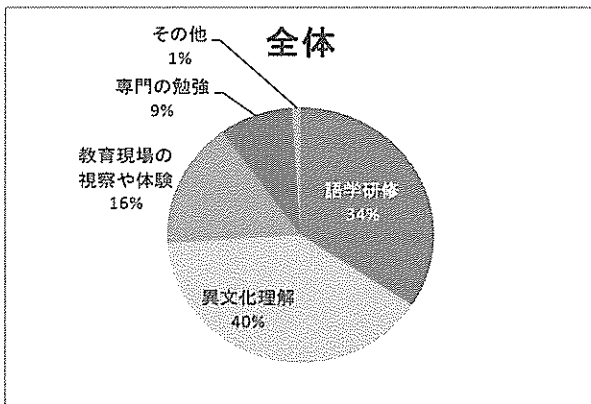


Q4：Q3で①②と答えた人は、どのような留学スタイルを希望していますか。

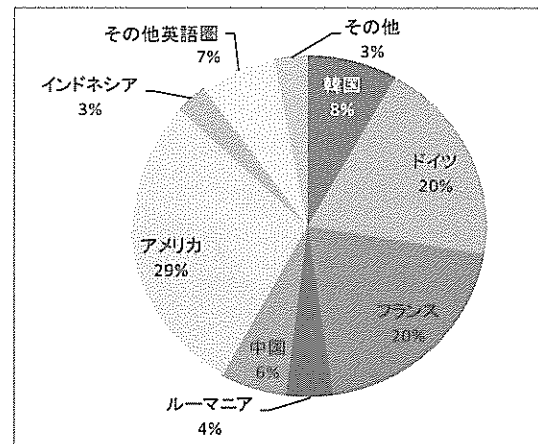
(1) 期間



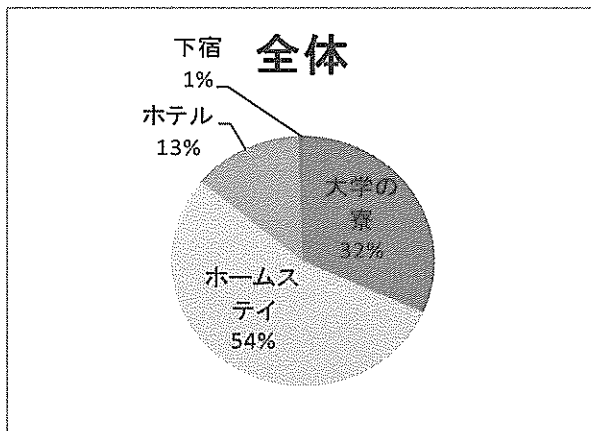
(2) 目的



(3) 留学先

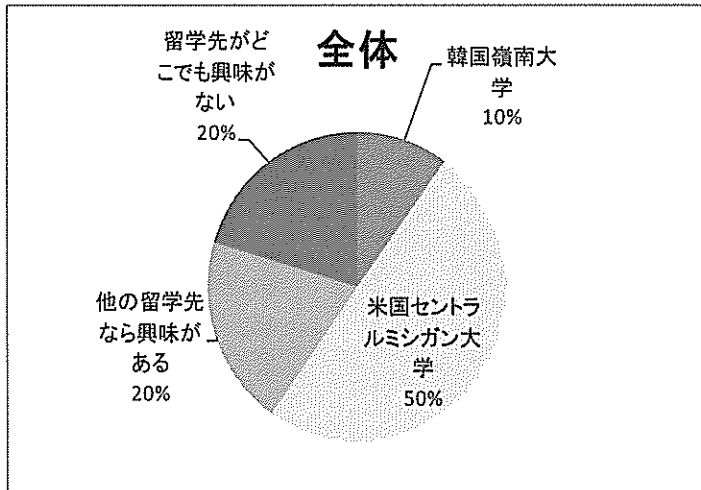


(4) 滞在先

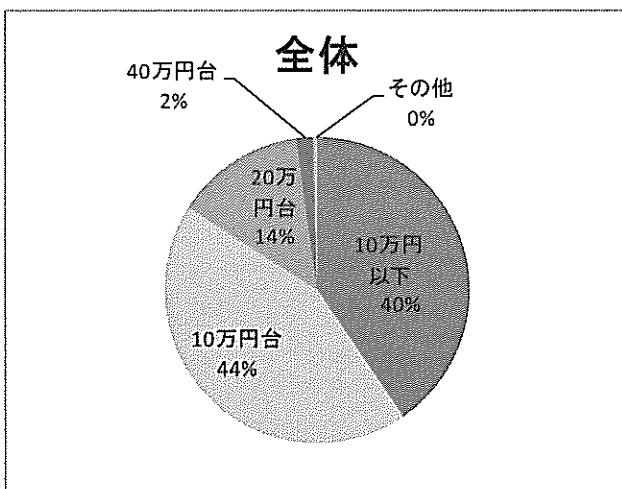


◇短期派遣留学（10日間～2週間）について

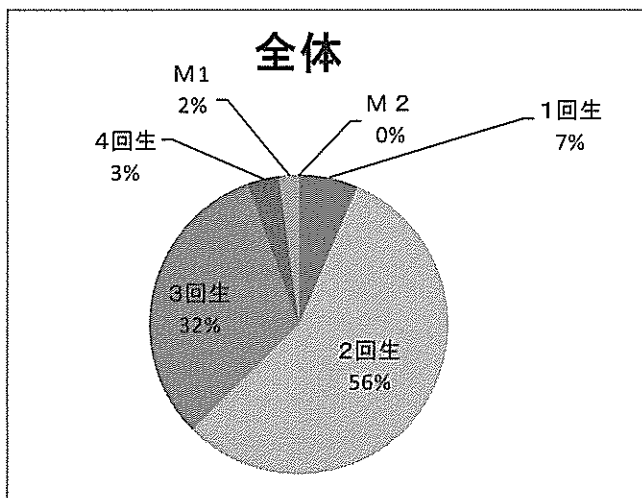
(1) 留学希望先



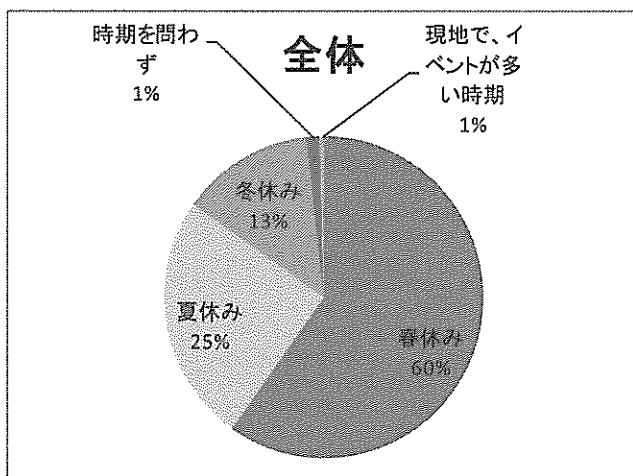
(2) 費用



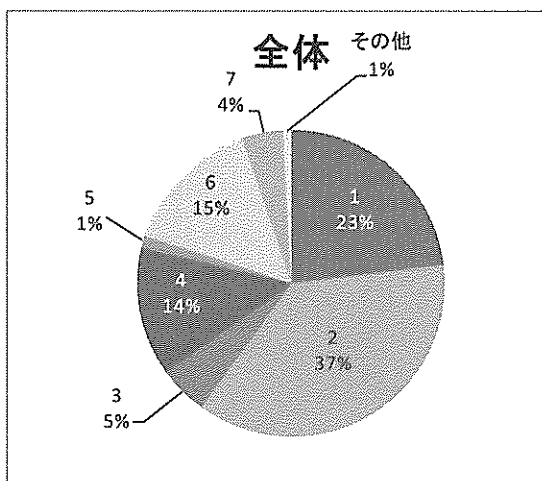
(3) 留学する学年



(4) 時期

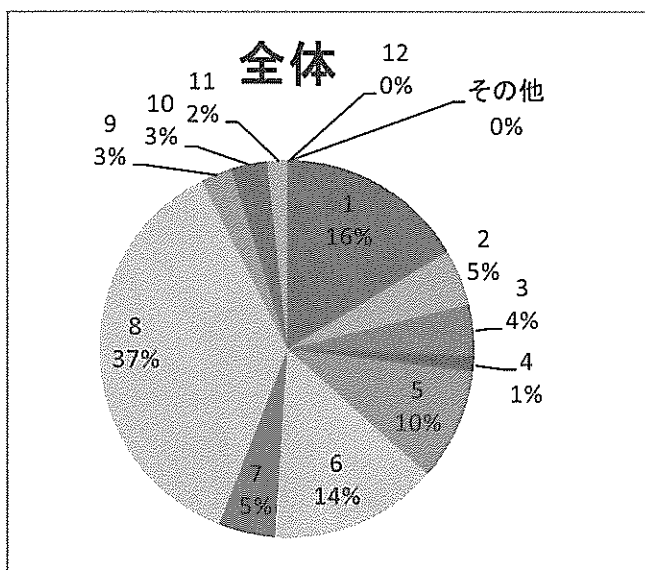


(5) 内容（優先順位 1 位のみ）



1. 語学研修中心のプログラム
2. 現地の文化体験中心のプログラム
3. 教育分野の専門家による講義が受けられるプログラム
4. 学校教育の現場を視察し現場教員と話すプログラム
5. 大学生と教育問題など興味ある話題について討論する
6. 大学生とのアクティビティを通して異文化理解を深める
7. 現地の学校で日本文化などを紹介するプログラム
8. その他

(6) 10日間～2週間の短期派遣留学で重視することを書いてください。



1. 単位互換制度の有無
2. 奨学金の有無
3. 宿泊先の種類
4. 留学前の異文化研修の有無
5. 留学先での安全サポート体制
6. 留学先の治安
7. 現地での日本語使用の可否
8. 留学にかかる費用
9. 課外アクティビティの充実
10. 留学前の語学研修の有無
11. 親の理解
12. 現地での英語使用の可否
13. その他

5. 国際的視野に立った教員養成への貢献

前述の本学における国際交流の基本方針の改正により、本学の留学生教育のミッションの中に、教員養成への貢献という項目が明確に位置づけられることとなった。

そこで、2013年度には本学学生の異文化交流および異文化理解教育に資する内容の講演会・勉強会・ワークショップを開催することとした。なお、留学生の奈良での留学生生活をより充実したものにすべく、本学の留学生教育および日本語教育に関心を持つ地域住民とのネットワークを構築するための場として、本講演会・勉強会・ワークショップは地域にも広く公開した。

①ワークショップ「小学校外国語活動をもっと豊かに—多言語活動から学べること—」

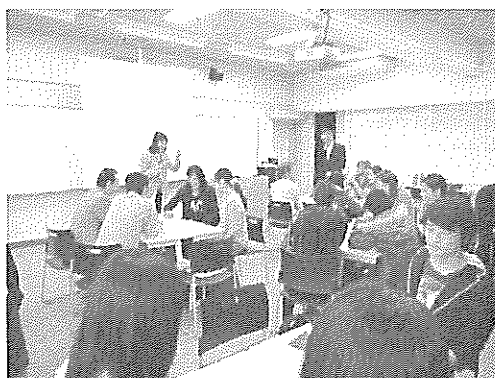
日時：2013年11月9日（土）13：00-15：30

場所：本学206教室

講師：吉村 雅仁 氏（奈良教育大学教職大学院 教授）

岩坂 泰子 氏（奈良教育大学英語教育講座 特任講師）

内容：現在、小学校における外国語の教科化、単一化（英語化）が急速に推し進められようとしている。その一方で、学校教育現場の多言語化・多文化化への対応が求められつつある。相反するようなこれら二つの要請に応えようとする取り組みの一つとして講師らが進めている多言語活動の実践・研究をワークショップ形式で紹介していただいた。



参加者：32名

本学学生・院生（19名）、本学教員（5名）、現職教員（6名）、その他（2名）

②講演会「ことばの力と教育—母語という礎—」

日時：2013年12月21日（土）13：00～16：30

場所：本学310教室

講師：大津由紀雄氏（明海大学外国語学部教授）

内容：グローバル化の進展など急速に変化する社会において「ことばの力」の必要性があらためて認識されるようになっている。本講演ではこれからの学校教育の中で必要な「ことばの力」とは何なのか、また、教員を目指す者にとってどのような「ことばの力」が必要なのかについて、母語を含めた「ことばへの気づき」を育む教育（言語教育）を提唱されている、大津由紀雄先生をお迎えしお話していただいた。「ことばへの気づき」は昨今話題になることが多い「論理的思考力」の育成にも不可欠の要素であり、国語教育や英語教育といった教科の垣根を超えて、「ことばの力と教育」について考えるきっかけとなった。



なお、本講演は人権・市民性教育研究部門、本学国語教育講座中谷いずみ准教授との協働で開催した。詳細は人権・市民性教育研究部門の項（20p～）を参照のこと。

参加者：83名

本学学生・院生（18名）、本学教員（8名）、現職教員（10名）、その他（47名）

③講演会「外国にルーツがある児童生徒の日本語力を考える—JSL対話型アセスメント（DLA）を使って—」

日時：2014年2月15日（土）13：00～16：30

場所：本学308教室

講師：伊東 祐郎氏（東京外国語大学留学生日本語教育センター 教授）

皿木 博幸氏（奈良市教育委員会事務局学校教育課 指導主事）

井ノ口洋子氏（奈良市教育委員会事務局学校教育課日本語指導コーディネーター）

内容：平成24年5月現在、我が国の公立小・中・高等学校に在籍する外国人児童生徒の数は約7万2,000人とされており、その日本語指導の充実と推進は喫緊の課題となっている。日本語指導を行うには、現場の教師が子どもの日本語力を適切に把握し、その子どもに応じた支援を行う必要がある。そこで本講演会では、奈良市教育委員会の皿木博幸氏、井ノ口洋子氏に奈良市の現状と取り組みについて



お話しいただいた。続いて伊東祐郎氏に、筆答テストでは測れない文化的・言語的に多様な背景のある子どもの言語能力を対話を通して測る支援付き評価法「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント（DLA）」を紹介していただいた。当日は「JSL対話型アセスメント」のキットを使って、日本語力測定を体験することができ、実際の教育現場での問題意識を踏まえて、最新の研究成果を理解することができた。

講演会当日は大雪の影響があったにもかかわらず、関西圏以外からも参加者があり、この問題に関する社会的関心の高さが窺えた。

参加者：40名（定員40名）

本学学生・院生（10名）、本学教員（3名）、現職教員（7名）、
日本語指導員（9名）、その他（11名）

以上が本部門が中心となって携わってきた業務であり、これらすべてを次年度から機能する予定の『国際交流・留学センター（仮）』に引き継ぎ、その改良を含めさらに発展させていく予定である。

持続発展・文化遺産教育研究センター活動報告書

発行日 2014年3月31日

発行 持続発展・文化遺産教育研究センター
〒630-8528 奈良市高畑町
国立大学法人奈良教育大学内

印刷 共同プリント株式会社

